

さん じょう し
山城志 第10集

備陽史探訪の会機関誌

1991・4

目次

史話十一題～私観福山の歴史～	田口義之……………1
続 備南中世山城跡の現状	福山ユースドマップクラブ ……18
地名調査雑感	出内博都……………27
知られざる長和庄地頭（寄稿）	小林定市……………34
特別寄稿 水野勝成の軌跡	立石定夫……………41
〈調査報告〉	
正福寺裏山二号古墳測量調査の報告	山口哲晶……………47
——備南に於ける前方後方墳の確認——	
府中市久佐町の地名について	
——榑崎城跡の総合調査概報 I ——	城郭研究部会……………53
仏師定朝と定朝様	熊谷操子……………57
婆沙羅の時代	堤 勝義……………69
備南の珍石 II	七森義人……………72
芦田川流域における古墳の地域的理解のために(その1) 古墳研究部会	……………79
通勤路に沿って	猪原安子……………82
図版 史料紹介 文和2年8月7日付 將軍足利義詮御感御教書(相原文書)	

『山城志』発刊 10号に寄せて

名誉会長 神 谷 和 孝

此度「山城志」第10号が発巻されることになった。昨年備陽史探訪の会が創立10周年の記念行事を済ませたことを考えると1年に1回の割で発行してきたことになる。

この巻頭言を書くにあたって今までの「山城志」を取りだしてみた。最初のうちは手製のプリント刷でページ数も少ない。会費もなく、会員も少ない状態であったから当然と言えよう。それでも当時の会員はなにかを自分達の手で作りたいと燃えていた。「山城誌」とするところを「山城志」とわざと志と言う字を用いたところにも当時の会員の気概がうかがえるのではなかろうか。しかし当時から将来はキチンと印刷され、写真も取り入れた冊子にしたいと言う夢があった。

その夢がかなえられて今手にしている9号はどこに出しても恥ずかしくない冊子である。願わくばもう少し多くの会員の原稿が掲載されたらと考えていた。

幸いに10号は今までになく多くの会員の原稿が集められ、内容も豊かなものになった。

私は会誌「山城志」は備陽史探訪の会の顔だと思う。会員以外の方が「山城志」を読んで備陽史探訪の会の性格なり、内容なりを評価する依りどころにして下さる。

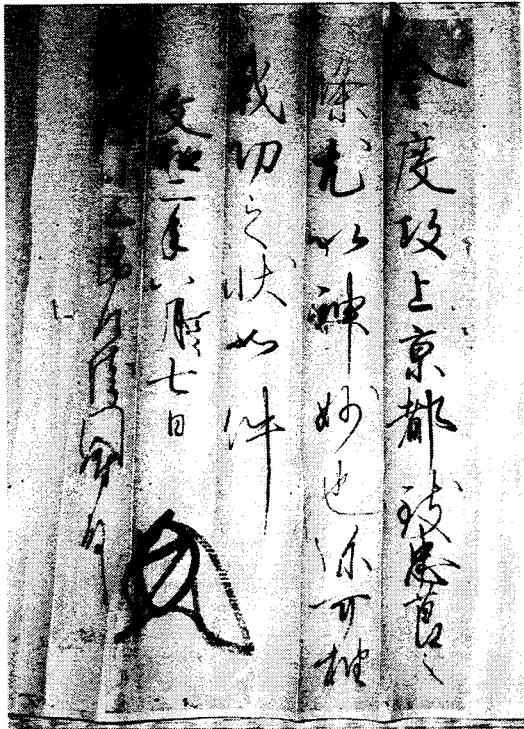
これからはそのような思いをこめて、会の中だけでいい冊子だと喜びあうのでなく、会員以外の方に読んでいただいても喜んでもらえ、参考史料としてもらえるようになればと願わずにはおられない。

10号の発刊を一つの区切りにして、更なる内容の充実を会員の方々にお願いしたい。

史料紹介

文和二年（一三五三）八月七日付 將軍足利義詮御感御教書

○福岡県粕屋郡志免町西念寺梶原学順氏蔵



今度攻上京都致忠節之

條尤以神妙也弥可抽

戦功之状如件

（足利義詮）

文和二年八月七日
（花押）

梶原小三郎左衛門尉殿

（光良）

（本文書表装ノ時切約メシ跡アリ）

史話十一題

私観福山の歴史

田口義之

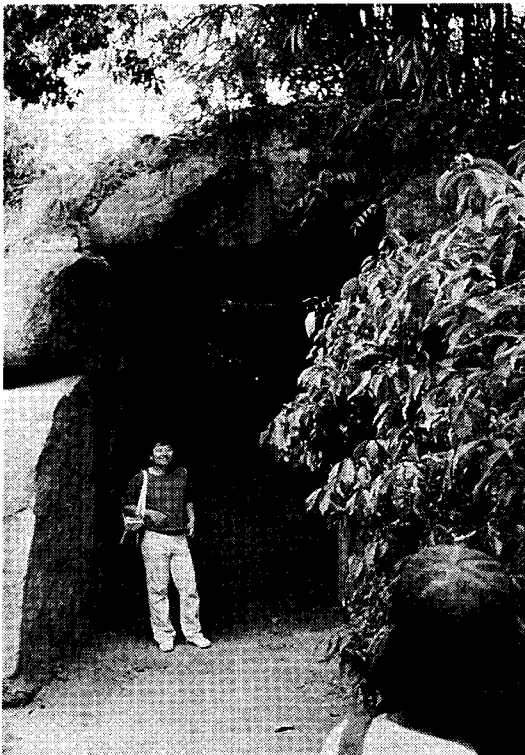
その壱 謎の二塚古墳

数年前、奈良県藤の木古墳が発掘され、豪華な出土品と残された人骨をめぐって論争がくりひろげられた。「古代の大豪族物部一族のものでは」「いや蘇我氏のものに違いない」など、古代史ブームが巻き起こった感がある。福山人には縁遠いと思われるだろうが古代のロマンは中央だけの特権ではない、探せばわが郷土にも古代のロマンは数多くある。

その一つは「二塚古墳の謎」である。二塚古墳といってもほとんど知る人はいない。福山の北部、駅家町法成寺に残る古墳時代後期（六世紀～七世紀）の古墳である。今では住宅の敷地となり、巨大な石室の一部のみが家の裏手に残っている。盛土はすでになく、石材が露出し、石室の前部も住宅の建設によって跡形もない。

だが、石室の前に立つとその大きさに圧倒される。長さ四メートル、幅二・五メートル、高さ三メートルの石室は県下最大クラスで中央のものと同様遜色はない。

謎というの外でもない、この石室の大きさ自体が謎なのだ。



駅家町の二塚古墳

福山地方の四～五世紀の古墳は小規模なものが多い。ところが六世紀後半になると様相は一変する。駅家町の服部大池の周辺に突然巨大な古

墳が出現する。中でも二塚古墳は他を圧倒する巨大さだ。何故だろうか。考えられそうなのは、地名「服部」である。服部は「ハタオリベ」がなまったもので、古代朝鮮半島からの渡来人が住んだ地名といわれる。そういえば、この古墳からはかつて大陸製の金色に輝く「馬具」が出土したそうだ。

二塚古墳の主は、大陸からの渡来人なのだろうか。もしかしたら彼は生前、聖徳太子や藤の木古墳の主と会話を交したことがあるかも知れない。

この稿を書くに当たって、今一度この古墳を尋ねてみた。石室に入ると朱く塗られた壁面は朝露に濡れて、ぶきみに光っていた。古墳の主は我々に何を問いかけているのであろうか。

その式 謎の白塚

初めに駅家町の二塚古墳の謎に迫ったが、実は、二塚古墳の謎はその後に起った異変に較べると小さな出来ごとでしかない。

古代福山の異変とは何か、それは横口式石槨の出現である。

福山市の中心部から北へ車で三〇分、国道一八二号線東城別れの西側山腹に江木神社という正体不明の神社がある。三〇メートル位の石段を登って行くと二百坪程の平地があって、奥に小さな社殿が二つぽつんと建っている。左の平地の端に芝の生えた土まんじゅうが見える。向うへ廻ると南に向いた石室が口を開けている。残念ながら入口は鉄柵で囲まれて中に入ることはできない。中をのぞくと普通の石室の奥に上下、

左右きれいに磨かれた花コウ岩でつくられた石棺が見える。これが横口式石槨で有名な猪子古墳である。

横口式石槨とは、石棺に直接墓道である羨道を取り付けたもので地方では極めてまれなもの。時代は七世紀後半、蘇我氏の専制下にあった大和朝廷は中大兄皇子や中臣鎌足による「大化の改新」によって天皇を中心とした中央集権国家への道を歩んでいた。

権力は天皇を中心とした皇族や有力豪族に集中され、古墳の築造も彼等一部の者のみの特権と化していった。そして、この時期、天皇や皇族、中央の有力豪族の墓制として採用されたのが猪子古墳に見るような横口式石槨であったのだ。壁画で有名な高松塚古墳も同種のものである。

福山地方の横口式石槨は猪子古墳だけでは



県史跡 猪子古墳

ない。猪子古墳から芦田川をはさんで西南へ三キロ。福山から芦田川の土手を車で二〇分程飛ばすと芦田町に入るが、この町の西北、久田谷の山中にあるのが曾根田白塚古墳である。道端に標柱があり、一本道の山道をまっすぐ登って行けば間違うことはない。この古墳は山頂南向きに築造されており、猪子古墳と違って中に入ることができる。奥に切石で築かれた石棺があるのは同じだが、直接石に手をふれることができるのが魅力である。石面は見事に加工され、これが千三百年前のものかと、しばし時を忘れさせてくれる。

曾根田白塚の場合、もう一つ注目すべきことは「白塚」という名称である。何でもないうだが、この名には深い意味がある。猪子古墳でもそうだが、古墳の石室を詳細に観察すると、石のくぼみや継ぎ目に白い固りが残っている。驚くべきことにこれは「しっくい」である。何の目的でしっくいが使用されたのか、謎は白塚の名称が解いてくれる。多分この古墳の内部はかつて一面にしっくいがぬらわれていたのだろう。古墳が千数百年のぬむりをさまされた時、最初に石室に入った人は驚いたはずである。外光に照らされた石室は白く輝いてはいないか。これが白塚の名の由来である。石室が開けられてすでに百余年、今では見る影もないが、こう想像するとかつての白塚がいかに美しいものであったか、また、このような古墳に葬られた人物がいかに高貴な人物であったのか、古代のロマンが広がるのである。

中央にしか見られない高貴な古墳が福山地方に数基存在するのは永遠の謎である。中央から派遣された高官のものか、或は政争で破れ備後で

死んだ年若き皇子のものか、考えるだけでも楽しいではないか。

その参 謎の古代山城

古代は限らないロマンと謎に満ちている。新聞紙上には毎日のように、発掘、発見の記事が載り、我々を楽しませてくれる。考古学の発達により今まで「古事記」「日本書記」によってしか語られなかった古代日本史が土の中から出てくる「物」によって再構築されようとしているのだ。古代の中心地だった奈良県一帯では「長屋王」の邸宅跡や藤の木古墳が発掘され、歴史好きの人達を興奮させているが、我々福山人もただ傍観しているだけでは面白くない。探せば我郷土にも考古学上の「発見」が埋っているかも知れないのだ。

福山地方で、考古学上「未発見」とされている大物には「茨城」がある。茨城とは、日本書記に続く古代史書である「続日本紀」に載っている古代山城の一つで、今まで「ここだ」という遺跡は発見されていない。古代山城とは、七世紀後半、大陸との緊張した関係の中で大和朝廷によって築かれたとされる山城で、主に朝鮮半島からの亡命軍人によって築かれたため「朝鮮式山城」とも呼ばれる。九州や岡山県で確認された遺構で見ると、山頂や多くの谷筋を土塁、石塁で鉢巻き状に取り囲んだ大規模なもので、我々が持っている「城」のイメージからは随分かけ離れた存在である。

古代山城は、九州大宰府の「水城」を最前線として、近畿地方まで十数ヶ所知られているが、備後にも「続日本紀」の記載によって「常城」

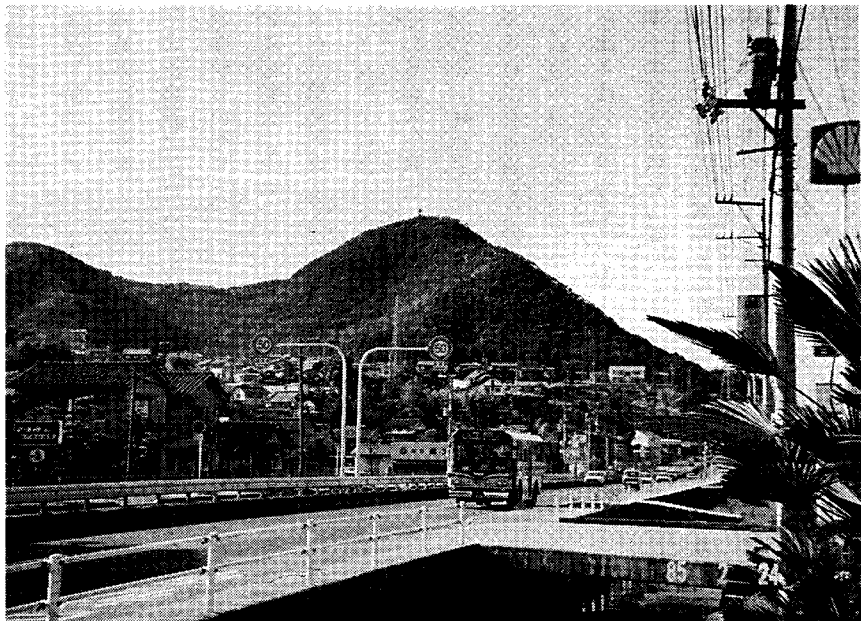
と「茨城」の二城が存在したことがわかっている。常城の方は今迄の調査によって府中市街の北方にそびえる亀ヶ岳山上にあったことが確実とされているが、茨城の方は前述の通り、諸説があつて確認されていない。最初、有力だったのは福山市街の東北にそびえる蔵王山である。常城とも見通しがきき、山上に古代瓦の出土する遺跡があるためだが、その後は積極的に主張する人は少ない。山城としての確たる遺構が残っていないからである。

最近になって注目され始めたのは、加茂町北山の芋原である。この地は、古代の「安那郡拔原郷」の推定地とされ、郷名の「拔原」は即ち古代山城の「茨城」に通ずるといふわけだ。さらに、芋原の地勢と「大スキ」遺構は芋原⇨茨城説を主張する十分な根拠になりそうである。

芋原は、吉備高原南端の標高約四百メートルの台地で、旧山陽道を見下すことができ、台地の周囲は北方を除いて断崖をなし、山城を築くには適した地形である。又、「大スキ」とは、芋原集落をぐるりとかこんだ大規模な「空堀」で、伝説では古代の大人おおひとが大きなスキで作ったとされているが、現地に行ってみるとどう見ても山城の防備施設である。

その大規模さから戦国時代のものとは考えにくく、古代山城「茨城」の遺構とした方が良い。

地元の古老によると、かつてこの「大スキ」上には、地元には産しない「白石」が連なっていたという。この石は、現在ほとんど残っていないが、空堀といい、この列石といい、古代山城の臭いがプンプンとただよっているようである。



茨城説もある蔵王山

その四 まぼろしの深津市

福山市蔵王町はかつて市村と呼ばれた、蔵王山の麓に開けた田園地帯であった。この地は、今では広々とした国道一八二号線が縦断し、昨年春には山陽自動車道福山東インターも開通して現代モータリゼーションの中枢として機能しつつあるが、はるか昔、今から千二百年前にも古代交通の要衝であったことは余り知られていない。

この地は古代文化の栄えた神辺平野から瀬戸内海への出口あたり、奈良、平安時代には極めて重要な位置を占めていた。

備後各地から集められた物産は府中の国府に集められ、一部は旧山陽道を通じて都へ送られたが、大量の物資の輸送には、当時も今も水運を利用するのが一番安上りである。こうして、国府から海への出口には多くの港町が生まれ、栄えたのである。

福山市内でもかつての港の名残りが地名として残っている。吉津、奈良津、深津がそれである。中でも深津は隣りの市村を含めて古代には相当繁栄したようで、平安時代の書物には「深津市」として出てくる。

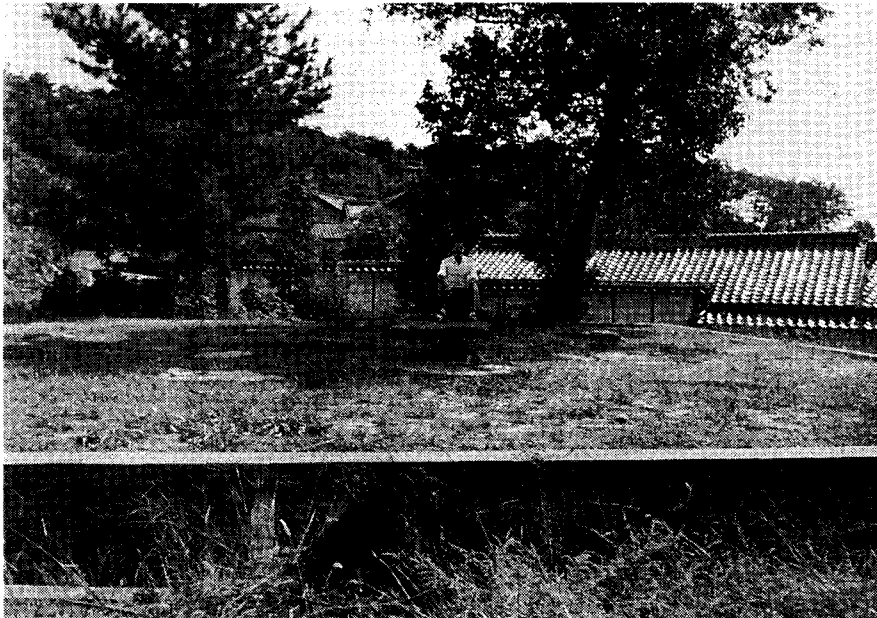
深津は港、市村はその背後で栄えた市場町を意味する地名である。

現代福山人から見ると、何でこんな所に港があったんだ、と不思議に思えるだろうが左にみならず、今蔵王山の南に広がる平地は、ほとんどが江戸時代の干拓によって開かれたもの。これを取り去ると「なるほど」と思えてくる。目をとじて想像してみよう。蔵王山の南麓は人家が密集し、その南端は白波が光っている。西側は深津高地が静かな内海に突出

して西風をさえぎる。南方は引野の高地が半島状に東風を断ち、出口には箕島が浮かび荒波を防いでくれる。

風力と人力に頼っていた古代の船にとってこんなに素晴らしいやすらぎの地はなかったであろう。

深津市、それは現代福山の原形ではなからうか。当時これ程栄えた



国史跡「宮の前廃寺」塔跡（福山市蔵王町）

ころは福山周辺にはなかったのだから。しかし、時の流れと、自然の営みは深津市を過去のものとしていった。静かな内海は次第に遠浅の入船不可能な入江と化し、船は芦田川河口の草戸に着岸するようになった、これが有名な草戸千軒である。深津市の人々も「商い」を求めて草戸千軒の住民となった者もいるであろう。そして、草戸千軒もやがて衰退し、商家は神島市（福山市神島町）へ移り、水野勝成が福山城を築くと、それらは更に城下に移され、現代福山の母体となったのである。

この深津市の繁栄を今に伝えるのが国史跡「宮の前廃寺」である。

近代的な福山市民病院の南の丘に市村の八幡社が木立の間に見えかくれしているが、この神社の境内に奈良時代の古瓦を出土する地があり、「海蔵寺」の跡と伝えられていた。戦後何回か発掘され、この地に五重塔と金堂を持った、立派な古代寺院が存在したことが判明したのはそんなに昔のことではない。今では建物の基盤が復元され、史跡公園として市民に親しまれているが、この古代寺院なども深津市の繁栄がなければ建立されなかったであろう。いわば、深津市の栄華のあかしと云ってよい。

深津に入港する船は海蔵寺の赤い五重塔を目標にしてやって来た。或は港には恋人を待ちわびる万葉の歌人もいたかも知れない。

路のしり、深津島山しましくも、君が目見ずば苦しかりけり

（万葉集卷十一）

その五 古代の津之郷

今度は、蔵王町から眼を西に転じて、芦田川右岸の古代を訪ねてみよう。

芦田川右岸の古代遺跡で、まず注目されるのは細形銅剣が出土した、郷分町の大迫遺跡である。この遺跡は標高三百メートルの高原集落、八反田から東に伸びた山脈が芦田川で断ち切られた突端に位置し、現在は碎石場になっている。

細形銅剣というのは、今から二千年前、中国大陸から渡来したもので、稲作を始めたばかりの弥生日本人にとっては驚天動地の宝物であった。

芦田川右岸、津之郷一帯の古代史を解くカギはこの銅剣にある。

先に、大迫遺跡は、芦田川に臨む高地にあると述べたが、当時、海水は神辺平野にまで流入しており、いわゆる「穴の海」を形成していた。前回述べた通り、陸上交通の未発達であった古代、水運は非常に重要な交通手段であった。

瀬戸内海を航行した古代船は、福山湾（現市街地）からさらに北上して穴の海まで入ったであろう。つまり、銅剣を出土した大迫遺跡は古代の重要航路を見下す位置にあったのである。

古代の航海は、天候と潮流に左右された。古代人にとって天象は神の存在を示すものである。航海の安全は神に祈願しなければならぬ。

その神こそ大迫遺跡の銅剣ではなかったか。細形銅剣は、他に箕島からも出土しているが、箕島、郷分とつなぐ線が古代の重要航路であったこと

とは疑いなく、そして、このことが、芦田川右岸、つまり古代津之郷の繁栄につながったのである。

縄文時代前期に最大の大きさを誇った神辺平野の「穴の海」は、その後の海面の降下によって徐々に面積を縮少し、弥生時代の後半には名残を止めるのみとなり、芦田川は直接福山湾に河口を開くこととなった。大河の河口が重要な港湾となることは今も昔もかわりない。否、古代ではもっとも重要であった。河口は河川交通と海上交通の接点となったからである。そして、この芦田川河口に繁栄したのが古代の港町「津之郷」であったのだ。

「津之郷」とは、奈良時代になって地名は二字の佳字で表記するようになったという、国の命令でつけられたもの（当時は「津字」郷）で、郷は当時の行政呼称である。とすると、元々は単なる「津」の郷と呼ばれていたことが想像され、古代福山人にとって、港（津）と言えば、津之郷が思い浮べられた程、繁栄した港町であったのだ。

古代津之郷の繁栄を示す古代遺跡は数多い。津之郷の背後、赤坂町加屋の山上には大規模な弥生遺跡が存在し、卑弥呼時代の古代城塞ではないか、といわれている。また、津之郷小学校の校庭からは、古代の交易を示す「貨泉」が出土している。貨泉は中国古代の銭貨で紀元一世紀頃鑄造されたもの。貨泉の出土は、かつてここが古代の交易の中心地であったことを示している。古墳も津之郷から赤坂にかけて、それこそ数知れない。巨大なものも多く、有名なイコーカ山古墳は二重の埴輪列を持っているし、坂部（津之郷町）の古墳群には全長十メートル余の巨大石



津之郷町の坂部4号古墳

室を持つものもある。

古代津之郷の繁栄は奈良時代後期に頂点に達したようである。東の海蔵寺と並んで、この地にも古代寺院が建立された。現在は田畑に変じているが、坂部古墳群の南方、真言宗田辺寺の門前からは、かつて五重の塔の相輪（てっぺんの金具）が出土し、寺の境内には塔の中心礎石も残

っている。出土した瓦をみると、その建立は蔵王町海蔵寺よりは、遅れるようだが、それにしても、人々が堅穴住居や堀立小屋に住んでいた時代、青い瓦の五重の塔の出現は容易ならざる事件であった。

津之郷の古代時院は「和光寺」と呼称されたようだが、この寺の盛衰は、津之郷の盛衰と軌を一にしていた。津之郷の港は芦田川の運ぶ土砂によって次第に埋り、港の機能は、平安時代末に出現した「草戸千軒」に譲るようになった。和光寺も衰退し、戦国時代を迎える頃には、うらぶれた草庵同然となつてしまつた。

この和光寺が、田辺寺として再興されたのは戦国後期の永祿年間のこと、津之郷串山城主田辺光吉の手によつてであつた。かつて「津」(港)の財力によつて栄えた寺院が、武士の手によつて再興される。時の流れとは言え、無常を感じさせる出来事である。

その六 備後守護土肥実平

時代の変革は常に戦乱を伴う。古い体制は戦乱の中に滅び、勝ち抜いた者が新しい時代をつくる。

保元、平治の乱で自己の力に目覚めた武士達はそれまでの平安王朝体制を打ち破り、源頼朝を首長として鎌倉幕府を東国に樹立する。この過程が、「源平の争乱」である。

源平の戦いは、真の武家政権の確立をめぐる、源氏と平家の争いであつたと共に、東国と西国という日本国家の二つの潮流のどちらが天下を取るかという地域間の戦いでもあつた。

源氏が主な基盤を関東武士団に置いていたのに対し、平家は瀬戸内地方の西国武士団を存立の基礎としていた。そして、平家の滅亡は東国の勝利を意味し、以来百余年、西国は東国の植民地の観を呈したのであつた。

余談になるが、日本歴史を見ると、政権交替の底流には、常に東国と西国の争いがあつた。古代国家は西国を政権の基盤とし、東国はさながらその植民地であつた。それに対し、鎌倉幕府は関東御家人の政権で、純然たる東国国家であつた。次の室町幕府、將軍足利氏は東国出身とはいえ、幕府は京都に開かれ、西国政権といつてよい。織田、豊臣政権も同様である。近世の江戸幕府は関東を本拠とした東国政権である。江戸幕府の成立が関ヶ原合戦の勝利の上であつたのは、政権が西国から東国に移る象徴的な出来事であつた。そして、江戸幕府を倒したのは、又もや西国の薩長両藩であつた。

さて、話を元にもどそう。鎌倉幕府の成立は私達の住む備後地方にどのような影響を与えたのか。まず言えることは、在地の諸豪族が平家と共に滅び去り、東国武士が源氏の進駐軍として入り、そのまま居付いてしまつたことである。

歴史は勝者に優しく、敗者に厳しい。今、滅び去つた者達のことを記そうと思つても、史料は何も語つてくれない。平家の軍勢を追つて備後地方にも源氏の軍勢が侵入し、激しい戦いが行なわれた筈であるが、それを語ってくれるものは何もない。ただ、当時の記録によると、源氏の軍勢は、元暦元年七月、備後から安芸に侵入したが、六度戦つて六度敗

れ、同年九月、頼朝の弟、範頼の出馬によって、やっと安芸に進駐している。名は伝わっていないが、在地の武士達の反撃はよほど強烈であったものと思える。それは平家に殉ずるといふよりも、侵略者に対する地元の抵抗ではなかつたらうか。

源氏の占領軍として備後地方に君臨したのが有名な土肥実平である。土肥氏は相模の国、今の神奈川県出身の東国武士で、本貫地は小田原市内に属す土肥郷である。実平は源頼朝の拳兵に逸早く馳参じ、石橋山の合戦で敗北した頼朝に「大将の切腹にはそれなりの作法があるもの」と、自刃に逸る頼朝をいさめたことで有名である。源平合戦では陸路、平氏を追った前線指揮官として活躍し、平家滅亡の後、そのまま止まって備後守護となった人物である。

「守護」とは、鎌倉幕府が国々に一人づつおいた軍事指揮官で、平時は国内の治安維持にあたり、戦時には国内の軍勢を率いて將軍の下に馳参じた。いわば鎌倉幕府の分身といつてよい。

坂東武士らしく、備後での実平はかなり手荒なことをやったようである。現在の世羅郡には大田荘という大きな荘園があつたが、地頭でもなんでもないのに、在地の者と手を組んで年貢を横取りしたり、甲奴郡の有福荘でも、非法狼籍の限りをつくすと頼朝のもとに訴えが出ている。

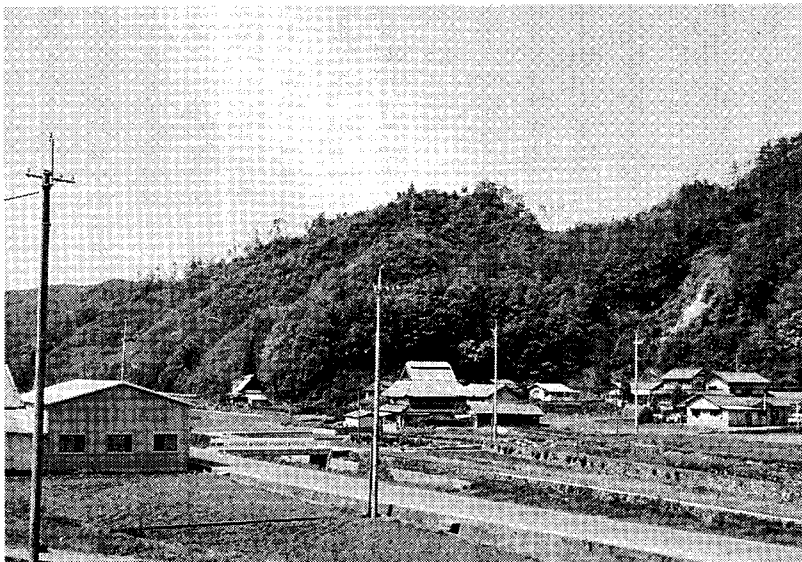
ところで、この実平の居城と伝える山城が福山市内にも残っている。市街の北郊、駅家町服部の谷奥にそびえる泉山城跡がそれである。山頂は平にならされ、山麓には「土居」と呼ばれる屋敷跡が残っている。

八百年の歲月は長い。関東武士、土肥実平の武威に苦しんだであろう

土地の人々のうめき声も、今はもう聞こえて来ない。居城の跡も夏草が繁るにまかせられ、散しく「かわらけ」の破片が往時を語るのみである。実平の備後土着は結局成功せず、子息の遠平は安芸沼田荘の地頭となり、子孫は小早川氏として安芸の豪族として発展していった。

その後も東国武士の備後入部は続くが、南部の福山地方では、それ程顕著な事例は知られない。在地の抵抗が強かつたのであろうか。

福山人の活躍を史上に見るには、あと百三十余年、南北朝の動乱を待たなければならぬ。



土肥実平の拠った泉山城跡

その七 長和庄と長井一族

福山市瀬戸町は、今大きく変ぼうしつつある。東側には「明王台団地」が造成され、市街地に近く、のどかな丘陵と田園地帯の続くこの町が、都市近郊の住宅地に一変するのも間もないことだろう。

かつて、この地は「長和庄」と呼ばれた「庄園」があったところである。京都の蓮花王院の領地で、現在の瀬戸町から佐波町、草戸町、水呑町一带はこの庄園に含まれていた。吉津町から千田町附近を占めた「吉津庄」と共に福山市域では代表的な庄園といえる。

長和庄の地頭として、鎌倉幕府から任命されたのが長井氏である。長井氏は鎌倉幕府の創設に尽力した有名な大江広元の嫡流にあたる名門で、広元の次男時広が武蔵国長井庄の地頭に補任され、「長井氏」を名乗った。ちなみに、後に中国地方の大々名となった安芸毛利氏も大江広元の子孫にあたり、戦国時代毛利元就が備後に勢力を伸ばした時、同族（本家にあたる）の長井氏の存在は大きな力になったといわれる。

長和庄地頭となった長井氏は、当時の慣例に従い、庄園を分割して子孫に伝えていった。記録によると、長和庄地頭職は東、西に二分され、西方は、後に毛利氏の家老となった福原長井氏が伝領し、東方は備北甲奴郡田総庄を本拠とした田総長井氏の所領となった。又、長井氏の系図によると大江広元の孫にあたる泰経は「長和」を名字とした、とあるから、実際に長和庄に來住した長井一族もいたことがわかる。

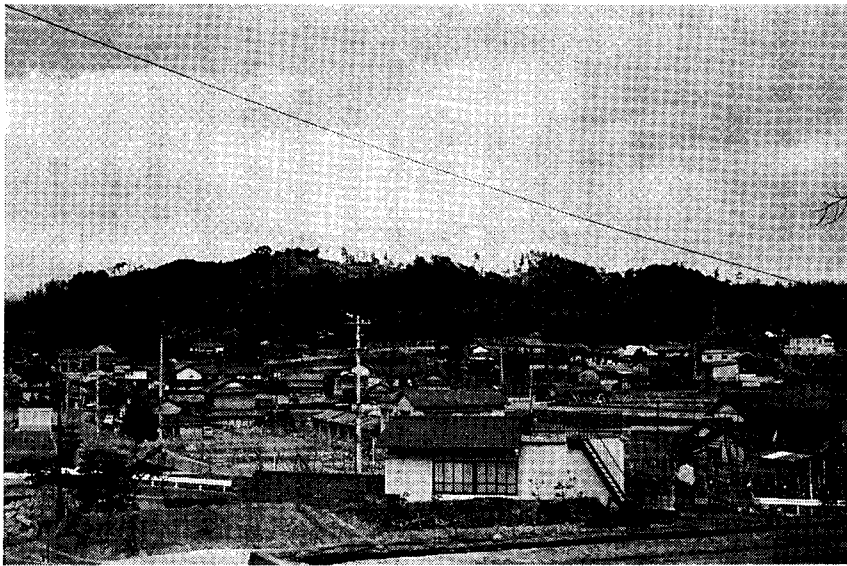
庄園の地頭に任命された武士達は、「泣く子と地頭には勝てぬ」とい

うように武力にものを言わせて、強引に庄園を自分のものにしようとした。当然、庄園領主たる京都の大社寺や貴族と争いが起こる。時の主権者、鎌倉幕府はこの問題に頭を悩ませた。そこで幕府が両者の和解の方法として考え出したのが「下地中分」である。つまり「領家と地頭で庄園を分割してしまえ、そのかわり、両者とも他人の土地には手を出すな」ということである。

長和庄の場合も、領家と地頭長井氏は、この方法で手を打ったようである。現に瀬戸町には「地頭分」という大字が残っている。この地名は、長和庄で下地中分が行なわれたことを何よりも雄弁に物語っている。

余談になるが、我々現代人は「地名」というものを余りにも安易に扱ってはいないだろうか。この地頭分の例のように地名は、その土地、土地の歴史を現代に伝えてくれる貴重な文化遺産なのである。昨今、次々と宅地造成が行なわれ、清水ヶ丘、向陽台等の新地名が次々に造成されている。確かに新しく住宅を持つニューファミリーには明くて、響きのよい地名であろう。しかし、何世代かあとの我々の子孫は、こうした何の重みもない地名の元で生活するのである。これでよいのだろうか。

長和庄に根を下した長井一族を待ち受けていたのは、南北朝時代から戦国時代迄続いた長い戦乱の世であった。長和庄西方地頭だった福原長井氏は早くより脱落し、田総長井氏も、周辺の強力な武士宮氏や杉原氏の侵略に悩まされ、室町中期には遂に撤退の止むなきに至った。又、土着した長井氏も的場山城を本拠とし戦国初期まで踏み止まったが、遂に新たに興った杉原一族のため没落してしまった。武士の長井氏にしても



長和庄の拠点的山城址

所領を確保していくのは容易でなく、領家が力を失うのは必然であった。長和庄も戦国時代、空中分解し、その名は瀬戸町内の大字として残っているのみである。しかし、彼等の残した文化遺産は現代でも生きている。福山市民の誇りである、草戸町の明王院五重の塔は、長井一族の外護の元に建立されたといわれ、川底のポンペイといわれた「草戸千軒町」遺

跡も、地頭長井氏の保護のもとに栄えたといわれる。共に現代の厳しい競争社会では何の実益も生まない過去の遺物だが、多忙な生活の中で赤い五重の塔を仰ぐひととき、或は芦田川の河原に立って過去の草戸千軒の繁栄を偲ぶ時、心の安らぎを感じるのは私だけであろうか。高度に発達した現代社会、だからこそ、こうした文化遺産を大切に守っていかなければならないのである。

その八 熊野町一乗山城跡

「夏草や、つわものどもが、夢のあと」

中世の山城跡を歩く時、常に去来する一句である。中世は山城の時代と言ってよい。村々に割居した武士達は、小さな山城を拠点に、自己の力を試そうとした。中世の治乱興亡を実感するには、こうした山城を訪ねるのが一番である。

福山市にも、一般の人が気軽に行ける山城跡が何ヶ所か残っている。中世の武将渡辺氏の拠った、熊野町の一乗山城跡（市史跡）もその一つである。

熊野町の中心六本堂で左折、広々とした田園の中を登りつめると、熊野水源地の巨大な土手が眼前に迫ってくる。この土手に立って水面を眺めると逆三角形の山が水面に映っている。これが一乗山城跡である。

登り口は山の西側にある。土手上の道を数百メートル進めば左手に大きな看板が見える。細い山道は地元の人々の手によって整備され登り易い。汗をかきながら登ると数分で石段の広い道に出くわす。中腹に城の

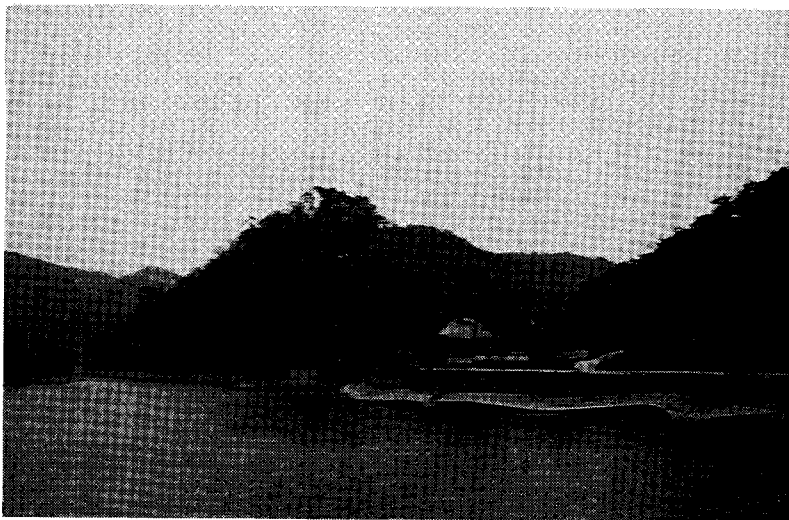
守護神として祀られた神社があつて、その参道として作られた道である。今は余り利用されないうらしく、城の登山道のぶつかるところから下は草ボウボウである。この参道を少し登ると急に視界がひらけ、眼前にガラス窓のはまった社殿が見える。これがかつて城の鎮守であつた「七面大明神」である。聞き慣れない名だが、城主渡辺氏が熱心な日蓮宗徒であつたため、その守護神を祀つたのである。

社殿のあたりから、目を凝らすと、山城の遺構が、そここに見え始める。社殿の背後に本丸への登り口があるが、この部分はよく見ると土塁状に盛り上り、道の左右は人工的に削り取つてある。山城用語でいうと、これは空堀の一種で、空堀と呼ばれるもの、この城の場合、丁度、本丸への入口を守るように築かれていて、ここに城門があつたと想像される。ここから数分、胸を突くような急坂を登ると、本丸である。

途中、左右に平坦地が見られるが、この説明は後に譲る。

山頂本丸は、径二〇メートル程の楕円型の平坦地で「本丸」と刻んだ石柱が立ち、広場は地元の人々が年一度、下草刈をされるそうで、歩き易い。広場の南側（奥）に石垣で囲まれた台地がある。近世の天守台にあたる部分で、白亜の天守閣はなかつたにしても、物見櫓状の建物が立つていた所である。この台地に立つと、城の占地や形状がよくわかる。台地の背後の山続きは、深い空堀によつて断ち切れ、廢城から、四百年たった今日でも、一度落ち込むと、上つて来れそうにない。城は尾根続きを、この空堀によつて断ち、本丸のある部分を独立させ一個の城郭としてゐるのである。

本丸を守るために築かれたのが、登る途中の左右に見えた平坦地である。本丸の端にそつて一巡してみよう。五メートル位下に、幅七メートル程の細長い平地が、本丸をはち巻状に取りまいてゐる。これは帯郭と呼ばれる本丸を守る陣地の跡である。矢竹を踏み分けながら、郭の跡を歩くと、本丸側の斜面に、石垣が崩れ残り、在りし日を偲ばせてくれる。



熊野町一乗山城跡

山城で一番重視されたのは「水源」である。いかに峻険な山城でも水がなければ数日ともたない。この城の水源は、本丸の東側にあった。

七面大明神の社殿の左側に水源への道がある。百メートル程進むと、岩盤をくり抜いた井戸が残っている。数年前、地元の人々が水を抜いて調べたところ、底に小さな石が置いてあり、水神を祀ったものと推定された。さもありなんである。山城にとってそれ程水は重要であったのだ。

もう一度、本丸に登ってみよう。眼下に城主が支配した熊野盆地が広がっている。やゝ盆地の奥にかたよりすぎている感もあるが、記録によると城下東側の道は、かつて山陽道から鞍へ越す街道であったようだ。城はこの街道をも意識して築かれているのだ。

松頼に身を任せながら、しばし瞑目してみよう。疾風どとうの乱世、この城も幾度かの攻防戦をくり返したであろう。迫り来る軍勢の雄叫びが聞こえて来そうである。

その九 中世の松永

松永の庄園 中世は庄園の時代である。庄園とは中央権門の私的な領地で、平安時代末から全国各地に設けられ、中世を通じて地域の基本的な呼称となる。

松永附近にあったとされる庄園には、新庄、福田庄、藁江庄などがある。もっとも早く史料に現われるのは藁江庄（金江町附近）で、平安末の史料に見え、京都の石清水八幡宮領となっている。他の庄園については、庄園領主名は明らかでないが、いずれも平安末から鎌倉初期にかけて、

在地領主が、その私領を中央権門に寄進して、庄園化したものであらう。

大庭氏の入部 鎌倉幕府は、守護、地頭を各地に配して全国を支配したが、松永地方では建保元年（一二一三）、大庭三郎景連が新庄の地頭として入部している。大庭氏は、坂東平氏の名門で、相模国大庭御厨を本貫地とした有力な関東武士である。同氏は、この地に入部するにあたって新庄の中心、本郷（福山市本郷町）に大場山城を築き居城とした。その後一二代平右エ門景秀の代、天文九年（一五四〇）までこの地に居城したという（芸備風土記）。

杉原氏の高須入部 福田庄は、福山市芦田町から、尾道市高須町にかけての広大な面積を占める庄園であったが、この内尾道市高須町附近は、「福田庄の内、高須」と呼ばれたように、独立的な傾向を持ち、鎌倉時代には御家人の山鹿氏が地頭職を有していた。

南北朝内乱に際して、足利方として活躍した杉原信平は、観応二年（一三五二）二月、尊氏より勲功の賞として、「福田庄高須」の地頭職を与えられた。信平の子孫の一流は、高須に本拠を構え、「高須杉原氏」として松永西部にも勢力を振うようになる。

古志氏の入部 戦国時代、この地方で最も有力だったのは古志氏である。古志氏は佐々木氏の一族で、出雲（島根県）を本拠とする武士であるが、同氏が松永地方に勢力を持つようになった発端は明らかでない。一説には、応永八年（一四〇一）、備後守護代として入部したというが、ともかく戦国初期には、新庄大場山城の大庭氏を追い、この地にすっか

りと根を下した国人武士として近在に威を振った。

渋川氏と藁江庄 藁江庄は室町時代にも石清水八幡宮領として存続しているが、在地は請負代官に任せていたようで、その支配も次第に有名無実化し、長享元年（一四八七）頃には年貢は全く送られていない。

この庄園で特筆すべきことは、塩年貢の存在が挙げられる。文安三年（一四四六）正月の藁江庄家分塩浜帳に、「ナタ浜二一桶、道姓カイバラ」とあって、沿岸部庄園としての特色を示している。

戦国時代、この庄園を支配したのは渋川氏である。渋川氏は、足利氏の一門で代々九州探題を世襲した名門で、同氏の所領は近隣の沼隈郡山南にもあった。渋川氏が何故この地に勢力を持つようになったのかは不明だが、九州を没落した渋川義陸は、永正年間（一五〇四～一五二〇）備後国御調郡八幡庄（三原市八幡町）に本拠を置き、名門として備南地方に覇をとまえ、勢力の確立に狂奔している。しかし、渋川氏は、義陸の奔走にもかかわらず、在地に勢力圏を確立するのに失敗。早くも天文年間には藁江城（赤柴城か）を小早川隆景に預け、その保護下に入っている。

毛利氏の征覇 戦国期の松永地方は、山陰から南下する尼子氏と、防長の大内氏、安芸の毛利氏との抗争の場であった。特に、古志氏は尼子氏との関係が深く、この地方の尼子方の重鎮として、毛利氏の攻撃を受けている。

しかし、高須杉原氏などは早くより毛利氏に味方し、古志氏も天文年間には毛利方となっている。又、渋川氏も義陸の子義正はその妻に、毛

利元就の娘を迎え、毛利氏の一翼を荷なっている。こうして戦国時代の後期には松永地方は毛利氏の領国となり、やがて近世の開幕を迎えるのである。



大場山城址に残る石垣

その拾 山名理興ただあき

時は戦国時代、室町幕府の權威は全く地に墜ち、全国至るところ、弱肉強食の争いがくりひろげられていた。

福山地方も同様である。幾多の群雄が興り消えていった。今回は、この群雄の一人山名理興をご紹介し、戦国福山の面影を偲んでみたい。

山名理興は、山手町の銀山城主として興り、一時は神辺城主として、備後半国に号令した人物である。

理興の出自は、他の戦国武将の例にもれず、明らかでない。一説に、備後の名族杉原氏の出と云うが、異説もある。

理興が群小の山城主の中から頭角を現わしたのは、戦国もたけなわの天文年間（一五三二～五五）のこと、当時中国地方を二分していた、大内、尼子の争いをたくみに利用してのものだった。

理興は初め、大内方に組していた。そして天文七年（一五三八）、大内氏の命によって、尼子方の山名忠勝の拠る神辺城を攻略、忠勝にかわって神辺城主となったのである。

神辺城主となった理興は、大内勢力をバックにして、一躍備後群雄中のトップにおどり出た。大内氏は、理興を信頼し、備後南部の支配権を彼にゆだねたのだ。

この時期、理興と同じ立場にあったのが、隣国安芸の吉田に興った毛利元就である。元就もこの頃、大内氏の下にあって安芸に勢力をたくわえつつあった。

両者の明暗を分けたのは、出雲尼子氏に対する姿勢であった。

毛利元就は、徹底して尼子と対決し、天文九年、尼子三万の大軍を吉田郡山城下に迎えた時にも断呼として籠城し、終に撃退することに成功した。この勝利は、元就の戦国武将としての声望を決定的なものにした。

これに対して理興は、大内から尼子方へくら替えすることによって勢力を拡大しようとした。

天文一〇年（一五四一）、尼子の敗北を見た大内は、この機会に一気に尼子を踏みつぶそうと、出雲遠征の軍を興した。

しかし、尼子の本拠、富田月山城は、難攻不落の名城、尼子の勢いもこの頃はまだあなどりがたいものがあった。

戦いは長期戦となった。

そこで起ったのが山名理興を始めとする有力武将の尼子方への寝返りであった。大内勢の一角をなしていた武将達の一部が月山城を攻撃すると見せかけて、城中に走り込んだのだ。

本国（山口県）からはるばる遠征してきた大内軍にとって、この裏切りは致命的であった。たちまち大内勢は崩れたち、本国目指して逃げ出した。尼子方となった理興は、神辺城へ帰ると、ただちに出陣し、昨日までの友、大内方に対して攻撃を開始した。自己の野望を遂げる絶好の機会と勇み立ったのだ。

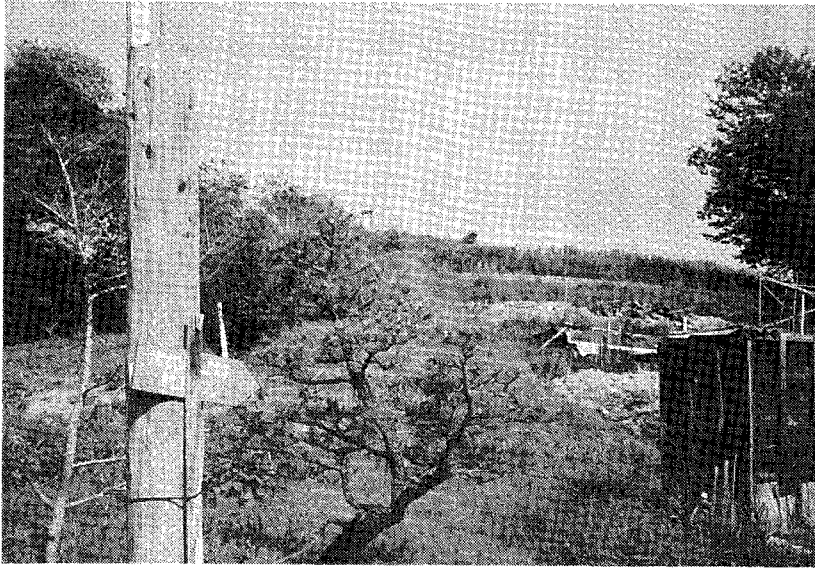
理興の兵は、備南を席卷し、隣の安芸国椋梨（賀茂郡大和町）にまで進入した。

しかし、理興の運もここまでであった。理興が充分勢力を拡大する

ともなく、大内方の反撃が始まったのだ。安芸には毛利元就がいた。この希代の名将は、あくまで大内方に踏み止まり、理興を粉碎することで備後にも勢力を伸ばそうとしたのだ。

ここに足掛七年に及んだ神辺合戦が始まった。

大内、毛利の反撃は素早かった。安芸に進出した理興兵を撃退すると、



“坪生要害” 清水山古戦場（福山市坪生町孤原）

きびすを接って神辺城に押し寄せたのだ。

理興方もよく戦った。福山地方のあちこちで理興対大内、毛利の激戦が行なわれた。坪生町の清水山合戦は、この時、大門から進撃した大内勢を理興方が出城を構えて迎え討ったもの。

しかし、この戦いも大内方の勝利に帰し、籠城七年目の天文一八年（一五四九）九月、理興は出雲に逃走、神辺城は大内氏の手に帰した。

ここで理興が勝っていたら、或は毛利元就はなく、戦国大名山名理興が誕生し、歴史に大きな足跡を残していたかも知れない。

理興は、その後毛利氏に詫言を入れ、許されて神辺城主に復帰したのもつかのま、弘治三年（一五五七）春、死去。死因は中風であったという。

理興の死去を以って、福山地方の群雄争覇は終り、戦国大名毛利氏のもとで、近世の開幕を迎えることとなる。

その拾遺 福山の誕生

現在の福山があるのは、福山人なら誰でも知っている、水野勝成の福山築城によることはいまでもない。

しかし、勝成はなぜ、福山城を築いたのだろうかということになると、そうは簡単に問屋がおろさない。

一般的には、勝成は、はじめに与えられた神辺城を、北面する不吉な山城として好まず、新たに水陸交通の要衝として、現在福山城のある、常興寺山の地を新城の適地として認め、備後十萬石の鎮所としてふさわ

しい新城と城下町を築き、これが現在の福山の基礎となったと言われる。確かに、一々もつともで、大筋では間違いなからう。しかし、勝成の福山築城に至るまでには、それなりの背景があるはずで、その背景をしっかりとらえないと、真に福山築城の意味を理解したことにはならない。

勝成以前、福山地方を領していたのは、福島正則と毛利氏である。

福島正則は、関ヶ原合戦後、広島城主となり、安芸、備後の大名となったが、芸備に内部すると、最初に行なつたのは、領内の要所に出城を築き、防備を固めることであつた。

福山地方に置かれた福島氏の出城は、神辺城と、鞆城で、共に南北朝時代以来の伝統をもつ古い城である。もちろん、福島氏は両城とも改築し、近世的な城郭としているが、水野氏以前の福山地方の中心が、神辺と鞆に分れていたことは、勝成の福山築城の理由を探る大きなヒントになる。

神辺城は、山陽道を見下す山城で、陸上から東（江戸）を目指す場合、関所の役割を果たしていた。鞆城は、古くから瀬戸内海の高瀬であつた鞆を押え、海上交通の要である。

勝成は、西国の外様大名を押えるために備後に配された徳川の譜代大名であり、その重要な使命は、幕府の軍事的な押えとなることであつた。

勝成は、はじめまよつたであろう。神辺では海を押えられないし、鞆では陸を押えられない。そこで考えられたのが、常興寺山への築城である。ここなら山陽道も近く、海にも面している。

神辺と鞆、この両者の長所を取って福山築城となつた。いわば、福山以前、備南の中心は二つに分れていたのを、勝成は一つに統一したと言えようか。

備南の中心が神辺と鞆に二分していたことは、勝成以前の支配者にとつてもめんどろなことであつたらう。福島氏の場合、本拠が広島だったため、余りこの問題に頭を悩ました形跡はないが、毛利氏の場合は、福山湾岸に新城を築き、この問題を解決しようとした形跡がある。

天正年間、毛利氏は神辺城に元就の七男毛利元康を配したが、古書によると、元康は慶長初年、現在の深津高地の南端、王子山に新城を築き、本拠を神辺から深津に移そうとしたと伝える。王子山城の跡は明確でないが、このことなども、勝成の福山築城の意味を考える場合、見逃がしてはならないことである。

ともあれ、福山は、神辺と鞆という中世以来の政治の中心を統合する地として出発した。いわば、福山は備後の中心として新たに作られた町といえようか。

現在、果して福山は備後の中心地としての役割を十分はたしているといえるだろうか。我々未来の福山を背負う者の責任は重いのである。

（おわり）

続 備南中世山城跡の現状

福山ユースドマップクラブ

(収録山城跡) 西山城、滝山城、竜王石山城、山王山城、要害山城、山戸山城、中野天神山城

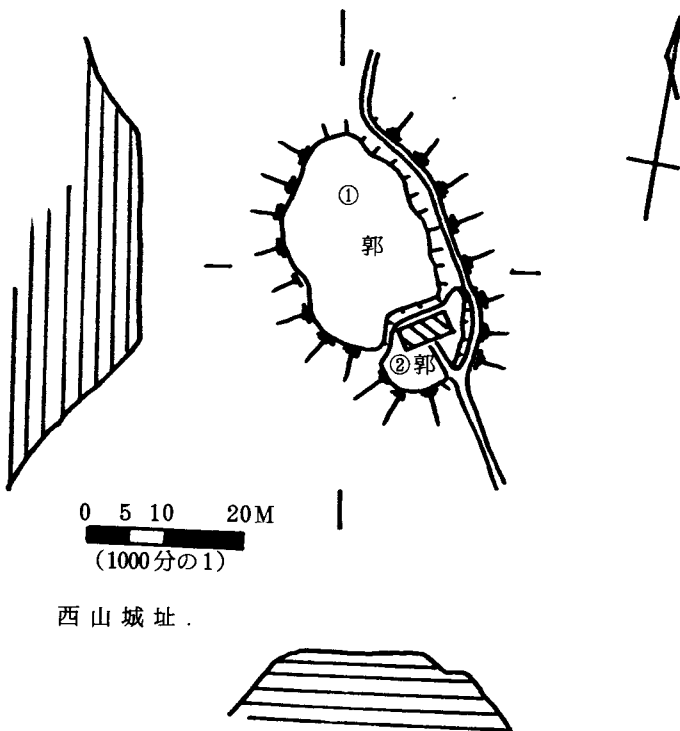
(調査参加者) 田口義之、岡内謙二、七森博明、関戸和典、松本信二、猪原進、柏原正尚

西山城跡 (別名 池原城 神原城)

所在地 福山市坪生町西池平

現状 坪生町、春日町と深安郡神辺町の境界上の標高一八〇m余の山頂から南東に延びた尾根上に築かれた山城で現在城址南端に稻荷神社が祭られている。

遺構は二七m×一八mの削平地(①郭)とその南の一〇m×一〇mの削平地(②郭)を残すのみで空堀、土累等は全くと残っていない。
 猶、②郭は前述の神社の敷地になっている。



西山城址

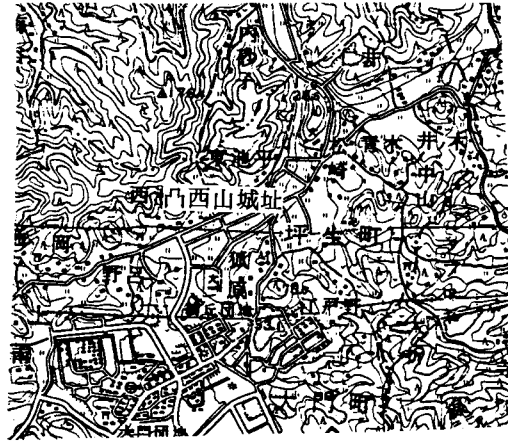
城主 「西備名区」によると、大内氏の家臣、神原伯耆守助宗、同采女正助春、同和泉守、同四郎頼景等、神原氏が代々居城し頼景の代享禄年中（一五二八〜一五三一）に没落したという。この神原氏の性格は不明であるが、おそらく、

この附近の中世庄園坪生荘の名主層で室町期に買得等の方法で田地を集積して力をたくわえ、戦国期にこの附近に勢力を伸ばしてきた周防（山口県）の守護大名大内氏の被官となつて武士化した者であろう。

滝山城跡（別名 三郡山城）

所在地 深安郡神辺町上御領

現状 猪原薫一氏の『滝山城跡に就いて』（備後史談所収）によれば、明治の末頃迄は明らかに城跡としての遺構が見られたが、その後石材採取のため地形が変わつたとのことで、私達が昭和四五年踏査した時点でも遺構として明確に認められるものは、山頂北側に残る二〇m×一〇mの削平地のみで、山頂部はなだらかな畑地となつていた。



西山城址附近



滝山城址附近

城主 「備後古城記」によれば城主、宍戸孫六郎秀安、「西備名区」には官氏の居城としている。

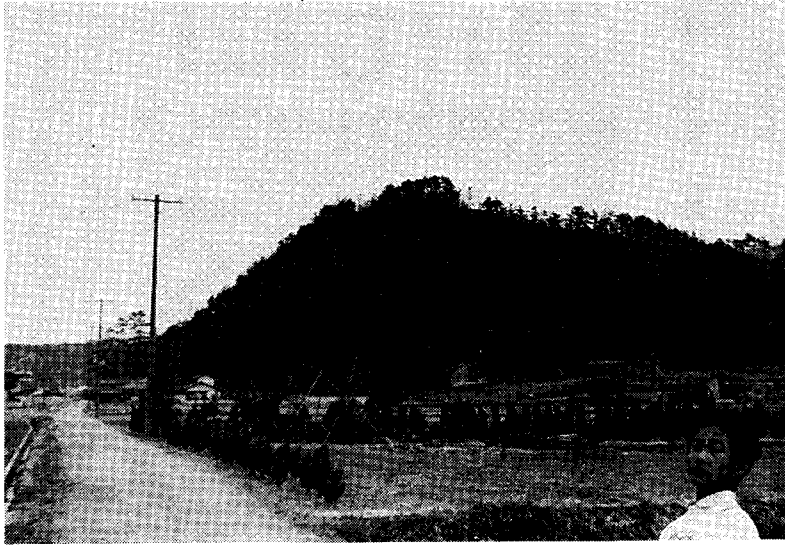
宍戸氏は安芸国甲立に本拠を置いた有力豪族であるが、その系図中に秀安の名は見あたらない。又、宍戸氏がこの地に勢力を伸ばしたことを伝える記録も残っていない。しいて関係づけければ天正（一五七三〜一五九一）末年、宍戸氏は毛利氏重臣として備中に一〇二五八石、備後に一一一六石の給地を有している（毛利氏八ヶ国時代分限帳）ので、その所領が備後、備中の境にある当城附近にあつて、その支配のため一族の秀安をこの城に置いたものであろう。

一方官氏が居城したと伝えるのは、室町時代の永享三年（一四三一）、官上野入道は当時安那東条と呼ばれた御領の領有をめぐつて岡崎門跡と

争っている（御前落居記録）ことから推定して、御領に勢力を有する宮氏がその所領支配の拠点としてこの城を使用したものであろう。

以上をまとめれば、当城の始築年代、築城者等は不明であるが室町期には備後の有力豪族宮氏が所領支配のために当城を利用し、宮氏が亡んだ後天正年間には同じ理由で安芸国の穴戸氏がこの城を利用したのであろう。

ひろん山城は戦いの為に築かれたものであるから滝山城も何度か戦のちまたにまき込まれたであらう。しかし、残念ながら記録は何も語ってくれない。



御領滝山城址

竜王石山城跡

所在地 深安郡神辺町御領

現状 神辺町御領の北にそびえる八丈岩山塊から南に延びる尾根を利用した山城で、現在遺構としては四二m×一〇mの長方形の削平地（①郭）と、その南に接する一〇m×一〇mの削平地（②郭）が存在し、①郭北側尾根続きには巾約一〇mの空堀状の窪地が残っている。

城主 重政氏の居城と伝える。重政氏の家伝では、その年代は元弘年中（一一三三―一一三三）で平左衛門尉光泰が後醍醐天皇方として挙兵した時、この城に拠ったという。この伝えは他に正確な記録がなく何ともいえないが、あるいはこの城のある御領はその名の通り皇室を本家とする庄園であった可能性があり、重政氏をその庄官と仮定すれば、元弘の変に際して、重政氏が官方に応じてこの城に籠ったということとは十分考えられる。

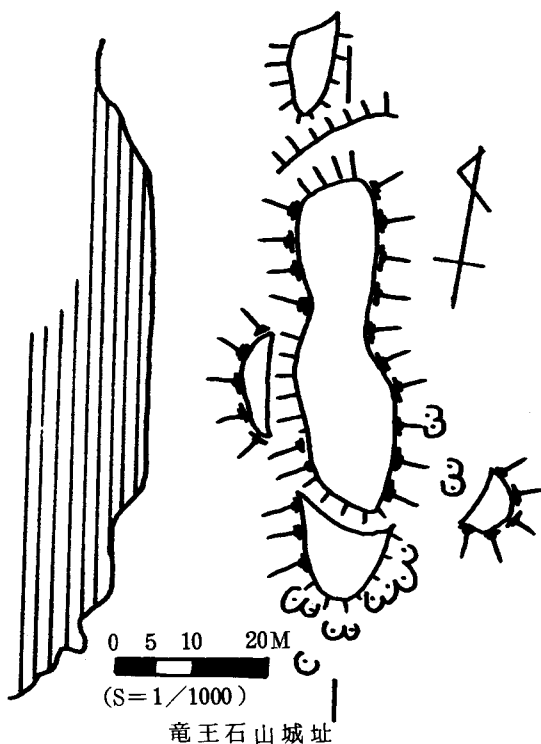
なお、御領の城主として「西備名区」等には目崎氏や神辺城主山名理興の家臣、菊地肥前守、同右近允、安田文次の名前をあげているがその城跡は現在判明していないので、彼等が重政氏のとこの



竜王石山城址附近

城に居城した可能性もある。その場合、当城は神辺城の支城としての役割を持っていたものと思われる。(備陽六郡志によればこの城は別名茶白山城という。この説によれば菊地氏等もこの城に居城したことになる)

(注) 西備名区によれば菊地肥前守等は茶白山城主という。



山王山城跡

所在地 深安郡神辺町湯野

現状 五ヶ手山々塊の東側の主峰、標高八二mの山王山々頂に築かれた山城で、現在山頂平地に日吉山王神社が祭られている。城の遺構は先述

の神社の敷地となっているため明確なものは何も残っていない。

山頂平地の西側に土塁らしき土盛りがあるだけである。

城主 「西備名区」等によると、天文年中(一五三二〜一五五四)に宮次郎左衛門が居城し、神辺城主杉原(山名とも)氏と戦い、敗れて討死にしたという。宮氏の本拠は天文三年(一五三四)の亀寿山合戦に敗れ



山王山城址土塁？

てのちは中条（神辺町）附近に移ったようであるから、その出城として山王山頂の神社を利用したのではないだろうか。

その場合、南方の神辺城に拠って、備南支配の基礎を固めつつあった山名（杉原）理興の勢力と衝突し、官氏が敗れたのであろう。

・調査年月日

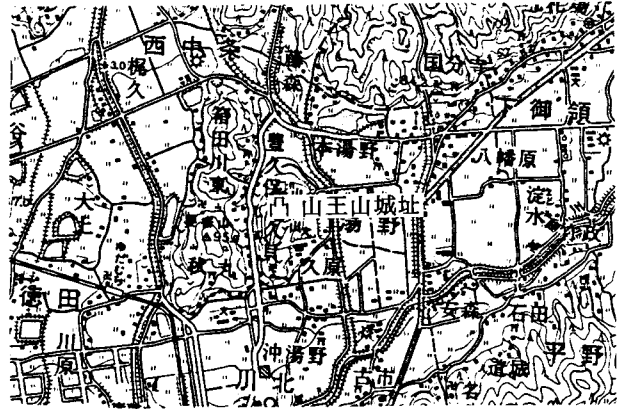
一九七一、三、一四

要害山城跡（別名 天神山城、茶臼山城）

所在地 深安郡神辺町徳田

現状 五ヶ手山々麓の西方の主峰、標高九五・九mの要害山々頂に残る山城跡で、山頂にある主郭は長径四三m、短径四〇mのほぼ円形の平地である。

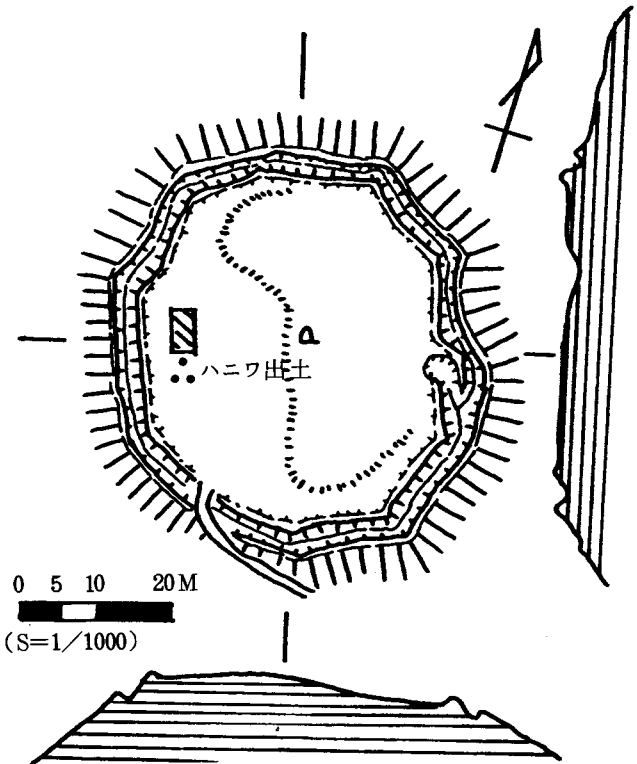
『福山市史』上巻（P四一四）によると、この城は径四〇mの大円墳の墳頂部を切り取り、古墳の周壕を利用して築かれたものとされている。確かに主郭西部に建つ石槌神社の社殿の下からはハニワの破片が出土す



山王山城址附近



要害山城址附近



(S=1/1000)

要害山城址

るが、そのみを以って大円墳を利用した山城とすることはできないであろう。たまたま城の主郭を築く時、その内にあった小円墳を破戒したということも考えられるからだ。特に主郭の平地は水平ではなく西側がやや高まっていて、ハニワが出土する（前頁図）、この高まりを古墳跡と考えた方が良いのではなからうか。

この城跡で特筆すべきことは、土塁と空堀の遺構がほぼ完全に残り、主郭東端には城門跡と思われるものが存在することである。土塁の高さは二・五m、空堀の中は底部一・六m、上部三・七mを計り、城門跡は土塁がくい違いになっていて、その間が窪地になっている。おそらく近世城郭の升形門の原初的なものがここにあったのであろう。尚、主郭の他にも南麓にかけて郭跡と思われる数段の削平地が残っている。

城主 『西備名区』等によると始め官若狹守が居城し、後、山名清左衛門、平賀隆宗が居城したという。官若狹守は備南官氏の惣領で初め亀寿山城（新市町）に居城し、亀寿山合戦に敗れて後安那郡内に移城したと伝える（西備名区）のでこの城に直接居城したとは思われない。

『備後国福山御領分古城記』によれば官若狹守はこの城に城代として山名清左衛門を置いたという、おそらく安那郡北部に勢力を持つ官氏が南方神辺城の山名氏に対する押えとしてこの城を築いたのであろう。

山王山城の項でも述べたように天文年間、官氏は山名氏と戦って敗れたという伝えがあるところを見ると、この城もあるいは官・山名合戦の舞台になったのかも知れない。

平賀隆宗は安芸国高屋の有力豪族で天文一六〇一八年にかけて大内軍

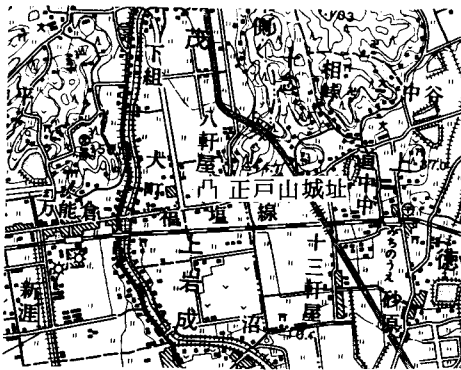
の神辺城攻撃の一翼となって秋丸に本陣を置いたという（陰徳太平記）。秋丸は要害山南麓の地名であるから、この時、要害山城にも平賀氏の軍勢が籠ったのであろう。

以上をまとめれば、この城は初め官氏が南方に対する押えとして築き、その後、神辺城合戦の際、寄手の平賀氏によって利用されたものと思われる。

しょうと 正戸山城跡（勝戸、勝渡とも書く）

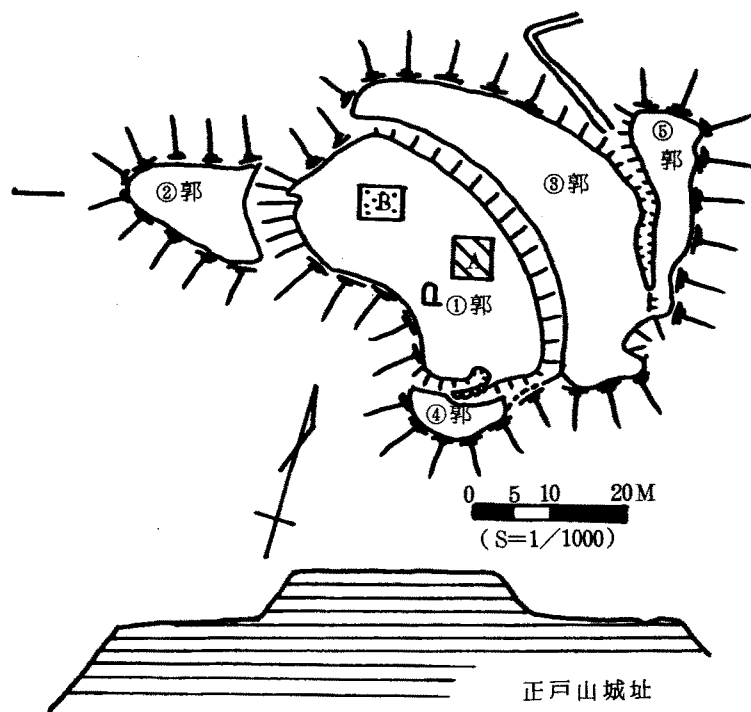
所在地 福山市御幸町上岩成正戸

現状 神辺平野の中央北部に孤立する標高四〇m余の小丘、正戸山を利用した山城で、現在、山頂平地には石槌神社（A）が祭られ、その西方には気象観測器具（B）が置かれている。城の遺構は山頂の四〇m×一五mの長方形の削平地（①郭）を中心に、その西に一七×一二mの削平地（②郭）、北から東にかけて長さ五六m×巾五〜一〇mの細長い削平地（③郭）、南に一三×四mの削平地（④郭）、③郭から東に空堀を隔てて一八



正戸山城附近

×五(八m)の削平地(⑥郭)の五つの郭跡が残り、①郭南端には虎口状の遺構と石塁が存在する。又、北麓には現在、水田になっている広大な平坦地があり城に附属した屋敷跡と思われる。尚、『西備名区』によるとこの城の西、北、東はかつて沼であったといわれ、山城ではあるが、備中高松城や福山市津之郷町の小森城等と同様、沼城の性格も持っているものと思われる。



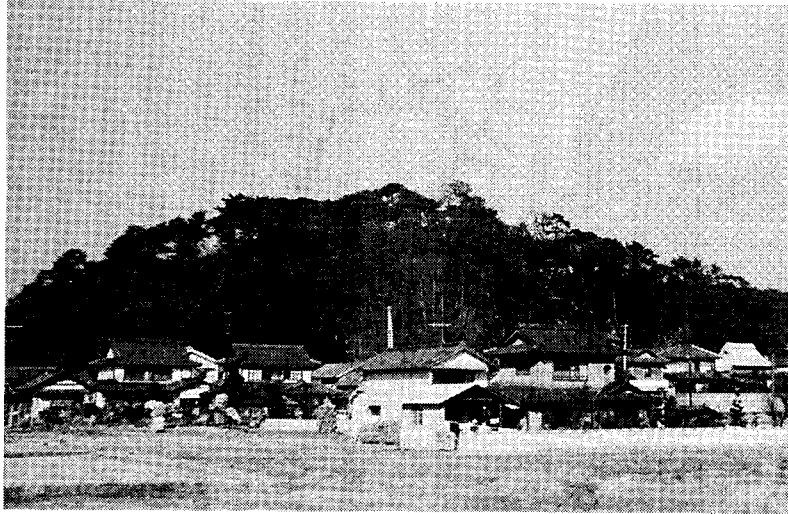
城主 『備陽六郡志』等によると、この城は小藤美作守が築き、ために(しょうとう)↓正戸山城と呼ばれるようになったとも、官三郎入道正渡が居城したため正渡山(しょうとやま)城と呼ばれるようになったとも伝えるがその年代等はさだかでない。

この城が史上に現われるのは南北朝内乱期と戦国期の二度である。南北朝時代の観応二年(一三五一)一〇月、足利尊氏方の備後守護岩松頼宥はこの城に籠り、敵対する上杉氏や宮盛重の攻撃を受けている。

この時は三吉覚弁等の奮闘によって敵を撃退しているが、頼宥がこの城に本拠を置いたのは、おそらく、この城が神辺平野という経済地盤を持ち、かつ眼下に山陽道が通るといふ、交通の要衝でもあるという点に目をつけたからであろう。

戦国期に入るとこの城には官氏の一族が居城したようで、天文年間城主として尼子方の宮入道正味の名が伝わる。『関閩録』三卷P二五三「天文一六年六月二日付大内氏年寄衆連署状」によると天文一六年(一五四七)四月、大内氏の軍勢がこの城を攻撃している。この時期は、尼子方の神辺城に対して大内勢が総攻撃をしかけた時にあたり、落城したという記録がないところを見ると、この攻撃は尼子方の官氏に対するけん制的な意味あいを持つものであったのであろう。

その後『西備名区』等によると天文二十二年(一五五二)七月の志川滝山台戦の際、この城も毛利勢に攻められ、正味もよく戦ったが「(毛利勢)の一手は東北の山へ取り上り、少し小高き所より火矢を射かけて攻けるに」といふぐあいに火攻めによって落城し、正味も討死にしたという。



御幸町の正戸山城址

なかのてんじん
中野天神山城跡

所在地 福山市加茂町中野

現状 加茂谷の北を画する標高一八〇mの天神山々頂に残る山城跡で、現在中国自然遊歩道のルートとなり休息所が設けられている。

城の遺構は山頂の三二m×一六mの削平地(①郭)とそれに附属する二ヶの削平地(②③郭)のみで、①郭には巨岩が四ヶ露出している。

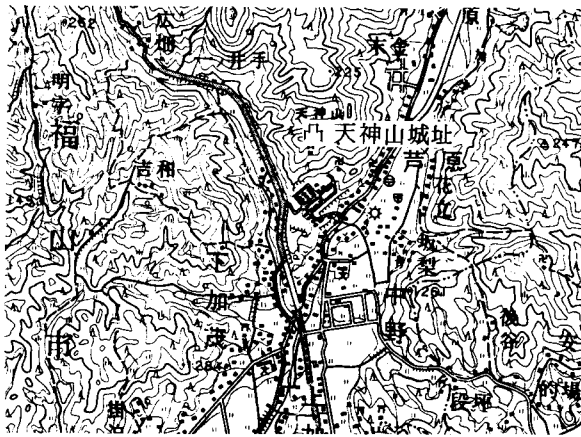
(一九七二・一一・一九調査 田口・柏原・七森・関戸)

城主 『西備名区』によると周防大内家の家臣、内藤伊賀守久安、同伊賀守宗久が明応年中(一四九二〜一五〇〇)から慶長五年(一六〇〇)

迄居城したという。

しかし、明応年中大内氏の勢力がこの方面に及んだという証拠はない。

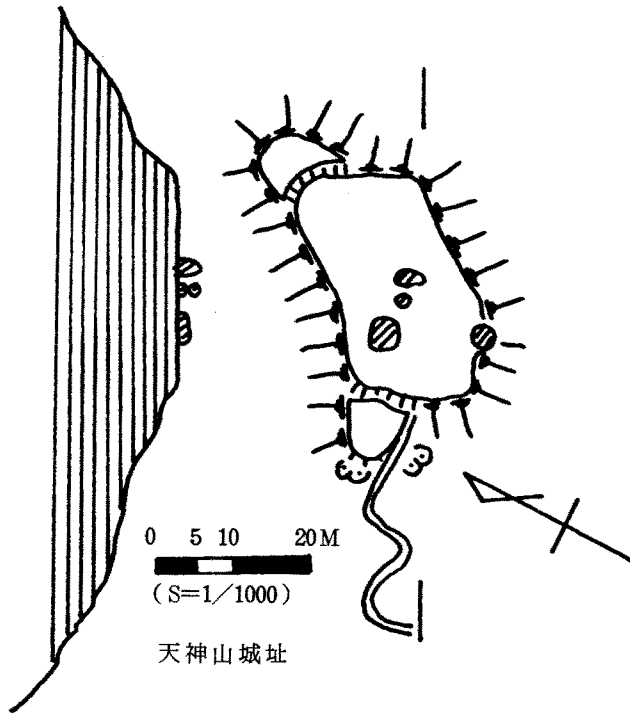
『備後国福山御領分古城記』によれば、この城には宮氏の城代、栗木兵部近氏や内藤伊賀守、吉田氏の家臣岡本氏等が居城し



天神山城附近

たという。この附近は戦国期まで宮氏が勢力を持っていた地域であるから、おそらく、初め宮氏の代官が居城し、天文二十一年（一五五二）の宮氏滅亡後、大内氏の家臣、内藤伊賀守などがこの城に拠ったのであろう。

（文責 田口義之）



地名調査雑感

出内博都

この度縁あって、駅家町法成寺、万能倉地区の地名についての話をと頼まれ、古墳・条里制以来の古い土地なので、由緒ある地名が多いだろうと期待したが、開発と発展のテンポの早い地域なので必ずしも特異な地名など少ないと云う感をいだいた。

倭名類聚抄、延喜式、古事類苑、国造本記、古事記などにある地名は限られており然もそれが現在のどこに当るか、さだかでないが、これについては既に先学が多くの説をなされているので重複を避け、備南の一部にあつたと思われる古地名を一覧的に表示しておきます。

一、吉備王国の分解と地名

五世紀を中心とした吉備王国と大和王国の対立の結果、吉備本国の五分割（上道、三野、下道、香屋、笠臣）と周辺地域（主として備後）に国造の設置伝説（穴国造、品治国造）などがある。これより以来に品治郡の設置が考えられる。こうして一枚岩の吉備王国を分立させてその後、六世紀を中心に周辺部に直轄領屯倉を設置している。安閑記にみえる吉備後国の五屯倉（後月、多禰、来履、葉稚、河音）を置いている。これらは現在の備中国内に比定されているので問題がある。婀娜国の屯倉と

して騰殖・殖年部の二屯倉がみえる。（諸説があつて現地名比定できず

|| 広島県史参照)

二、倭名類聚抄を中心とした地名

大化改新（六四五年）以来数十年を費して律令体制が整備され国・郡（評）里の行政組織が一応できあがるが、備後国が正式にいつ成立したかも緻密にはいえない一応天武二年（六七三年）備後国司、白雉を神石郡に獲りて貢すとあるが種々問題もある（広島県史参照）。小さな地名はよくわからない。倭名抄は十世紀に源順が編集したものであり、備後十四郡のうち当地区にかゝわるものは深津郡（養老五年（七二一）安那郡よ分割）に中海、大野、大宅の三郷・品治郡（和銅二年（七〇九）三郷を芦田郡に割与）に品治・道、佐我、石茂、神田、服織の六郷・芦田郡（和銅二年（七〇九）甲奴郡新設により割与・品治郡の一部合併）に広谿・葦浦・都禰・葦田・駅家の五郷がみえている。これが現在のどこに比定されるかはいろいろ説の分れる処であるが、いずれにしても十世紀の書物である。そのなかに備後全部の郷が六五であるが、宝龜五年（七七四）頃の『律書残扁』には郷の数九〇、その下の里の数は一六一

とあり、最近問題となっている木簡（平城官跡）の中に神石郡加茂郷などという木簡もあり、長い間の変遷やその地名の起源をさぐるのは容易ではない。

倭名抄より少し早い時にできた靈異記（八二二年頃）には宝龜九年

（七七八）一二月備後の葦田郡の大山の里の人 品知牧人が正月の買物のため深津市に行く途中、觸骸を助ける語で觸骸が「吾は葦田の郡屋・穴國の郷の弟公で叔父に殺された」といきつを語る場があるがこゝに出る大山里とかヤナクニの里など現在の処不明であるが実際には多くの自然村落が出来つゝあつた事を物語っている。

三、地名のもとをさぐる

倭名抄の地名を考える場合、和銅六年（七一三）の風土記献上の事を頭におかねばならぬ。

続日本紀和銅五年五月の条に「畿内七道諸国郡郷名著好字、……」とあり口伝で伝わつた地名が漢字になり、然もそれが後世二字に限定される傾向がありこの為原義を損つて伝承し、逸話が生まれたものが多いと思われる。

風土記以来地名が変り、多くの自然村落が生じる歴史的節目として一応次のような段階が考えられ、現在でもその時々々の地名の痕跡が、化石か石器のように思わぬ処から発見される。地名の変遷、発生のプログラムを一応次のように設定することができる。

(1) 自然的地名

地名は社会的産物であり、二人以上の人間が共通の生活空間をもつ時

に必要なもので、初めはごく単純明解であつたと思われる。その場合大自然の偉大な力の中で小さな生活のいとなみをする人間にとって自然の状態は何にもまさる力で迫ってくるので自然から特定場所（地名）を生ずるのが最も多い。然もこの地名は限られた集団の中の了解で済むという個別性と、生活空間が広まり集団が大きくなつた時に必要な普遍性があり歴史の流れと共に変遷する事が多い。「今日は大町の稻刈りだ」と云う場合一反が一三枚にも分れている谷田の中の一番大きい田であることはその家族及び両隣位には通用する地名である。こうした地名の個性がより広い地域の地名になる普遍性は、人間の生活空間の広がり、生活形式の発展等多くの要素が働いている。そうして出来た地名も長い間の音便や方言の変化、慣習の変化でわからなくなるものが多い。漢字にまでわされたりして地名の解釈や語源さがしは一つのロマンではあるが、学問としては極めて頼りないものといえよう。気候、風土、植生、地形、水系等人間が一番最初に接する自然的地名が多いがこれらの中には、随分とわかりにくいものがある。現実に法成寺、万能倉地区の地名の中でそのいくつかを考えてみよう。

(2) 歴史的地名、宗教、民俗的地名

村の成立の歴史の過程で大きく地名が変つたと思われる節目は、(イ)班田制の施行と風土記の撰上という七〜八世紀の頃と思われるがこれについては倭名抄や延喜式などでその一部がうかがえるだけで自然の中できびしい生き方をしてる人間の血の通つた地名はなかなか浮んでこない。

(ロ)律令制がゆるみ班田制が崩れる時に一方では貴族・寺社による荒地の

囲いこみ式墾田地系の荘園が出来るのである。耕作・貢租引請人としての田堵の出現更に営みとして開発した私墾田の掌握を確実なものにするための名田制とそれを基盤とする寄進地系荘園ができる時期である。

人名の集落、ゲシ、クモンなどの荘官地名など或いは特定業務、信仰にまつわる免田などこの期のもは山間部にいくほど多く残っている。

(ハ)守護、地頭が設置され新しい自然村等ができる。一三世紀〜一四世紀も山城とか砦・館などを中心とした新しい地名が続々出てくる。中には自分の本貫地の地名を移すものなどある。

(ニ)この後秀吉、家康によって近世の統一的農村が編成される過程で荘園が解体し、小さな村が出現する。一地一作人主義から個々の土地の所在を明確化するためにおびたゞしい数の場所特定の地名が生ずる。

(ホ)明治の地租改正以降、市町村編成法や、地番制などによって随分面白い、無茶な地名もつけられた。更に戦後の開発で紅葉丘、五月丘、月見ヶ丘などまさに百花僚乱である。こうした中でせめて地図や記録の上だけにでも生活と共に歩んだ地名を残しておくことが必要なのではないのだろうか。

法成寺地区の地名

開発のテンポが早く、然も常に政治的経済的動きの中心に近い地域なのであまり古い地名はないが、元録一三年の検地帳と明治初年（不明？）の地籍図の地名を対比してみると検地帳にあるもの約八〇、地籍図のもの約一二二で二〇〇年間の変化を偲ぶことができる両方共通したものが五八と約半数である。

法成寺という地名から有名な藤原道長の建立した法成寺に結びつけら

れているが、法成寺が法城寺と混同して使用されている事（福山志料・備陽六郡誌）や華榮物語に「摂政殿国々までできるべき公事をばさるものにして、先ずこの御堂の事を先に仕ふまつるべき信言い賜いて方四方を廻して大垣して瓦葺きたる……と記され更に小右記寛仁三年（一一〇一九）

七月一四日の条に「入道殿忽願、被奉造丈六金色阿弥陀仏十躰、四天王彼殿東地造十一間、可被安置、以受領一人充、一間可彼造云、從昨日始本作、摂政不甘心云々……とあり国事をさしおいで国司一人に一間を割りあて、華麗を競わした堂であるが、同じ小右記の中に「天下の地悉く一の家の領となり、公領は立錐の地もなきか」と歎いている時である。一寺毎に特別な荘園を設立したとは思えない。全国的にみても法成寺という地名は少なく、時の権勢を誇った法成寺の荘園というものは考えられず小右記に記す如く天下大半の地が摂関家領であった事を思えば殊更一寺の荘園を発想するのがむずかしい様に思われる。法成寺の地名が戦国期には出来ていた事は岡大附属図書館に平川範義（備中の豪族）旧蔵文書に「今度於椋山法成寺兵部大夫雜意仕候処籠護相届申致御供無相違罷退候、忠節神妙候弥可抽忠功者也」

天文十（年欠）（一六世紀初）二月廿四日

実信（註）（平川）

内藤新右衛門尉殿（註）（神石豊松）

などによって知ることができる。法成寺は「放生会の行なわれた地」という高垣不敏氏の説も一概に捨てきれないのではないだろうか。

（天曆二年、九四八年という非常に縁起の古い当八幡の伝承についての

吉岡恒夫氏の説を参照させて頂きました。個々の小字の地名についての私見を述べましたので御批判を仰ぎたいと思います。

法成寺地区の地名

検地帳(元禄13年)にあるもの	地籍図にあるもの(明治年間)	地名の語源と考えられることから	検地帳(元禄13年)にあるもの	地籍図にあるもの(明治年間)	地名の語源と考えられることから
にこ谷	仁五谷	不明(古代軍団に関係ある語との説あり)		粟塚	(塚は古墳とは限らない)
	牧の本	牧場に関係あり(駅馬、伝馬の関係)	草広	草広	地形語(原と野は意味が異なる)
	大上	場所的地名か		原久保	
池平	池平	右に同じ字には正面傍らなどの意もある		原の前	
	近末	人名か		平の前	ひらには正面の意あり(城の正面の意あり)
かねつき	カ子ツキ	鐘撞免の地名は各地にあり	あけのたな	明ノ端	高い所(あげ)あく(湿地)谷間の小盆地
	池跡			石仏ノ向	
	角笠	笠は小高い地形(地形からきた坪割か)		東ウ子田	
	吉ヶ坪	古代条里制の名残り現在南北に流れる水路の間隔が大体一〇〇mあり坪の名残りを示す		カ子ガ久保	鉾山関係(当地では石切場が多いらしい)
	黒ヶ坪			ウ子田	小高く連る処(自然堤防を意味する)
もち田より沖	糯田	餅状の地、小盆地、(全国に多い)	白ノ谷	城ヶ谷	掛迫城の関係
	良	良神社の関係	掛迫	掛迫	カケはけわしいと言う意味
かど前	門前	神社、館、土居のまえ、佃田という地名あり	道城谷	道城	城への防禦施設が有ったと思われる
四日市	四日市	定期市(三斎市の名残)	こもがさこ	コモガ迫	まこも(植物)が生えていた所
とばから砂山道	鳥羽	ツバ(湿地の中の微高地の転化か)	大とうな向	大道奈	道(どう)はタオ、タワの転化)奈は土地(処)
鳥越	鳥越	通り越えの転(渡鳥の道の場合もあり)	小とうな向	小道奈	を表わす、穹状(アーチ型)の土地
	長石		岩明寺	岩明寺	

太郎二郎ヶ久保	宇多次郎久保	開発者の名か	岡本	岡本	自然地形(中心になる所が多い)
本谷	本谷			竹ヶ端	畷館のある丘の端、高台の先端など
とばより砂山道	砂山	地形、土質か		田中	居住状態(田の中)からの命名
宮のまわり	宮廻			茶ノ木畑(端)	
(井手迫)	井手ノ内		七反田	七反田	坪(一町歩)に足りない欠坪の田、あるいは共同開発で一人前の割当分の田、名田として一まとまりの田
神明	神名	神様の意(天照大神をさす事が多い)	五反田	五反田	
龍王面	龍王免	雨ごいの神を祀る為の免田		広岡	
	大塚		岡	岡	自然地形(中心になる所が多い)
身なげ	身なげ石	岩の形や地形からきた形容語		仲田	田の存在形態(囲まれた田)
さこ	サコ	小さな谷		田和	峠(タワ)の変化
馬場	馬場	お宮との関係	天王	天王	牛頭天王社のある所
二塚の町	石鳥居			外五反	
	二塚			新張	新開地(壘一ハリ)
天田	畑田			古江木	小支谷、谷状の湿原
良山	天田	高い所の田、雨田、尼田などあり	もろ迫	迫	山で囲まれた小さい河谷の小盆地
	良山	良神社のある山		若宮	本宮の祭神の分霊を祀った宮
	下牧	牧場のあつた所とみてよい		亀原	亀は神に通ず、若宮と関連
上まき	上牧	(駅馬、伝馬の飼育、中世武士の馬)	はし原	羽子原	鳥もちで鳥を取る仕掛(ハガ、ハジと言う)
柚ノ木	柚杭			仁後	不明(前出)
上才ノ木		才は塞(村境)にあるしるしの木		西林坊	
たしまだ	田島田	(島状にポツンとある田か)		慶シン	
助迫	助迫	スキ(剥きか)両側が崖をなした谷		蓮当寺	
本辻	本辻	村の中心の辻	五輪谷	五輪峠	五輪塔があるのではないか
	赤子岩	赤子の足跡型のある岩(夜泣き止の信仰)	ゆきのぶ	行信(延)	新開者の名か

西山田	寄信	新開者の名か		
	行信新漕	(右記二件が中世名田でなく近世の者の証)		
	畑ケ田	前に同じ 村境の附近	大草	雀越
	東才ノ木	前に同じ	大池平	花免
	西才ノ木	前に同じ	大久保	大草
藤の木	藤の木		坊寺獄	黄播様(軍の神)を祭るか(城との関係)
	せんなぎ		井領	傍示(境の標をボウジという)村境の山
	西ウ子田	畝田については前出	友石	用水料の管理者又は其れを賄う土地
	狸原	身近な動物なので各地にあり	ドウドウ	川の流れる音の擬音地名
	飛渡り	地形、状況からの地名	中井手	
	油ケ迫		吹矢	金屬をふく(鑄物師、鍛冶屋か)矢は屋か
本谷	本谷	中心になる谷(地域的なもの)		
池ノ内	埋池ノ内		池頭	
	乳母懐	山姥などの伝説地が多い	もろ	
	広畑大塚		ねびら	
	にう道迫	開発者に関係か	池ノ上	
	木綿畑	戦国時代末期より栽培されているので、この	郷蔵屋敷	
	全ノ平	地方でも植えていたと思われる。(三河以西	すうめん	すえ(陶)免か
	全ノ口	に多い備後絆に関係あるかも)	勝負さこ	多くの場合水源、湧き水のある所を言う
	井柳		後茶湯山	
大谷	大谷	位置、大きさ、などから	とだ	茶堂山
	カネイ久保	前出	東山田	
	香合岩	ごつごつした巖しい岩(皇后島、庚午岩)	池口	
西山田	西山田		六反田	
				湿田を意味する場合が多い

知られざる長和庄地頭 (寄稿)

小林 定 市

一昨年夏、福山城古文書館で浜本鶴齋が書写した「芸備諸家系図算録」の「田総長井系図」を閲覧していると、現在迄知られていない左記文書が記されていた。

『忌宮神社文書』

長門国二宮社造事、任延慶之例、相催一國中地頭御家人等、可終其功之由、被仰厚東入道之処末道行云々、年限延引之条、神慮難測之上、早守前々支配之旨、嚴密可被致其沙汰之状、依仰執達如伴、

貞和五年六月九日 (高師直)
武蔵守 (花押)

長井縫殿頭 (重継) 殿

忌宮神社は山口県下関市長府に鎮座し、別称として、二宮神社、豊浦宮と呼ばれている。

系図や寺社の縁起、武将の感状等は比較的偽物を作りやすいものとされ、高師直の施行状が偽文書でなければ、「広島県史」の古代中世資料編Ⅴ 県外編、又は「関関録」の社寺編忌宮文書の何れかに収録されている筈

と、調べたが両書共に記載されておらず、忌宮神社に行けば原文書の手掛りが得られるのではないかと思ひ、忌宮神社で神主に高師直の書状について問合せたが書状についての解答は得られなかった。

また忌宮神社から出版されている古文書集にも記載されておらず、続いて長府図書館と長府博物館にも問合せたが両館共に不明で、下関市では文書の確認ができなかった。しかし、幸いなことに「大日本史料」に収録されていたので真文書であることが判明する。

忌宮神社の由来は、社伝によると、仲哀天皇が熊襲平定のため豊浦宮を興して七ヶ年間政務を執った旧跡とされ、後に神功皇后を祀り忌宮と称し、更に応神天皇をも祀り豊明社とし、後この三社は忌宮をもって代表的に呼ばれるようになる。同社は、延慶二年(一三〇九)に火災を起し幕府は同年四月、御教書を下して造営を進め、更に同年十一月にも御教書を下して、長門国中に段別米・銭をかけて造営をするように守護に命じている。

中世忌宮神社は武士の厚い崇敬を受ける、足利幕府と神社の関係は深く、建武四年(一三三七)十一月足利尊氏は当社に参詣、前年二月九州

に敗走した尊氏がこの神社に参詣した後、再び京都奪還に成功したことで、二首の法楽和歌を奉納。

この御代ハにしの海よりおさまりて

よもにはあらし波風もなし

いにしへの二のたまの光こそ

くもらぬ神のころなりけり

建武四年十一月十五日

権大納言源朝臣尊氏（花押）

その後、康永三年（一三四四）十二月足利直義と斯波高経の二人が、

建武三年に参詣し神の助力を得たことを感謝して二首宛奉納。斯波高経

は建武三年の長門国、国大将である。

神かきと八重のしほ地をへたつれと

ころつくしにいまもわすれぬ

いにしへハ人の国までなひきさる

神のめくみも今にしらるゝ

康永三年十二月十五日

従三位行左兵衛督兼相模守源朝臣直義（花押）

日のもと七のみちもおさまりぬ

三國なひかす神のまもり

いはし清なかれのすゑとおもふにも

この神かきを猶あふくかれ

康永三年十二月十五日

従四位下修理大夫源朝臣高経（花押）

貞和五年（一三四九）九月、実父尊氏から討手をさしむけられて、頼

より九州に敗走した直冬が、勢力を挽回し中国地方を掌握、諸国の静謐

を祈り、祈願和歌を奉納。

かはりつる世々をおもへハこの神は

心つくしのちをまふりき

いにしへにかはらぬ神のちかひならば

人の国までおさめさらめや

貞和七年六月一日

正五位下行左兵衛佐源朝臣直冬（花押）

足利幕府は国家の威信を誇示するためか、諸国一・二宮の振興と安国

寺、利生塔の建立を推進する。

『忌宮神社文書』

長門国二宮社大官司国道申当社造営事、早守延慶支配之例、相権国中地

頭御家人等、可造畢之由、急度觸遣訖、急速致沙汰、可終其功之状如件

暦応五年四月廿三日 直義（花押）

厚東太郎入道殿

暦応五年（一三四二）足利直義は、長門守護厚東武実に命じて、地頭

御家人等を催促させて、忌宮造営を下命する。

続いて翌康永二年（一三四三）十一月には、『忌宮神社文書』によると、

高師直が厚東太郎に宛てた書状によると、元弘以降忌宮神社は軍陣とな

って穢けがれたので、長門国中の地頭・御家人を催促して社殿を新造し、一

日も早くその功を終えるように命じている。

厚東氏は合戦等で延引執行しなかったので、六年後の貞和五年に、備後の地頭である長井重継(推定年齢六十才前)に施行状が出された。

厚東武実 は長門国では名将の誉れが高く、鎌倉時代の末期から、南北朝初期にかけて活躍する。鎌倉時代末の長門国は長門探題北条時直の支配下にあり、時直は元弘三年(一一三三)閏二月、大内・厚東等の防長の将士を従えて上洛中、備後の海上で村上水軍に妨げられて果せなかった。其の後、武実 は探題軍から反探題軍に転じ、探題館を攻めたので、北条時直は支えることができず館を捨て、出奔する。建武の新政が発足すると、武実 は戦功によって長門の守護に任命される。

建武三年(一一三六)正月足利尊氏は京都で大敗し、大内長弘と厚東武実の率いる兵船二百余艘で、兵庫より海路九州に下る。

多々良浜の戦いで菊地武敏を破り、四月に再び長府に入り、上洛の計画を練りながら二十日を過し東上、同年五月二十五日に漆川で、楠木正成を破り翌月入京する。

以後武実 は足利氏に従って各地を転戦、貞和三年(一一三四七)の暮から翌年の四月にかけて、武実 は河内国の東条から四条畷に転戦中、病にかかり、貞和四年十一月九日京都で没す。守護職は武実 から子息の武村に同年の四月に譲る、守護職を受け継いだ武村は尊氏方に属し北朝方と共に行動した。

蒙古襲来以後の、建治元年(一一七五)から延慶三年(一一三一〇)の間に、幕府は守護に命じて管内の寺社に、異国降伏の祈禱を数回行は

せている。また、延慶二年二月に、幕府は寺社修理を命じている。

鎌倉時代以降、管内の寺社は守護を中心として祭祀や修理が行われ、貞和五年の忌官神社造営下命は、従来の例では当然新守護厚東武村が任命されるべきで、守護・守護代でもない遠国、備後の地頭(田総庄・長和庄東方・小童保・石成庄)長井重継が神社造営を命ぜられただけの文書に見えるが、高師直には別の狙いがあったものと推定する。

幕府の内部において、直義派・師直派が康永元年(一一三二)のころから形成され、貞和四年正月四条畷の激戦で高師直・師泰軍が楠木正行軍に勝、師直の聲望が上がり、直義と師直の対立が決定的なものとなる。政敵、足利直義の養子直冬は二ヶ月前の貞和五年四月に、長門探題として中国地方八ヶ国の成敗権をもって、鞆に來住していた。この直冬追落の布石として打った手であろうと考えられる。

鞆の備後守護所の隣接地である、長和庄東方(福山市田尻町、箕島町、水呑町の大部分)へ備後の地頭御家人を集め、鞆の直冬へ圧力をかけ、たとえ直冬が長門方面に逃れたとしても、重継等を中心として忌官神社造営の名目で長門迄の追撃を考えての深謀遠略が、尊氏・師直の頭に描かれていたのではなからうか。

同年閏六月、直義は尊氏に迫って、師直の執事職を罷免させる。直義の中傷で執事職を、高師泰の子師世に譲られた師直は、河内国に出陣していた師泰に帰洛を命じる。直義も対策を樹て、いて、高師直・師泰の討伐を想定し、直冬を鞆に駐留させ上洛させる手筈であった。しかし、師直は赤松則村に播摩を固めさせたので直冬の上洛は阻止された。

同年八月、師直は五万余騎の軍事力を背景に、直義の地位を尊氏の息義詮（直冬弟）に譲らず、翌九月義詮の身の安全を計るため、尊氏方の杉原又四郎が直冬を攻撃すると、直冬は河尻幸俊の船で肥後へ逃れる。

其の後、河尻と詫磨宗直（大友能直の支族）は直冬を奉じて宇都宮氏と戦う。同年十一月、直冬は詫磨宗直を筑後守護職に任じ、次いで河尻幸俊にも肥前守護職を与えている。翌観応元年（一三五〇）五月、安芸の吉川氏、石見の三隅氏が直冬党として挙兵し、直冬党は九州から中国筋にかけて一大勢力にと発展して、幕府も放置できなくなり、翌六月、高師泰の派遣となり、師泰は院宣と錦幡を用意して石見に下向する。

『詫磨文書』

下、詫磨別当宗直

播摩国五ヶ庄、赤松入道跡、遠江国浜松庄、越後守跡（高師泰）、長井縫殿頭跡所領等事、

右、為勲功之賞所宛行也、早守先例、可令領掌之状如件、

貞和六年八月晦日

（直冬）（花押）

直冬を最も苦しめた、赤松氏・高師泰・長井重継に対して、直冬は所領刺奪の挙に出たのであるが、果して詫磨宗直は所領を支配することができたのであろうか以後のことは不明である。

長和庄について、従来の定説は下地中分の結果、現在地頭分と呼ばれる西南半分が地頭の支配地で福山湾岸沿いが悲田院の支配地とされてき

た。

地頭分村の村名が付けられるのは、福島正則の慶長検地である。しかし、検地が実施された七十年以前の享祿三年（一五三〇）に熊野町の、一乗山城主である渡辺城中守兼が書残した『渡辺先祖覚書』によると、初代渡辺信濃守高の項に、「庄主ハ六・七年之間毎年被下くだら（京都と長和庄を往復）其後、長和寺家（悲田院）分、五拾貫之請定に悲田院衆より後にんを申うけ高に被出候」「高に男子二人あり、一人は長和福成寺（地頭分村）の奈（名はカ）や三谷腹之由申伝候也」、三代目、渡辺信濃守家の項に「然共、国留分、同上下市村宇山、長和寺家半濟（守護管理地、幕府が庄園の年貢の半分を武士に与えた）何連れも放れ、寺家の内、田中名（地頭分村）と申先地故に」と、今迄の説とは全く正反対の地頭分村のあたりは悲田院（寺家半濟地）の領所で渡辺氏の代官地であったと書残している。

長和庄では、鎌倉時代の終頃、下地中分（庄園の領家・地頭の争を土地の折半で解決する）の結果、半分が悲田院の支配地となり、残りの半分が地頭の支配地となるが、地頭職は更に分割されて、東方地頭職と西方地頭職に分割される。地頭職は庄園の東方と西方の角に地頭職が存在したのではなく、悲田院支配地を除外した地頭職に対し東方と西方を名付けたもので、南都北嶺とか六波羅南北探堤でもわかるように対象となる二地点に対して、当時は東西とか南北の呼称が付けられる。

一例を挙げると、慶長検地で沼隈郡に東村（福山市東村町）が誕生するが、東村の位置は沼隈郡の東部でなく、逆方向の北西部に位置し、隣村

には西村があつて、東西と対象村名が付けられている。

南北朝戦乱期となり、軍費調達のために、応安(一三六八)半済令が発せられ、長和庄でも寺家支配地の下地(土地)の半分が武家に与えられ、以後悲田院の支配地は庄園全域の四分の一に減少、残った四分の一の寺家分を渡辺信濃守高が五十貫で請負っている。

以上のことから、應永十九年(一四一二)の頃には悲田院の支配が終り長和庄全域は武家の支配地と化していた。

寺家と半済地が瀬戸町(旧長和村・山北村・地頭分村)のあたりとすると、村高と地形の関係から地頭の支配地は、福山灣岸の海沿の地となり、田総長井氏の東方地頭職の地域は、田尻町・箕島町・水呑町の大部分と考えられ、福原長井氏の西方(北方とも書く)地頭職の地域は、水呑町の小水呑以北・草戸町・西神島町・佐波町が考えられる。

長井氏は、大江広元の二男である長井時広の子孫と諸書に記されてきたのであるが、大江広元が没した翌年の、嘉禄二年(一二二六)八月三日の『明月記』には「心寂房来談、日来風聞事委談之、長井入道広元子時広、執智侍従氏道(従四位下中将、藤原氏道)云々、後聞、又説忠行(従二位兵部卿内蔵頭、藤原忠行)卿次男侍従云々、」心寂房は藤原定家の家によく出入しては、四方山話をしていたようで、時広は藤原氏出身であったと伝え聞いたと記している。

田総氏は、長井縫殿頭重継の祖父である田総重広(時広の孫)が田総庄に入部、田総氏を名乗ったとの説があるが、重広が当主の時代と考えられる。嘉元三年(一三〇五)の『田総文書』田総庄和与状には、「地

頭代重宗」と長井氏は在地せず、代官による管領であった。また、史料の残る備後国信敷庄・美濃国茜部庄・美濃国遠山庄の三ヶ庄は何れも代官を現地に派遣して在地支配をしている。

長井氏は京都四条烏丸の簀屋の守護人を勤めているが、守護人は京都住の御家人で組織されていた。

変った史料に京都と鎌倉の死者を記録した、『常楽記』があり、長井氏一族は、元應二年(一二一九)から貞和四年(一三四八)の三十年間に、十二名記されているが、以後長井氏は全く記されなくなる。長井氏は南北朝時代になると住みにくくなった京都と、鎌倉を離れて地方の荘園に移ったようである。

大江広元と長井時広が公家の出身であることから、長井氏は京都と鎌倉に住まいしていて、国衛領、庄園を侵略する御家人とならず、文官的能史だったようである。

建武三年(一三三六)四月、足利尊氏が攻上った時、長井重継は尊氏方(北朝)に属し行動を共にしたようである。しかし長井一族のほとんどは、南朝に加担したようである。延元元年(一三三六)四月の『建武年間記』武者所結番によると、楠木正成・名和長年・新田貞義(義貞カ)等総員六十三名の中に、長井因幡守貞恭・長井掃部助貞匡・長井右近大夫将監高広・長井大膳権大夫広秀・長井前治郎少輔頼秀(長和庄西方地頭)の五名の名前があり、翌五月、湊川の戦いで楠木正成は敗死、新田軍は敗走、後醍醐天皇は坂本に遷行、扈從者に長井氏の名は見当らない。

康永三年(一三四五)三月『結城文書』によると、幕府の引付結番に、

長井出羽守（頼秀の子息貞頼、長和庄西方地頭）長井縫殿頭（重繼）長井治郎少輔（頼秀）が任命されている長井重繼は並地頭でなく、有能で実力を兼ね備えた地頭であったようである。

古文書よりも確かな史料に遺跡があり、草戸町の常福寺（現在の明王院）の本堂には「元應三年（一一三二）三月十四日、沙門頼秀」の墨書があり、貞和四年十二月の五重塔の相輪伏鉢陰刻銘に「住持沙門頼秀」と彫込まれた地頭頼秀の名前が二国宝に残されている。

長和庄西方地頭長井頼秀について、一番の問題は常福寺の関係であるが、江戸時代に創作されたものと推定される寺縁起や、元和七年（一六六二）の疑問の多い本堂の棟札が、参考史料とされたためか究明は進んでいない。

明暦元年（一六五五）の頃、常福寺と明王院が合併する、常福寺十七世舜意は地頭分村の福成寺の住僧となり、合併後の明王院の住僧には、新しく宥仙十八世が住僧となる。以後、年月は移り、住僧勝剛二十七世は、嘉永三年（一八五〇）に没している。宥仙から勝剛迄の延年数は、一九五五年で、住僧一世当りの平均年数は、一九・五年になる。

寺伝の開創とする大同二年（八〇七）から明暦元年迄の延年数は八五〇年で、住僧一世当りの在任職年数五十年と常識で考えられない年数となる。江戸時代の平均年数である一九・五年で、十七世溯ると開創は元亨三年（一一三三）となり、本堂墨書の元應三年（一一三二）と略一致することは、本堂を建立した時が、常福寺開創の年として誤らないものと推定する。

従来『毛利家文書』の一三七〇・一三七一号文書の関東御教書に記されている、長井出羽左近大夫将監入道が頼秀である、とされてきたのであるが、『建武年間記』は頼秀を治郎少輔と記していることから、左近大夫将監は頼秀とは別人で、頼秀の父親かと推測する。

『尊卑分脈』の大部分の系図は高く評価されて当然であるが、大江系図の長井氏は誤が多く、信頼性の低い史料で下記のような誤がある。

一、長井時広を関東評定衆としているが、時広は評定衆に任命されていない。『群書類従』四十九、関東評定衆伝。

二、長井因幡守貞泰は、関東評定衆長井時秀の孫であるが、備後守護長井頼重の曾孫と書かれている。『遠山文書』（足利直義神判下知状写）

三、花園天皇の『花園宸記』によると、元弘元年（一一三三）十一月二十六日、幕府の使者として長井右馬助高冬が入洛する。後、高冬は後醍醐天皇の隠岐島配流を実行させているが、系図に見当たらない。

四、『常楽記』に、長井氏の死者十二名中、系図と名前が一致する者は僅か三名で、七割五分の人が記されていない。

頼秀の子孫である福原対馬が、享保十年（一七二五）の頃に書いた『閩閩録』八ノ二先祖書には頼秀について

「頼秀、左近将監、因幡守、出羽弾正藏人、

出羽前司、法名道可

元徳元年八月十一日死、六十三歳」

と記しているが、左近将監、因幡守、出羽守の確證は無く、出羽弾正藏人は子息貞頼が名乗った受領名である。法名道可は頼秀であり、頼秀は元

徳元年八月死としているが、同年十二月に頼秀は、「毛利家文書」一三七号文書に讓状を書いているし、貞和四年に五重塔への陰刻名が残されていることは頼秀が生きていた証で、元徳元年八月死は誤である。

保延三年（一一三七）鳥羽上皇によって安楽寿院が創建される。足利尊氏の先祖、源義家の孫である足利義康が、足利氏の本領下野国足利庄を安楽寿院へ寄進し、足利氏は足利庄の預所職を相伝している。

その後、安楽寿院領は八条院（鳥羽天皇第三王女）の知行となり、以後八条院御領は皇室領として伝領され、延慶元年（一一三〇）閏八月に、尊治親王（後醍醐天皇）に譲られている。

このように、天皇家と足利氏とは、所領を通じて古くから結びついていて、元弘三年（一一三三）五月、鎌倉幕府の命を受け西上した足利高氏（尊氏）は、幕府に背き後醍醐天皇の官軍に味方をする。

延元四年（一一三九）八月、後醍醐天皇が吉野の宮で崩じられると、尊氏は、天皇の菩提を弔うため天龍寺を創建する。

長和庄は、安楽寿院の末寺である興善院へ、藤原惟方と民部郷三位局（藤原季成の妻で惟方の姉、以仁王の祖母）等が仁平元年（一一五一）に寄進した庄園で、八条院御領として伝領され、足利庄と同様に、後醍醐天皇の所領であった。

地頭長井氏の先祖、大江広元は藤原光能の子であり、また、娘婿の長井時広も藤原氏の出身として誤りないようで、庄園を通して、天皇家と公家の後裔長井氏の関係は続いていたようである。

当時、幕府は守護を通じて、安国寺・利生塔の建立していた時に、一

地頭の方で塔婆（利生塔と同、五重塔）を完成させた頼秀の頭を何が去来していたのであろうか。

元弘三年（一一三三）五月、足利尊氏の六波羅攻めに、京都守備配置に付いていた長井氏が、主家北条氏を裏切り攻撃軍に参陣し、続いて、建武三年（一一三六）南朝方に与しながら、後醍醐天皇を輔弼して最後迄行動しなかったこと等々、元弘以来の戦没者、後醍醐天皇と北条一族の遺霊を供養する大きな目的と、文字にして後世に残すことのできない秘密がかくされていたとも思はれる。

幸いにして草戸千軒の関係で、長和庄の究明も進められ、我々地元民も、長井氏の史料を冷静に検討して誤りのない歴史を後世に伝えてゆきたいものである。

《特別寄稿》

水野勝成の軌跡

立石定夫

一、流浪十有五年

水野勝成は、永祿七年七月十五日三河刈屋城主水野忠重の嫡子として生れた。母は都築右京進吉豊の女である。幼名国松、長じて藤十郎、六左衛門と云う。今にのこる勝成の画像をみると、眼は大きくて鋭く、肩巾が厚く頑強にして、膂力にすぐれ男性的な精気に満ち満ちた風貌である。性情の過度にまで烈しかった。

水野家では代々忠と云う諱が多い。祖父は忠政、父は忠重、伯父に忠守、忠近、忠勝、忠分等がある。しかし彼には忠の名のつく諱は与えられていない。弟は忠胤、忠清、忠直と云う。何故であろう。

彼の初陣は天正七年の遠江高天神城攻めで、その後、甲州黒駒の合戦、尾張本治の戦、同長久手の戦、同蟹江の戦に歴戦して武名が高かった。

にも拘らず、父忠重は勝成と合わず、後継者としては弟の忠種を擬していたと見られる節がある。忠種は後に織田信長の女を娶っている。

忠重、勝成の父子の嫌悪感は、やがて憎悪となり、天正十二年忠重の侍臣富永半兵衛を勝成が斬ったことから父忠重に勘当を受け、勝成は浪々

の旅に出る。齡二十一才の時である。

勝成は豊臣秀吉に仕え、紀州雜賀攻めに参陣し、翌天正十五年佐々成政に仕え(千石)、成政除封後、小西行長、黒田長政に仕える。長政に属して海路東上の節、船中で辱しめをうけたとして輒で無断脱隊し、そこから備後、備中をあてなく逍遥する。

勝成の足どりは確かではないが、鞆から熊野の渡辺民部、芦田郡高木の豊田美濃、甲怒郡上下の鉄屋兵三郎らの許に奇遇した後、神石郡来見の吉岡太郎左衛門方に滞在。ここから山野村を経て備中後月郡吉井から成羽に赴き、三村親成をたよる。親成は松山城主元親ら一族滅亡後、毛利に被官、八千石を与えられていた。勝成は十九石の扶持をうけ、小坂信濃守利直こと藤井好恒(道斉)の女、お登久との間に長男長吉(後の二代勝成)を儲ける。

慶長三年、秀吉が死んで戦雲俄かに起くる。勝成は家康の口きゝで父忠重の勘気が解かれる。天正十二年に父の許を離れてから十五年間、勝成の流浪が続いたのである。青春の自ら選んだ流浪の生活であった。

勝成は天正十二年、廿一才のとき、父の許を脱し、五人の大小名達に

仕えつゝも、放浪生活は十五年に及ぶ。此の間に彼の味わつた長く重い経験は、豊かな人格形成に役立っている。人間関係の重要性と貴重さを、身を以つて知っていた数少ない人であつたらう。何れの時代であつても、草創期のたぐい稀な事業は、綿密な人間関係の基礎にあることは、今も昔も変りはない。

二、経世家勝成の登場

元和元（一六一五）年五月、大阪夏の陣、刈屋城主水野日向守勝成は、東軍大和国の先峰大将であつた。東軍は、大阪攻めに大和国と河内国の二方面に、兵を分つた。

河内国は、井伊直孝、藤堂高虎らであつた。大和国には、水野勝成、松重倉政、桑山元晴、堀直寄らの外、兵力の大きい軍団として、本多忠政、松平忠明、伊達政宗、松平忠輝が當つて居り、総勢三万五千であつた。

勝成が僅か三万石刈屋領主と云う小身であり乍ら、大和国方面軍の総指揮官であつたことは、徳川譜代の中に指揮能力に勝れ練達な者と云へば、家康の脳裡に、水野日向守と云う名が直ぐに浮かんだのであろう。

勝成、時に五十二才。軍事指揮者として有能であつた。

此の戦いを終え、同年七月、その戦功に依り大和郡山六万石に転封となる。勝成は不満であつた。十五年前の慶長五年、関ヶ原の戦のあと、徳川家康の所領は二百五十万石から四百万石に拡張し、最強の地位を固めた。同時に西軍に属した外様大名の八十八名が改易され、その所領二百十六万石が没収され、更に減封五名、没収総高は六百三十二万石に達

した。東軍方の諸將はすべて所領を増やした。命によって美濃国曾禰を守り、大垣城攻めゆのあつた勝成は一切の増祿がなかつた。そして今、十五年を経、大坂攻めに軍功あつて六万石の沙汰である。

同年八月郡山に入った勝成は、洞泉寺の境内に仮の住居を構えた。近時大名が次々に行うような本城の普請や城下の築営には、手をつけようとしなかつた。

元和二年徳川家康が逝つた。同五年安芸備後の大守であつた福島正則が改易される。七月二十二日、將軍秀忠から伏見に呼出された勝成は、備後七郡、備中一郡一村、十萬石領主として加祿転封の命をうけた。残暑が尚きびしく、陽は高かつた。勝成五十六才。待つこと久し、経世の日が来たのである。

三、勝成の構想力

元和五年八月四日、土分百十九名を引具し海路鞆につき、深津に至り神辺の旧城に入り、福島丹波守正澄（城番は弟玄蕃）の屋敷に入った。丹波は福島正則の筆頭家老であつたものである。直ちに領内の巡視を行ない、品治郡桜山、沼隈郡養島、深津郡常興寺山が候補地として検討され、近世藩府の町として、西と北に芦田川を控えた要害で、そのデルタに城下町として広い地帯が確保出来る丘陵、常興寺山に築城することが決定した。古書に云う。

此ノ地ハ古ハ水タマリニテ 其頃ハ茫々タル芦原ナリシヲ御覽アツテ
此処コソ行末永ク栄フベキ要害ノ地ナリトテ 繩張りハ候御自身遊バ

サレシ也（西備名区）と。

元和六年、勝成は城郭と同時に町の建設に着手した。当時、芦田のデルタは、今日の方法ではなかった。野上半島と深津高地の両腕に抱かれた湾内は、木之庄、吉津、奈良津に面し、深津の薬師寺あたりも西浜として遠干湾であった。鞆を外港として海上交通を抑え、河口を干拓して城下町を建設する。大構想であった。築城と浜と呼ぶ運河、街区をわかち要所に寺院を配置し、侍屋敷七十二町歩、藩用地三十六町、十二町の商家町並み（のち三十町に拡大、七万五千坪）が、次々と完成を觀た。干拓は、野上、引野、沼田、手城、多治米、草戸、川口など相次いで実行され、寛文期までに新田開墾が行われて行く。元禄期には、福山城下で家中家族一一、七九七人、町方人数一二、九七九人、計二万五千人弱の人たちの生活が繰りひろげられる。葦の風にそよぐ茫々たる土地は、近世城下町に変貌する。まさしく壮大なドラマの誕生である。然も近世史上、城下町全体が埋立地に造られたと云うのは、他の都市の例を觀ない。

常興寺山の丘陵から眼下に茫莫と拡がる葦の原を俯瞰しながら、一人の男の画いた夢の壮絶さには、驚嘆するのみである。爾來三百六十年、福山の歴史にあって、これ程にスケールの大きい構想力をもった人は、何処にも出ていない。

四、逞しい実践力

此の大きな企画性を貫いた強烈な実践力も見逃すことは出来ない。

例えば、当初勝成は、永徳寺山（八幡社丘陵）と天神山の間を堀り抜き、本庄良の鼻から水を引き、深津村薬師前に流すこととした（深津川）が、元和六年五月大雨大洪水によって河川氾濫し、城の石崖は崩れ、頓座した。改めて良の鼻を塞いで、上流の高崎に取水口をつくり、更に芦田川を草戸に向けて流すべく、良の鼻から池の湧、野上、五本松までの所謂野上堤防を整備した。僅かに二年余の突貫工事である。城は元和八年八月の完成であった。

（元和）八年、御城並二町架残ラズ成就シ同ジキ九年、御礼ノ為ニ御参勤遊サレシト聞エケル（西備名区）

城も町家も、水道も期を一にしている。現代の土木工学を以てしても、驚くべきエネルギーの噴出である。

また寛永十二年着工した瀬戸池、同十九年着工の春日池、同二十年着工の服部大池の大工事は、生産力の向上をめざした用水池の整備であるが、何れも二年程度で完工している。責任者は神谷治部長次であるが、寛永十六年家督を二代勝俊に譲り乍らも、背後に勝成の強い意図が窺える。今岡（駅家町）の末谷池は、勝成自身、率先現場に於て作業指揮中に島原出陣の報に接する。

創業時の精神の強靱さは、何時の場合でもそうであるが、特に水野藩が福山の草創時にかかる形相は、凄烈だったと云ってよい。例えば奉行

神谷治部長次が市村綱木（今の西深津町）で示した気魄には、圧倒される思いである。芦田川の水は、二股で上井手用水と下井手用水に分けられる。井手とは田地に取水する施設である。上井手の水がかりは、本庄木之庄、吉津、深津、奈良津、三吉、手城、市、引野、吉田の十ヶ村をうるおすものであるが、その灌概用水を導くために、神谷は岩盤掘削の工事を監督していた。綱木が高い地区で、岩石固く険しいため、人夫は割ぬきが出来ず、工事至難を訴え中止方を求めた。治部は、「この個所の難事はもとより心得ているが必ず出来る筈である、汝ら今之をやめると云うなら、この場に於て拙者は自刃する」と叫び人夫の割籠弁当を取り上げ太鼓を打って、かゝれと命じ、間もなく堀切らせたと云う。

「此ノ所ノ難シキコトハ、我等モトヨリ心得タリ今コレヲナヤマテ堀切りヲヤメレバ、ワレ生涯遂ゲ候」と叱咤した神谷治部の気力が上井手用水を成就させている。治部の設計技術や施工能力は抜群で、後に出る本庄重政と共に三百年後の福山の骨格を残している。

福山の水道にしても、蓮池の貯水池から幹線を南と東に走らせ、町角に設けた貫洞から池や土管で各家に引かせた。

福山御家中、町場ハ呑水ハ芦田川ヨリ御取成サレ候 御家中 町共ニ
小略ノ真中ニ溝川ヲ附 自由ニ水御取成サレ候（領分語伝記）

とある如く、全市に敷設した勾配や構造等の技術は、福山城の縄張り、城下の都市計画などと共に、何時どうして養われたのであろうか。何れにしても、施工の活力と覇気は、目を奪うものがある。精魂をかける、と云うものであつたらう。

五、勝成の文化性

勝成は、連歌や和歌を嗜み、俳諧の心得もあつて自ら詠吟している。倉光（駅家町）の明泉寺知箭を俳友として連歌した五十句、百句が現存し、命意措辞ともに見るべきものがある。特に慶安四年二代勝俊に勤えた野々口立圃は、草戸記などの名文を残し、福山藩在中に多くの知己門弟を持ち、福山に文学の黎明期をもたらした。「たちそふや濃茶の上の薄露」は彼の五十五才のとき、野遊にさそわれ出て、人々茶をたべたりけるを見て、詠んだ句である。

戦国乱世、大名や武家の嗜好する音曲として能が栄えた。勝成も能を好んだ。島原の乱で、本丸に攻め寄せた水野勢の先登に立つ十四才の初陣、孫勝貞の奪戦ぶりをみて、高らかに八島の一曲を舞った。と云われる。勝成は伏見城内にあつた能舞台を拝領し、江戸から御能太夫喜多七太夫父子を招き、中島甚五左衛門に御能奉行を命じ、能入用二千石と云う傾倒ぶりであつた。万治年中、能は最も盛事であり、ひろく町人層に普及して行く。

儒学、特に朱子学は、水野藩において儒者中島道允、佐藤直方を生み、山崎闇斎学派が風靡するようになる。勝成が久留米より招いた蚕江紫衣、泉菴寺の鷲翁応夏、三世太白克醉、刈屋から伴った賢忠寺の能山芸禪師など、何れも漢詩文に造詣深く、文藻をもって知られている。

千利休によって完成されるわび茶は、大名たちに広まった。勝成もその愛好者で、茶道衆を抱えている。京の後藤栄乗から金二百枚で購入し

た丸重茶入、式人静茶入、染付七文字之茶入、合力之重、三ヶ月重、美濃茶碗、宗阿茶碗などが水野家什物として、水野記に載っている。

美術工芸の絵画、刀剣、建築、陶芸なども偉れたものを残している。

六、歴史を支える情念

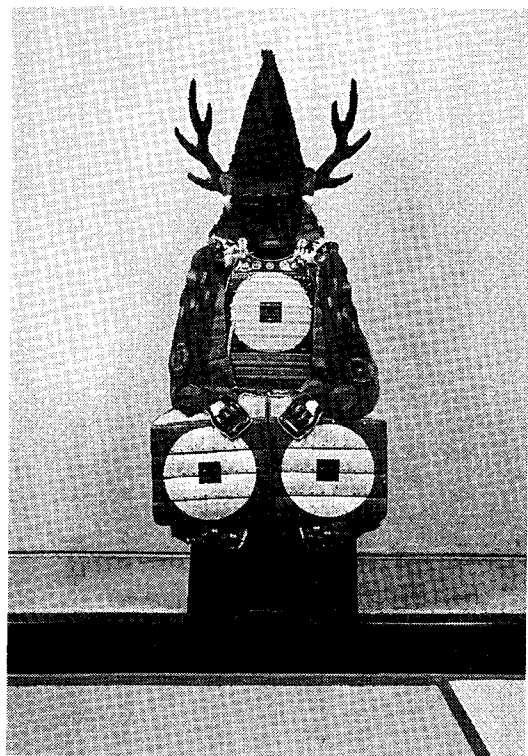
水野藩の由縁の寺は、福山城下に三十四ヶ寺ある。勝成の建立した曹洞宗の賢忠寺、同じく臨済宗の弘宗寺、竜洞寺、真言宗の松山寺（廃寺）の外、神辺より移転せしめたのは、曹洞宗の竜興寺、臨済宗の永雲寺、浄土宗の大念寺、真言宗の胎蔵寺である。三河より移転せしめたのは、曹洞宗の泉竜寺、浄土宗の定福寺、日蓮宗の妙政寺、光政寺、真宗の妙蓮寺、寂丹寺、道証寺などであった。勝成が、新たに開拓した土地を福山と名づけ、此の町を生活の場として、永却にわたりより深く整え、長く生命の灯を点じようとしたことがよく判る。

備後には、水野家由縁の社は、十六ある。これらの内、今に傳え宗教活動を行っているのは、神社十五社、寺院三十二ヶ寺にのぼっている。神明脈々、法灯連綿として星霜三百年を越えて現存し息づいていることは、庶民の奥深い悲喜の情念である。福山に住んだ人たちの意志の深さ、念力の強さが歴史を貫いていることに感嘆する。此の地に生きた先人たちの情念をしみじみと覚えるのである。

七、勝成にみる人間観

戦国の世に生きた人達の精神の確たる強さと安定さは、戦乱に肉親を失ない、明日の生命のあけくれに生き抜こうとした人達なればこそであったかも知れない。天正三年水野家の統領であった伯父下野守信元、慶長五年には父和泉守忠重を殺害され、慶長十四年には弟の忠胤を自刃せしめねばならなかった人間勝成の悲哀があつて、始めて彼の詠んだ「何時の間に身に秘む風の秋にこそ」の句が判らうと云うものである。

勝成の人間関係を観ると、愛情深くあたくかい。それは天正七年高天神城攻めの初陣から、寛永十五年島原の乱まで、五十余度の戦いに臨み、



島原の役に着用したと云う勝成の甲冑

人に劣りたることなしと云われた鬼日向の印象からは、別人に見える。

彼の前室は、備中吉井の零落した土豪藤井道斉の女於登久であり、後室は成羽の小領主三村親成の姪の於珊で、権門貴族との閥閥はない。

彼の叔母が家康の母於大であり、妹は加藤清正の妻、弟忠胤の妻が織田信長の女であったことなど考えると、勝成の強い婚姻観も判らうと云うものである。

勝成と家臣団とをめぐる数多くの挿話をみても、寛大に慈、人心の機微を掴んだ見事な統率ぶりである。勝成は備后領主として民政面にも統治能力をもち、草創期の大名に要求される資質は十二分に具えていた。

調査報告

正福寺裏山二号古墳測量調査の報告

備南に於ける前方後方墳の確認

山口 哲 晶

一、はじめに

去る五年前の昭和五九年、正福寺裏山古墳群の一号古墳の墳丘測量調査において、一号古墳の墳形が今まで福山市史等の文献で述べられている如くの前方後円墳というよりはむしろ尾根上に築かれた円墳の可能性の強い事を一九八五年（昭和六一年）、当会の機関紙である「山城志」第八集に於て指摘した。

今回、同古墳群の二号古墳（山城志第八集に於て合の坪古墳として新たに命名することも併せて提案した）の墳形についても各種の文献より前方後円墳として紹介されており、又葺石、埴輪等の存在も指摘されていた為、備後の南部地域においても数の少ない前方後円墳としての墳形を確認、併せて正福寺裏山古墳群のまとめとして当二号古墳（合の坪古墳）の墳丘測量調査を実施し、当初の墳形について以下の結果を確認し得たのでここに報告する。

二、位置及び環境

本古墳は福山市加茂町字下加茂の正福寺の丁度背後にあたるほぼ東に伸びる尾根上に存在する。当古墳の所在する福山市加茂町は芦田川が形成した神辺平野の北縁に位置し、南北に流れる加茂川を挟んで東西に丘陵が延びており、備南地方の古墳密集地帯の中心的な位置にあたる。その西側の丘陵より東南に派生する標高七十メートル、水田との比高約三十メートルの尾根上に本古墳は存在している。当古墳の存在する尾根より八十メートル西上方には先年当会古墳研究部会により墳丘測量調査を実施した正福寺裏山一号古墳が存在し、当古墳と併せて正福寺裏山古墳群を形成している。さらに一号古墳はもとより、二号古墳からの眺望も加茂平野が一望のもとに見渡せる好所であり、極めて良好な位置を占めている。

周囲には当古墳の所在する西側の丘陵に倉田池をはさんで北方に終末期古墳の猪の子一号古墳、さらに内山古墳群、倉田古墳群、上組古墳群が存在し、西南方向には下加茂古墳群、掛迫北古墳群があり、さらに三



- | | |
|------------|----------|
| 1 正福寺裏山古墳群 | 2 倉田古墳群 |
| 3 猪の子古墳 | 4 上組古墳群 |
| 5 中野古墳群 | 6 石鎚一号古墳 |
| 7 掛迫六号墳 | |

後方部の各辺は円墳と異なり直線で構成され、各コーナーは九十度の角度をもって方形に復原する事ができる。又、前方部の存在は西側のくびれ部が土砂の流出により崩れ判然としなが東側のくびれ部は良好に残存しており、前方部をそれと復原できる。さらに前方部先端が少し盛り上った形を呈している。又、後方部と前方部との比高は

角縁神獸鏡を出土した備前地方では数少ない竪穴式石室二基を有する中期古墳の掛迫六号古墳を含む掛迫古墳群から駅家の法成寺西上古墳群へと続いている。
又、当古墳から加茂川をはさんだ平野の東側丘陵には丁度当古墳の中軸線の延長線上に列石をもった円墳で、中国製の斜縁二神二獸鏡を副葬し

ていた前期古墳の石鎚一号古墳が存在し、さらにその北東の菱原池に突き出た尾根上には五世紀前半より六世紀後半頃まで営まれた吹越古墳群、さらに神辺の中条より加茂に通ずる道路のある谷をはさんで北方には中野古墳群が存在し、まさに当古墳の周辺は古墳の密集地帯となっている。

三、調査の結果

(1) 墳形について

墳形は測量図に示す如く前方後円墳の後円部が方形を呈する、所謂前方後方墳である事が明らかになった。

墳丘規模は全長二十九メートル、後方部長十七メートル、後方部幅十三メートル、高さ三メートル、前方部長十二メートル、前方部幅七メートル、高さ一・五メートルを測る。後方部については、墳丘が細長い尾根を最大限に利用している為か純然たる正方形ではなく縦に細長い長方形の形を呈する。

一・五メートルを測り、後方部に比べ前方部が低い形式である事が判る。つまり墳形は全長二十九メートルの縦に細長い後方部を有し、後方部より低い前方部をもって構成される前方後方墳であることが判明した。

(2) 外部施設について

外部施設については、福山市史上巻の「正福寺山前方後円墳」の項に「表面は葺石でおおわれて埴輪円筒片が散在している。」と記載され、又広島県立府中高等学校生徒会地歴部の「古代吉備品治国の古墳について」では「合の坪前方後円墳」として紹介され、同じく葺石、埴輪片が散在していると報告されているが、踏査したところ現状に於ては葺石及び埴輪片ともに少なくとも墳丘表面に於ては確認する事ができなかった。

(3) 内部主体について

内部主体については、広島県立府中高等学校生徒会地歴部の「古代吉備品治国の古墳について」（一九六七年）によると「主体部は後円部の頂上中央に竪穴式石室が一ヶ所、主軸を古墳の主軸に平行して埋れているらしく、その部分の地面が幅一・七メートル、長さ三・九メートルの範囲にわたってややくぼんでいる。おそらく石室の四隅が内側にたるんで、天井石がそれだけ沈下しているのであろう。」と記載されているが、後方部頂をボーリングステッキにて確認したところ石材の使用の可能性はなく、木棺直葬あるいは粘土槨等の石材を使用しない埋葬施設が考えられる。

四、前方後方墳について

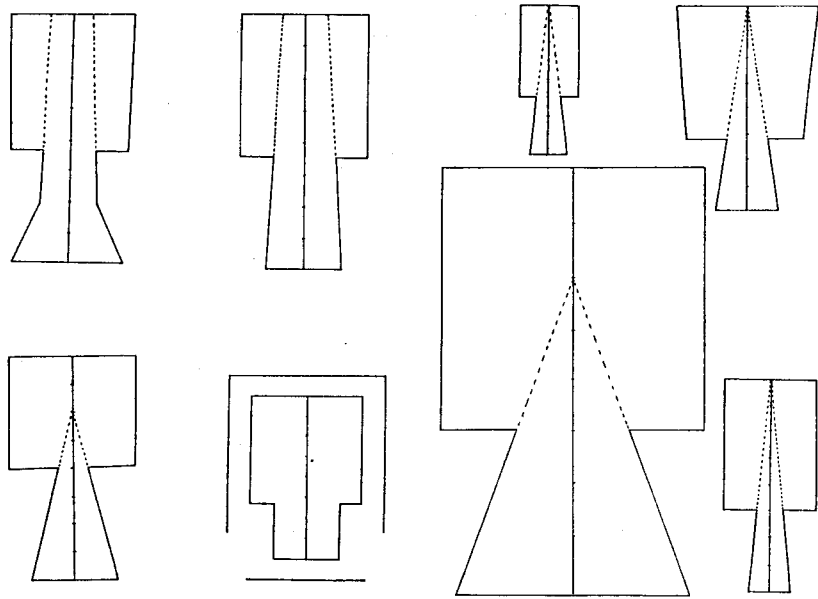
全国的にはもとより備南地方に於ても数少ない前方後方墳について、「前方後方墳」というものが現在においてどの様にとらえられているかについて簡単に述べておかねばならないと思う。

(1) 形態について

前方後方墳というものは文字通り前方後方形であり平面プランは矩形あるいは方形と三角形の結合が基本となる。しかし、概念としては野津左馬之助は「前方後円墳の後円部を方形に築ける」とし、後藤守一、大塚初重両氏は「方墳の前に前方部を設けた」とし、さらに近藤義郎氏は「方墳の前面に祭壇を付設したもの」と言われる様に各々研究者に於てそのニュアンスを異にしている。

(2) 構築される選地について

大別して山頂及び尾根上に構築されるグループと生活面に近い台地上に構築されたグループに別られ、全体的には山頂及び尾根上に構築されたものが圧倒的に多い。この事は前方後方墳の選地が山頂他界観の強い影響下に構築されたものであり、特に弥生時代の墓制の伝統を強く反映したものと理解できる。さらに弥生時代墓制の中には平地に埋葬された集団と山頂に埋葬された集団があり、山頂に埋葬された集団がこの様な



(茂木雅博「前方後方墳」1984より転載)

前方後方墳を生成させたと解する。しかも、生活面に近い台地上に構築されたグループは墳丘封土が全て盛土であるのに対し山頂に構築されたグループは殆んど地上を墳丘として加工している例が多い。この事は弥生時代の墓制の大半が地山面に掘り込まれている点を考えればこれも選地同様に弥生時代墓制の影響を強く受けたものと解される。

(3) 内部主体について

埋葬施設に関しては粘土槨が左例的に多く堅穴式石室は吉備と畿内に集中し、横穴式石室は出雲に非常に多い。

前述の如く前方後方墳の成立が弥生時代墓制を基盤として存在しているのに対し、古い時期の前方後方墳は突如として構築されるという違いがある。それは前方後方墳の内部主体が弥生時代の墓制をひきつぐ粘土槨や木棺直葬であるのに対し、前方後方墳は前方後方墳よりはるかに長大な粘土槨や堅穴式石室が構築されるという特徴をもっている。又、前方後方墳の中に殆んど粘土床、木棺直葬という埋葬施設を有しない事も前方後方墳が弥生時代の墓制の踏襲と認められる。

その原因を推論すれば第一に吉備を中心に前方後方墳が大形高塚古墳として構築され、その後前方後方墳が畿内を中心に構築され得る為、前方後方墳の埋葬施設に大形化の傾向が現われるとみる事ができるかもしれない。第二に畿内を中心に発展する前方後方墳の首長連合と吉備を中心として前方後方墳を奥津城とする首長連合の対立する時期と解し、やがて前方後方墳を盟主とする畿内連合政権が吉備を圧した為に前方後方

墳が全国的に構築されたと解する事もできる。

(4) 発生期の問題

前方後方墳が弥生時代の墓制の踏襲として山頂及び尾根上に構築されたと解いたが、その基本思想の山頂他界観については前期古墳にあらわれるのではなく、吉備に於ては弥生時代墓制にすでにみる事ができる。吉備に於ても最も古い時期の高塚古墳である都月一号墳（前方後方墳）は同じく最も古い時期の古墳である車塚古墳（前方後方墳）に対し在地的強い墓制の中に成立し、その内容にかなりの差を有している。それは埴輪の存在である。都月一号墳には在地的性の非常に強い特殊円筒埴輪が発見されているのに対し車塚にはそれが存在していない。にも拘らず土師器が少量検出されている。この両者の差異は時間的なものなのか、あるいは被葬者の性格によるものか、あるいは他に原因を求めねばならないのかは明確にし難いが、この特殊円筒埴輪の存在は都月一号墳が吉備の強い在地的性の中から前方後方墳を成立させたことを意味する。しかし、都月一号墳及び車塚を構築した政権の首長は両古墳の二代で終りをづけ、所謂造山、作山古墳を生み出した首長は大和政権下に入った体制内豪族にすぎず吉備独自の古墳文化を發展し得たものではなかった。やがて都月一号墳、車塚古墳を最後にその地をはなれ、美作に中心を移し変形した状態でその後前方後方墳を發展していったものと思われる。

吉備を中心に前方後方墳が構築された時期は前方後円墳の構築と相前後している。前方後方墳と前方後円墳との両者の間にはかなりの差が明

確である。その較差が吉備を中心として大和政権に対抗したとみられる節もあるし、あるいは又、前方後円墳を奥津城とする大和政権に先行してこの種の古墳を中心とする政治連合とみることもできる。

都月一号墳、車塚古墳と何らかの政治関係を結んだであろう前方後方墳が各地につくられ、前方後円墳のそれとかなり較差を有していた事、さらに出雲、関東に後期になって構築されたものは前方後円墳のそれと何ら相違なくなっている。そして車塚古墳構築時までに各地につくられた大形古墳は数の上では前方後円墳と大差がなかったと思われるがそれ以後圧倒的に前方後円墳が多くなる事も事実である。このことを大和政権の勢力伸張とみる事はもはや一般化しているといえよう。

五、まとめ

正福寺裏山二号古墳は全長二十九メートルの前方後方墳という特異な形を呈する古墳であることが明らかになった。

現在、広島県内で確認されている前方後方墳は、湯釜古墳（広島市）、上矢口古墳（広島市）、善法寺九号古墳（三次市）、千ガ寺一号古墳（庄原市）で、前方後方墳の可能性を有しているものとしては宇那木二号古墳（広島市）、蔵王原古墳（福山市）であり、備南地方で確認された前方後方墳としては当古墳が最初である。

古墳の密集地帯である当地域に前方後方墳が存在したという事は当地域の古墳時代を考える上に於て極めて重要な意味を有するといえよう。

しかし、全国的にも数が少なく、又全容の明らかになった例も少なく今後の研究の成果に期待せねばならないであろう。

又、当古墳の主軸の延長線上に前期古墳の石鎚一号古墳が存在するが、この古墳と何らかの関係があったものと思われるが今後の課題である。

六、おわりに

正福寺裏山二号古墳を測量調査するにあたり広島県立葦陽高等学校郷土史研究部員、広島県立府中高等学校地歴部員、福山市立城東中学校生徒、当会員の方々の多大な協力を得たのでここに記して感謝の意を表したい。

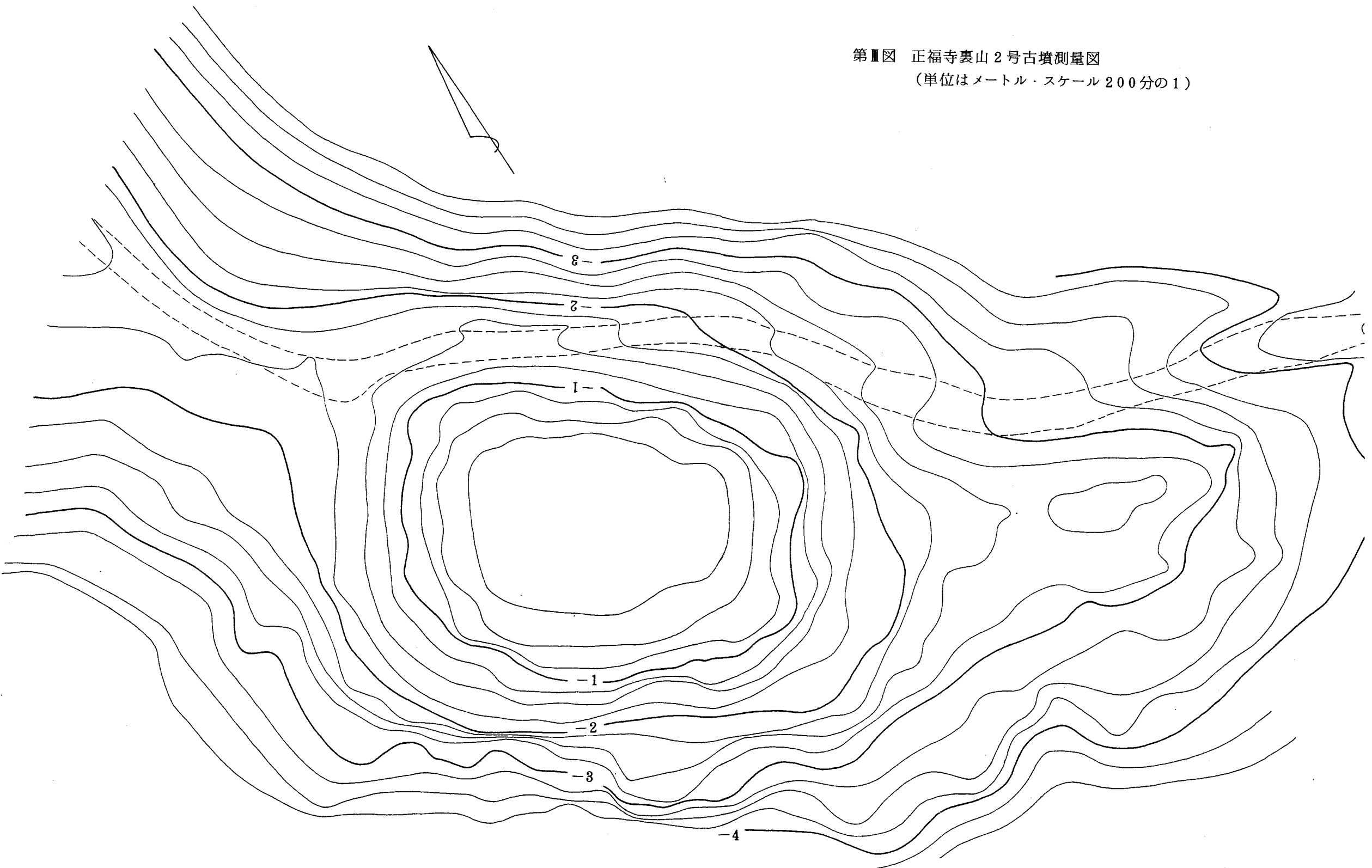
最後に本来ならばこの様な重要な成果をもっと早く報告せねばならなかったのであるが種々の事由により遅くなってしまったことを深くお詫びする次第である。

△参考文献▽

茂木雅博『前方後方墳』

雄山閣出版 昭和五九年

第Ⅲ図 正福寺裏山2号古墳測量図
(単位はメートル・スケール200分の1)



調査報告

府中市久佐町の地名について —— 榑崎城跡の総合調査概報Ⅰ ——

城郭研究部会

(地名と石造物)

初めに、府中市久佐町には榑崎山城と云う戦国時代の城跡が有り、此城跡を測量したが、此では城跡の麓の城下町形成と云う点で調査をしてみた。

地名に就いて

字名を付図に記入しているので地名の位置についてはそれを見ていた
だきたい。地名の意味に就いては次の様に思う。

A、社会地名

八木原とは城の麓に有り、矢木原の意であろう。矢を作る木の原野の
意か、毛利氏に攻められた時の戦い場の意味であろうか。

永登路と永トロは同意であると思う。長登路で、長い登り道であろう
つまり、久佐村落へ行く時の道であろう。此道については④の地点に石
仏が有り、①の地点に湧水らしき所が有り、②の地点で道の古い石垣が
有る。此道には電柱の木が倒れており、現在の道ができるまでは、此道

を使用していた事をうかがう事ができる。

南坊とは南の坊(寺)の意であり、此でいう寺とは安金寺の事であ
ろ。此と同じ様に、南坊の上とは此南坊の山側であり、寺ノ前とはまさ
に安全寺の前である。

石垣とは久佐川(芦田川)の土手の石垣の意であろう。そして此石垣
にある山の為に石垣山と云う地名になる。

古屋とは山の上であるが広い尾根であるので昔から人家があつたとい
う意の古い家という事か。又、土地の古老によれば、久佐八幡の上の
方に城があつたと云われるので、根小屋の意味で小屋(コヤ)であら
うか。

城ノ下とは、城の下という意であろう。現に、榑崎城の西斜面を城ノ
下と云う。但し、此榑崎城の峠を挟んで北西の尾根の西斜面も城ノ下と
いう地名である。此榑崎城は二子城とも呼ばれており、此北西の山の尾
根は広く、畑地と思うが、近代(近世)の石垣が有り、此山には、榑崎
城の出城らしきものがあつたのかも知れない。

B、自然地名

石落とは久佐川が山を削っており、つまり石が落ちるといふ様な崖と云う意であらう。

野崎とは野（原野）の崎（出ている所）という意であらう。

瀬戸とは瀬（浅瀬）等の川の流の速い瀬の戸（入り口）の意であらう。

宮谷とは久佐八幡の有る宮の谷であらう。

中山とは、中の山であらう。しかし、集落の中心とは思えないが、八幡社が有り、此あたりが意外と中心だったのであらうか。

滝ノフタイ、滝とは山が崖状であるので、滝の様な崖の所という所であらう。

ツカ丸、及び梅ヶ丸の丸とは、城郭の一ノ丸の丸ではなくて、山の尾根等が広い時等に丸という言葉が使われる事が有る。

朝山とは城ノ下の地名の所で少しふれたが、榑崎城の北西の山の東側を朝山と呼ぶが、此榑崎城を朝山二子城とも呼ぶ、そして此山が久佐集落から見たら朝日が当たる山と云う意味であらうか。

更に地名の場所のわからないものは、此持にある。

①石はしの本、石かつほ、②石かき、③そね田、④そねはり、⑤のきうち、⑥のきうち、⑦のきうちたふち、⑧かきうち、⑨かきうち井手、⑩かわうち、⑪かきまち、⑫中かいち、⑬西かいち、⑭六反田、⑮七反田、⑯八反田、⑰八反田おち、⑱ためやす、⑲ふるや、⑳ふるや田、㉑新助田、㉒神田、㉓なかれ田、㉔正田、㉕大田、㉖少田、㉗三角田、㉘老町田、㉙なかれ畠、㉚なるはたけ、㉛ひるはたけ、㉜かねうち、㉝まきかつほ、㉞一町かつほ、㉟大前、㊱ミそのうへ、㊲いかのうへ、㊳いかみ、㊴つ

つミそへ、㊴ごわうてん、㊵とうでん、㊶いかのへ、㊷堂の後、㊸堂の本、㊹堂のまへ、㊺堂のもと、㊻くらのまへ、㊼まへ、㊽大まへ、㊾なかまへ、㊿まこものあと、㊽まこものなわ

て、㊽なわて、㊽としむね、㊽むねもと、㊽みつすけ、㊽西いせう、㊽うへいせう、

いせう、㊽みた谷、㊽宮の下、㊽宮の下正田、㊽宮の下四反田、㊽宮のわき、㊽宮の

した、㊽いわやう、㊽山神の前道はさみ、㊽山神ノまへ、㊽薬師堂、㊽薬師堂ミそ

はた、㊽ゆすの木本、㊽ゆすの木下、㊽田中、㊽かん入、㊽かん入くほ田、㊽かん入

池の尻、㊽しも西はやし、㊽西はやし、㊽しもはやし、㊽有重、㊽志けのふ、㊽しけ

のふ、㊽おか、㊽谷、㊽かも、㊽なのら、㊽道のした、㊽道ノ上、㊽家ノ上、㊽家うへ、

㊽わき、㊽寺の前、㊽寺ノうへ、㊽けいわう、㊽たくち、㊽ふた八屋敷、㊽たくみや、

㊽なかのほう、㊽かり山、㊽どうへ、㊽かとかわ、㊽ひむら、㊽ゆのよう、㊽あかはね、

㊽えけ、㊽ちくはじ、㊽竹のした、㊽竹のわき、㊽のさき、㊽のさき渡り、㊽ちくばし、

㊽ちくはし、㊽くわんおん堂、㊽かあきくぼ、㊽かあき、㊽下なんほう、㊽南方、㊽宮

ノ下、㊽西林、㊽下林、㊽中川原、㊽いしやう、㊽うねきの地名が有る。

更に此地名の考えてみると次の様になる。

㊽②は石垣の意であらう。㊽①は石垣の端の事であると思う。㊽③は曾根田

であらう。㊽⑤は垣内（かいと）の意であると思ひ、㊽河谷等の谷の小平野

という意もあるが、㊽堀の内、㊽土居と同じ様に、㊽垣で囲まれた屋敷という

事であるかもしれない。㊽④は垣内と同じ様な意でなかるうか、㊽⑥は垣内

の中、㊽⑦は垣内の西という事であらうか、㊽⑧と㊽⑨は現地名の為安、㊽古屋

であらう。㊽⑩は諸毛町の下永野に三角庁と云うものがあり、その付近の

田（現地名の石垣）あたりであらうか、㊽⑪、㊽⑫、㊽⑬は現地名の上大畠、

㊽大畠、㊽下大畠の付近であらうか、㊽⑭と㊽⑮は権現（ごんげん）、㊽権殿（ご

んでん)、東殿(とうでん)の意であり、神社関係の地と思う。⑩⑪⑫
 ⑬は堂(神社の堂)と後、元(中心)、前、元(中心)と思う。⑭⑮⑯
 は真菰で、マコモ等の多年草の生えている所であろうか、(但し、本
 当に此処にマコモが生えるのかどうかも私は知りませんが)なわては
 意で田んぼのあぜ道の意であろうか。⑳㉑㉒㉓㉔㉕の宮は神社の宮であ
 る。(現地名の宮谷と関係が有るのか)㉖㉗は山神様がある事を示して
 いる。㉘㉙は薬師堂が有る事がわかる。㉚㉛㉜㉝㉞㉟のかん入は現地名の貫入
 と思う。但し、ぬきいりと現在では云っている。㊱㊲はその当時の道と思
 われる。㊳は現地名の野崎と思う。㊴は現地名の野崎への渡しであった処と
 思う。

石造物について

石造物と云っても多く有るが、主として、五輪塔、宝篋印塔、石仏の
 分布はA、B、Cを付図に示しているが、その中で五輪塔と宝篋印塔に就
 て記してみたい。

B 安全寺の横

宝篋印塔が七基有り、宝珠の先端の欠けているものも有るが、ほとん
 ど完形である。

C 人家の前の墓地内

五輪塔残欠が二基有り、墓石として使用されている石仏が八基有る。

D 大山堂の裏

小祠が有り、その横に、五輪塔の残欠が二基有る。

E 久佐小学校前

道を挟み人家の横に五輪塔の残欠が五基有る。

F 消防器庫の裏

諸田川の土手上に、五輪塔の残欠が十四基、石仏が十五基有る。

此で昔、戦いが有り、その首塚と云われている。

G 久佐八幡下

石段下に五輪塔の残欠が、二基と石仏が十基有る。

H ヤマオカ俵の前

広場に五輪塔の完形が二基、残欠が五基、宝篋印塔が二基有る。

I 満願寺(玉泉寺)跡

五輪塔が二十基とその残欠が六基有り、宝篋印塔が三基有る。

J 落合の集落内墓地

墓石として使用されていると思われる石仏が、七基有る。

K 矢木原集落内人家の横

五輪塔が一基と残欠が一基、石仏が一基、稻荷祠が有る。

L 矢木原、山の墓地

五輪塔が一基、残欠が七基有る。

更に石仏に就いて

⊗Pに石仏が有り、⊗Aに石仏が有り、久佐集落と落合集落の道が出来た
 時に此石仏を造ったのであろう。阿字町の舟割へ行く道が此石仏が出来

た時には有ったと思われる。⊗Q苧ノ花大師と呼ばれる石仏が有り、此

付近の山がかり山と呼ばれていると思われる。

まとめ（なぜ地名と石仏を調べるか）

地名では、現在地名だけを記しているが、地名の界、つまり字名界が重要で有り、此事に就いては、桑原公徳著の地籍図に色々な利用法が記して有るが、例として図1に見ていただくが城ノ内の内で一地番に分筆（1-1 1-2 3）に分筆されているが更に地形を見てみると、1-2の所が高いと此が天守と考え、1-10 1-9 1-8が幅広い高まりであれば、土塁、堀ノ内の3-1 3-2が池等であればまさに堀であった等と考える事が出来る等、更に土地が田、畑、林等を調べる事で中世村落を復元するうえで重要な調査方法である。

次に石仏では、五輪塔、宝篋印塔等の分布と時代を調べる事によって、江戸時代以前では、有力な豪族が造っている為にその有力な武士が此に居住しているかどうか、等がわかる。しかし、此年代については無記銘塔であるので、記銘塔と比較をして編年しなければならぬ。石仏については、その石仏の造立年代の農民の信仰等がわかる。なお此付近の石造物の編年に就いては、「国立歴史民俗博物館研究報告第9集」「三原市の石造物」等が参考になる。

最後に

現在府中市教委が市史を刊行中で、此文書中にも入れたが貴重な文書が数多く有り、市史刊行後に報告すればもっと良くわかると思うが、調査資料の紛失等がおきた為に刊行前に中間報告をさせていただきます。ですから刊行後には完全な報告をしたいと思っておりますのでよろしくお願

します。

なお調査は昭和61年にしました。参加協力者は、塚本、山下、高橋安子、牧平、高橋、後藤、小寺、田口、佐藤洋一（順不同）でした。御参加ありがとうございました。古い事ですので、他に参加されている人がいましたら御一報いただければ幸いです。

それでは次回まで。

（文責 七森義人）

参考文献

「府中市史」 近世史料編1

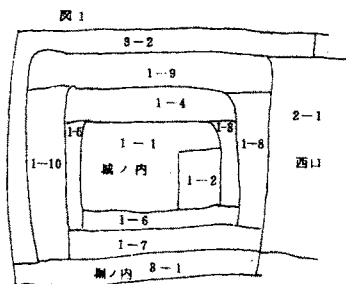
〃 〃 〃 〃 〃 〃
地理編

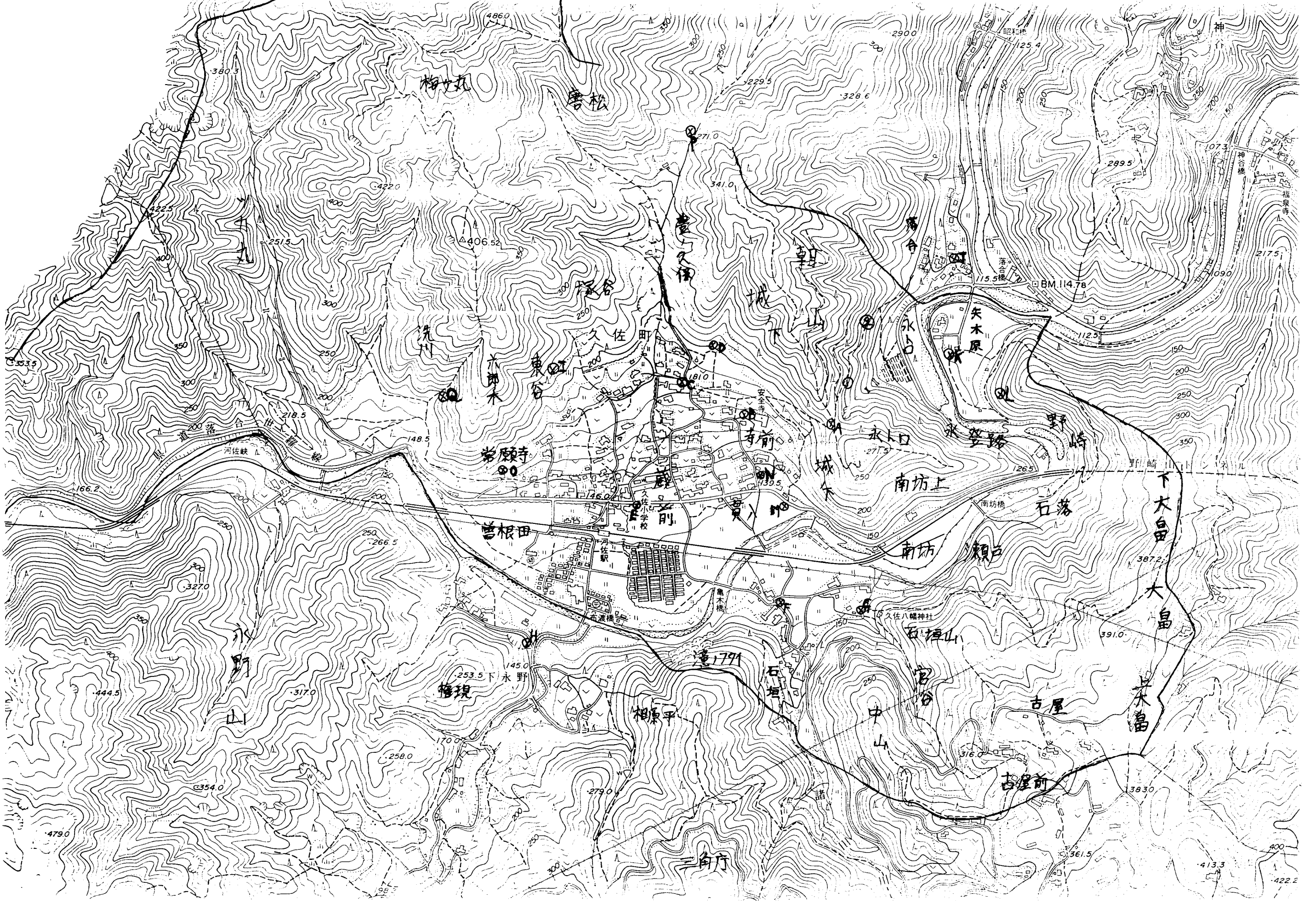
「国立歴史民俗博物館研究報告第9集」

「三原市の石造物」

「田島の地名に就いて」

「地籍図」 桑木公徳





仏師定朝と定朝様

じょうちよう

じょうちよう

熊谷操子

「おーい、いい加減にしるよ。団体がもう三組も出て行ったぞ」と、夫の不機嫌そうな声が入口から聞こえて来た。きつと眉根に相当な皺を寄せていたのだろう。

日本で唯一残存している名匠定朝作の、丈六阿弥陀如来に会いたくて会いたくて、やっとその念願のこなつた、昭和五十五年晩秋のある日の事だった。藤原頼道建立の宇治平等院鳳凰堂の中堂の内部で、陶酔の虜になり果てゝいた私めは、やっとその声で目覚めた感じがした。

八角九重の壮嚴な蓮華座の上で、静かに定印を結んでいる阿弥陀如来の姿は程よく豊満で、肩の線も実に美しい。一昨日の邪心も、昨日の悪事も、みんなお見通しなのに全部包み込んで、「許しましょう」と、言つて居られるような気品のある半眼がとても素晴らしい。円満で仏徳を湛えた典雅な相貌の中から、溢れる慈愛の心を見つけた思いがした。流麗な衣紋は、貞観期の仏像と同じ翻波式でありながら、その彫りはあまり深くなく、割合サラリとしたものが感じられる。まるでゆるやかに流れる水のように、その衣紋にさえ、すがって甘えてみたい思いがする。光背は、二重円相をもつ飛天光で、その中の飛天と、周囲の天井小壁に

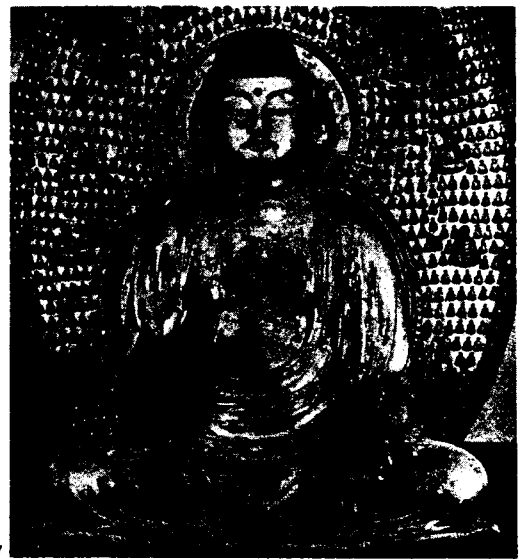


平等院鳳凰堂

ある雲中供養菩薩（定朝の弟子達の作品）とが呼応して、堂内全体で別世界の交響曲を奏でていたようであった。若し音が聞こえたとしたら、それは陶然たる極楽の音と言えるかも知れない。私はふと、今まで見た蓮弁との違いに気付いた。四重の弁は行儀よく下段の弁に従って重な

ているではないか。そしてその湾曲はなだらかで美しく、いつぞや旧家で見つけた古い碗の曲線を連想させるのだった。華麗な大天蓋の縁には、宝相華文の透かし彫りの宝簾が、ビラビラと美しく下がっている。まさに芸術の宝庫である。宝池の向こうから写真家が撮った小格子も念入りに見上げて、ひとりうなずきながら鳳凰堂を後に、やっと夫の声に応じた。

始めて見た定朝作にすっかり魅せられた私は、次の年の秋、京都と奈良の県境にある浄瑠璃寺（九品寺）に参った。浄土信仰が盛んであつた平安中期以降には、九体阿弥陀堂が相当数造られたらしいが、この寺が現存する唯一の遺構と聞いている。一一〇七年の造立で、阿弥陀堂の定法通りに宝池を前にして東面している。本堂前の紅葉と、緑の樹々も池の面にその影を落とし、より華麗な演出を見せている。うつそうとした縁に囲まれた池を隔て、椴皮葺の三重の塔がある。女性的とも言える優しい型のこの塔の内部中央には、薬師如来が安置されていると聞く。これは高倉天皇が京都一条大宮から移築されたものらしいが、その前身は分らない。この天皇のファンである私はふと、小督局との悲恋を思い又、那須の与一が射落した扇まで連想した。まるで住宅のような簡素な本堂内に入って驚いた。九体の阿弥陀如来がずらり並列しているその壮观に、思わず息を呑む思いがした。中尊は周丈六で来迎印、左右の四体はそれぞれ定印を結び半丈六である。素人の私の眼にも、ほんの僅かづつ違う作風は感じられるが、穏やかな面相や、ゆったりした肉づけは、やはり何と言つても定朝作と共通する点が多いと思つた。始めて化粧す



る女性が一応描きそうな眉で、美しい三日月眉である。中尊（定朝様）の光背の文様は単なるブツブツに見えたが、よく見るとその一つ一つが小千仏であり、その中にいわゆる十体仏が浮き彫りになっているのである。うなる様なその最高の芸術に、機械力の乏しいこの時代に、よくもこんな手の込んだ物が出来たものだ、惜しめない讃辞を心の中で送つた。今も眼を閉じると、九体阿弥陀の姿が鮮かに浮かんで来る。浄瑠璃寺から岩船寺へと歩く山道には、きょやかな無人店がそこかしこにあつて、野菜や果物、漬物等がぶら下げてある。近在の農家の作品で、何れも百円（当時）の値をつけ「竹筒に代金お入れ下さい」と、書いてある。参詣の行き還りの人々が、品定めしながら三三五五買つてゆく。のどかなどかな風景だった。

京都日野にある法界寺は、土地の人々には乳葉師の名で知られている。開創の時期に就いては二つの説があるが、永承六年（一〇五二）日野資業が菩提寺として創立したらしい。広々とした礼拝の空間には静かな雰囲気の流れ、まるで肩の荷を下ろした時のような、ホッとしたものを感じた。さすが鳳凰堂の阿弥陀如来のそっくりさんと言われるだけあって、丈六のお姿全体が実によく似ている。台座も殆んど同じ、蓮弁のあの珍しい重なりも同じである。強いて言えば、二重円相の文様が少し違ってはいたが、それは、それを彫る仏師の自分なりの持味をどこかで表現しなかったであろうと思う。天井の小壁の供養菩薩と共に、楽器や蓮華等が飛び交うような壁画が私の眼を奪う。勾欄の反り具合や、天女壁画の色彩の褪せ具合等は、私達の眼にはかえって重厚に映り、歴史の重

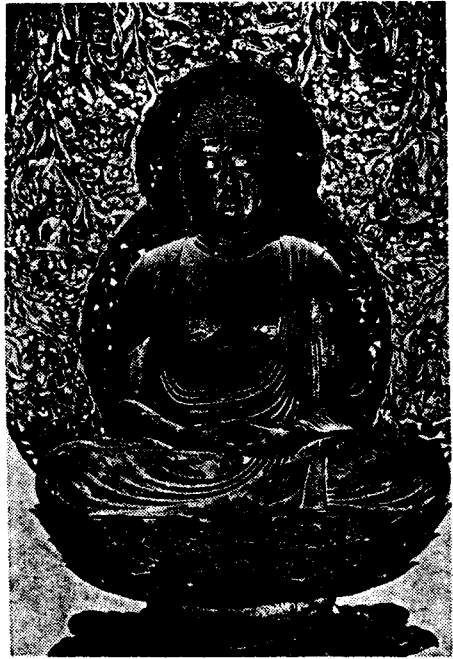


みがひしひしと感じられる。静かな鄙辺にある千年の古刹に佇んでいると、古都を訪れる事の出来た喜びをかみしめる事が出来る。

双ヶ丘と聞けば、あの兼好法師、法然草を先ず想い起すのである。

ある日その双ヶ丘にある法金剛院を訪れた。ここはもと清原夏野（小野篁等と共に令義解を著した人）の山荘であったが、一一二九年（白河法皇の崩じた年）鳥羽上皇の中宮であった待賢門院が（当時二十九才）再建した。その後十一年をかけて、西御堂、南御堂、北斗堂、三重塔、大庭園、女院御所等を作る。そしてこれが法金剛院御所となるのである。

西行も度々ここを訪れている。現在のこの本堂は、焼け落ちた西御堂の上に再建されたものと聞く。だから現在のこの阿弥陀如来は、当時西御堂にあったものだろうと、角田文衛博士は書いている。周丈六の阿弥陀如来は、私が今まで見た定朝様より、ほんの少し面長の感じで沈静という言葉がびったり。八角七重の蓮華座であるが、その蓮弁の一枚一枚を一応粟粒を並べたような魚子地に仕上げ、更にその上に宝相華文を美しく丁寧に彫っている。なかなか優雅で豪華そのもの。その重なりは定朝作と違い互い違いに重なっている。飛天光背に刻まれた七体の菩薩は、それぞれ楽器を持っていてその巧みな透かし彫りは、又一味違った美しさを見せている。この像は仏師院覚の作品で院覚の持味を、その蓮弁に十二分に発揮出来たものと言えるのではなからうか。城待門院が年若い崇徳天皇を案じたものか、外の薄幸な二人の皇子の事を祈られたものか、それ共美福門院との確執に悩まれての事か、白河法皇の回向を願われたものか、この阿弥陀如来への願いは知るすべもなく、ただ想像を許され



るのみである。当時、西御堂にはこの如来、三重塔には同じ院覚作の大日如来四体、南御堂には九体の阿弥陀如来、北斗堂には賢円作の一字金輪像、これら十五体にも及ぶ仏像群の中には、やがて渦巻く潮流と化す「保元の乱」の導火線を、じつと見つめていた仏像があったかも知れないと私は思う。ともあれ、比類のない落ち着いた装飾美に酔うことの出来たしあわせな日であった。

鳥羽上皇終焉の地として知られる京都伏見区竹田にある安楽寿院を、地図を頼りにやっと探し当てた。鳥羽上皇が、鳥羽殿の東殿の一部に創建したのがこの寺の始まりであるから、ちょうど待賢門院が、法金剛院の南御堂（九体阿弥陀堂）の造営を始めたのと同期である。市内とは思えない程、たまらない静けさを漂わしている環境に、懐旧の思いをそえられるのであった。平安時代の石造三如来像（江戸時代の発掘）や、宝

篋印塔のある境内地に佇っていると、温和な御性格の鳥羽上皇の院政を執るお姿が脳裡を掠めるのである。住職は留守であったが、前日に電話をしておいたので、娘さんが阿弥陀堂の鍵を開け、更に厨子をうやうやしく開けると、「どうぞゆっくり拝観して下さい」と、引き揚げてくれた。厨子の上部には赤い錦の幕が張っておりその上に大きくて立派な華鬘が下がっている。よく見るとその少し上に、同じ大きさ位の菊の御紋がついている。瞬間異様な感じがしたが、磯長の叡福寺（聖徳太子の墓所）でもこれに似た感動を覚えたことをふと思いついた。仏師賢円作のこの阿弥陀如来を見て先ず感じたのは、頬の辺りが今迄見た定朝様より少しスリムである事、それに眼は殆んど開いていないように見受けた。

何よりも変っているのは、胸に巾がある事だった。どんな意味があつて上皇が仏師に注文されたのだろう。正面の蓮弁五枚にだけは、宝相華文などを丁寧に彫り、装飾性豊かに表現している。二重円相光が素文光背であるのも、この時代としては少ないのではないかと思う。阿弥陀の造仏を上皇から命じられた仏師賢円は、平等院の定朝作阿弥陀如来を見学に出かけている。そして賢円の仏所（工房）へは、鳥羽上皇が度々足を運ばれ、製作中の仏像について、かなり厳して批評を加えていられる。胸の厚み、首の角度、衣紋の細部の削り等も、定朝作を引き合いに出して修正をさせていられたと聞く。これらの注文を忠実に守って彫る仏師賢円の酷しい眼まで、私は識らず識らず想像していた。濃厚な鳥羽上皇の鋭い批評眼によるこの阿弥陀如来には、どのような願いがこめられていたのだろうか。堂の右上の壁には、鳥羽上皇、美福門院、八条女院の



画像がかかってあった。軸があつたのを複製したものだという。それにしても、これで観る限り、美福門院はあまり美女ではなかつたなあと思つた。細部までゆつくり拝観させてもらい、悪いと知りつゝ存分にカメラに納めさせてもらった。境内地には、鳥羽上皇の御陵と、近衛天皇の多宝塔御陵があつた。観光の喧嘩から逃がれ、閑静な寺でひとときを過ごせたやすらぎの一日であつた。

その日の岩手県は、底抜けるようなどしや降りであつた。金色堂と、毛越寺と、達谷の窟を回つて欲しいと言つと、タクシーは一万二千円を要求した。値切りの天才を自負している私なのに、藤原三代が、ミイラで眠るその謎とロマンに光り輝く中尊寺金色堂が目前にあるという喜び

に、見事上がり切つてしまつて、値切ることなど念頭にはなかつた。都では白河、鳥羽、後白河三代が院政の世紀を形作っている時、ここでは藤原三代が平泉の歴史を作つていたのだ。たゞ支配者の豪奢を実現しただけでなく、都の貴族文化の形より以上に超える心を、奥州すべての金で表現したかつての都であろう。清衡、基衡、秀衡の三体の須弥壇からは、たゞたゞもう眼を奪われるばかりであつた。そしてその壇下には金箔を貼つた木棺が納まっていると想像するだけに身震いするような感動を覚えるのだつた。拝観の位置は仏像より随分離してあるので、細部にわたつて観察する事は出来ないが、まばゆいばかりの三尊像が地藏菩薩六体を従えたその鷹揚たる姿は豪華というより外に言葉は見つからない。平安時代の六体一具地藏菩薩が現存するのは、この金色堂のみと聞く。下半身を包むそれぞれの衣紋から、荘厳な仏教音楽のハーモニーを聴く思いがした。中央壇の阿弥陀三尊と地藏六体は同じ仏師群の作品か、どれも眼尻は少し上がり気味で切れ長のとても素晴らしい眼だつた。宝相華唐草文を彫り出した内陣、入念な漆塗りに螺鈿を存分に散りばめ、菩薩像の蒔絵を交互に組み合わせた巻柱には、唸りため息を禁じ得なかつた。金色をこれ迄に残した保存の技術も賞讃すべきだが、これを造つた仏師の入念さにも思いを馳せたい。平泉から指名招聘された都の仏師としては名譽でもあるし、大いなる喜びに胸震わせたであろう。だからこそ仏師の誇りを余す所なく表現したのだと思う。ともあれ金色の芸術に圧倒され、魂が宙に浮いた平泉の旅であつた。

京都の万寿寺にも定朝様の優作がある事を知り、夫を促して出かけた。

地図通りに東福寺駅前をうろろしたが見つからない。東福寺の塔頭である退耕庵（石田三成が宇喜多秀家らと関ヶ原合戦の謀議を計った所）の若い僧に聞くと「万寿禅寺というのは、その九条通りの向こう側にありますが、定朝様の仏像があるなんて話聞いた事もないし、観光目的の寺ではありませんよ」「それでも行かれますか」を、何度も何度も繰り返しながら、私達の姿を上から下まで、ジロジロと見る。やっと万寿禅寺を見つけた。入口の碑の側面には日韓友好云々……と、なにやらゴチャゴチャ彫ってあった。なる程立派な仏像のある気配もなし、荒寺の雰囲気充分でひと気がない。本堂がただ一つ、それも障子が締め切っている。恐る恐る裏へ回ってみると、私の身長以上もある巨石が二つ重なっている。何の事はない重ね餅のお化けのよう。ひよっとすると折りの対象かも……と、掌を合わせて早々に退散した。東福寺へ参って泉湧寺迄の裏道を歩いていた時、小さなパン屋を見つけたので、その店の人に万寿寺のことを聞いてみた。この人もそんな有名な仏像の話は聞いた事もないと言う。

私の幼い頃、母がよく唄っていた京都のわらべ唄をふと思いだした。それは南北する烏丸通りを、丸太町通りから南へ、東西に横切る通りの



名を唄ったものである。「丸竹夷ニ押御池姉三六角蛸錦四綾仏高松方五条」と、唄いながら京都市内の地図を拡げてみた。万寿寺通りはあるが、寺の印はどこにも見つからない。疑問を抱いたまゝのある日、林屋辰三郎著の「京都」に目を落としていた。万寿寺の阿弥陀如来が、京都国立博物館の玄関を飾っていると書いてある。思わず「あった」と叫んだ。でも、それではかつて五山のひとと謳われた万寿寺は、はどこにあるのだろう。思い切って先日行った万寿禅寺に電話をしてみた。若そうな声の丁寧な住職の話では、「万寿寺通りに昔はあったそうですが衰退の途をたどり、随分前にここ三聖寺に合併したそうなんです。それで現在は東福寺の塔頭となっております。阿弥陀さんは博物館から東福寺の宝物館に移っております」との事だった。「折角東福寺へ回ったのに」と、馬痴りながらすぐ又東福寺へ電話してみると、「春秋の法会の時にだけ拝観して頂きます」という返事。度々の身売りの憂き目をみた阿弥陀如来が何だか哀れで、これを造った仏師は彼岸できっとため息をついているだろうと思った。こうなると女の意地で、当時の大作と賞讃された阿弥陀さんには、是非是非会いに行かねばと、十一月第二日曜へ手ぐすね引いている。

県内でありながら、なかなかその機を得なかつた牛田の不動院へ、やっとチャンスを見つけて出かける事が出来た。前日電話を入れておいたので早速金堂を開けて貰った。薬師如来の側に、「行基の真作、薬師如来」と、書いた大きい木札が立て、あったが、これは七、八世紀の作では決してない。「寺そのものは行基開基ですが、如来さんは平安後期の

ものでございます」と、任職も言う。「矢張り定朝様であった」と、喜びが私の中を駆けめぐる。光背や台座等の金色の輝きは、割合新しい時代のものと見た。兵火に会って光背も台座も、勿論日光月光菩薩も外へ運び出す事が出来ず、辛うじて本尊のみ運び出したのだろうと任職は言った。その時はもうこの如来も煙に巻かれていたか、又は炎がそこ迄近づいていたのではないかと勝手に想像する。目鼻立ちがあまり鮮明でないから。白毫と衣の一部にはんの少し金色を残している如来は、まさしく藤原彫刻だと思った。二脇侍のいない空席を十二神将がちゃんと埋めていた。

昭和六十三年三月、末森さんの例会の資料をバスの中で読んでいた。さまざまの名を連ねた善根寺の仏像、その数の夥しいのにたゞたゞびくりした。その中に私の胸を衝いたのは重文の木像薬師如来だった。まさかこの日の例会で定朝様の如来さんに会えるとは思っても見なかった。宝蔵庫は村の人達の浄財で建てられたと言う事で大変有難いとは思ったけれど、これほどの素晴らしい平安朝の仏像群を蔵めるのなら、欲を言えばほんの少し広く、ほんの少し高く建て、欲しかったなあと、門外漢である私が勝手な愚痴をこぼしてみるのだった。問題の薬師如来の輪光背は後の時代に付けられたものとしても、それが殆んど天井にひっついていて、如来を押さえつけているようで本当に惜しい。でも定朝様特有の典雅な姿が王朝芸術の一端として、手の届く所にこうして残して置いてもらってるのは大変嬉しい。重文に指定されても、それがいざ修復となるとなかなかその費用の捻出がむづかしいらしい。例に洩れずこ

の二三の台座にも、いかにも素人細工のその場凌ぎの修繕が施してあって寂しい思いがした。稲村山城主であった田坂氏の祈願所という善根寺って、きつと大きい立派な寺だったのだろう。呪わしい戦火や、阿鼻叫喚の洪水も、今は黙して語らぬ仏像群に、私も黙って静かに目礼するのみで急いでバスの客となった。

湖東三山の真中の寺として有名な金剛輪寺に参る事が出来た。聖武天皇の勅願で、行基が七四一年に開山した千古の名刹は、観光客で大変賑わっていた。夥しいコピーの水子地藏を左右に見て、「寺はどうしてこゝ高い所へ建てたがるのだろう」と、ぼやきながら石段をフーフーと登っていく。薄暗い内陣の高い天井や太い柱は、蜜教修法の護摩で真黒に煤けている。沢山の仏像の中で、来迎印を結ぶ半丈六の阿弥陀如来は、浄土信仰が普く浸透した平安時代末期の作品らしく、その螺髪も美しく、



落ち着いたそのお顔はとりわけ端正だった。両足の間に垂れた衣紋の重なりが、まるで今様のフリル風に見えて興味をそそった。光背は板光背に彩色を施したものであった。塗り替えてもいない、補正もしていない像には、そこはかとな魅力が感じられて、いつまでもいつまでも佇んでいた気がする。体内の墨書銘から、大仏師近江国の講師経円が造像して四年の歳月を費したことが明らかになったそうである。微かな曲線を見せた額の螺髪と、フリル風の衣文とに、仏師経円の個性をちらつかせたのではないかと私は思う。

滋賀県栗東町荒張部落の外れに、金胎寺という静かな里寺がある。

苔の美しいならかな石段を登ると、もうそこは本堂で、その前には小さな花々が控え目に咲いている。天智天皇の勅願によって大和国（奈良県）高市郡に建立された大久保寺がその前身で、平安時代の半ばに、僧蓮秀が衰退した寺を再興した。寛文三年（一六六三）に現在地に移って金胎寺になったそうである。半丈六のこの阿弥陀如来の特長は裳懸座であること、その上三尊一具で残っていること、そしてこの三尊を守る持国天、増長天も逞しい姿で残されている。こんな例は大変珍しい。住職の話では、当時は勿論四天王揃っていたと思うが、兵火若しくは、度々の移転で二体が無くなったのだろうということだった。阿弥陀如来の穏やかなその面相は定朝様の典型的な作例で、裳の裾の下側は華足、下敷茄子までよく見えているのだから、裳懸座と雖も、下から六重までは元来の台座同様で、唐風の美事な意匠を心ゆくまで表現しているから豪華で実に素晴らしい。如来も二脇侍も殆んど金色が残っていない。強いて言

えば白毫と目尻にはんのちよっぴり残っている程度で、漆黑という言葉がぴったり。二脇侍の腰のひねりの線も、可愛いく美しく表現されていて、ふと薬師寺の二菩薩の姿も浮かんで来た。じつと観ていると歳月の重みが快く感じられ、堂内に落ち着いた雰囲気をも少し出していた。仏像に比較して、唐草文様の中に小仏十一体が、それぞれの印相で浮彫りにされている飛天光背の金色が割合鮮やかなので住職に聞いてみた。

話によると、文化財として指定を受けた昭和三年四月に光背の一部を修繕し、その時に塗り替えたらしいこと、同時に体内から墨書銘が発見されたという事であった。早速無理を言って胆内記の写しを見せてもらった。それには四十名ほどの奉加助成の名が連ねてあった。約半分は僧であり、その中に秀の字のつく名が三、四名あったような気がした。それは蓮秀の縁につながる僧達ではなかったかと想像してみる。あとの半分には藤原、清原、秦、物部等の姓が見えた。それによると永治二年（一一四二）に造立された事が分かった。残念ながら仏師の名は見当たらない。製作年代や奉加名まで明らかにしているのに、どうして仏師の名を堂々と書き入れなかったのかと疑問に思う。この寺の稲岡住職は、昭和二十七年大正大学卒業、同二十八年に、小さめの口少しゆっくらした頬のこの阿弥陀さんに惚れて晋山したと言っておられた。勿論初対面であるのに、じっくりお話を聞いているうちにとても親しみが感じられ、以前からお会いしていたような気さえする。折を見て是非またこの静かな寺を訪れたいと思っている。

塩飽例会の船の中で神谷先生から「今から行く島にも定朝様があるん

ですよ」と聞かされて、思いもかけぬ話に瞬間胸の踊る思いがした。

台座の説明を延々と聞かせる任職に「もうその辺でよろしいから早く観せて下さい」と、叫びたい衝動をじつと押さえて耐えていた。きつと難しい顔をしていたのだろうと思う。宝蔵庫に足を踏み入れるなり、「あっ惜しい」と思った。それは一目で、後の時代にひつつけた輪光背を見たから。しかもそれが後の板壁にベタッと張りついているようだった。

宝相華文の中で、泳ぐように舞う飛天の立派な光背を想像していた私は、ちよびり気落ちした。でも嬉しいのは仏像はさすが定朝様、当時の貴族達を魅了してやまなかつた典雅でたぐいぬ調和の美を、こんな小島に見つける事が出来たのだから。健康な人も、病める人も、みんな温く包み込んでしまうような薬師如来のほのかな抑揚に、「お会い出来ましたね」と、声したくなるひとゝきであった。

京都の万寿寺通りの一つ北側の通りが松原通りである。建仁寺の塔頭である珍皇寺はこの通りにあつて、八月七日から十日までの四日間、六道参りの人達で大変な賑わいを見せると聞いている。切子燈籠や檜を売る店、その他の屋台店の間を、縫うようにして通る鐘や太鼓の物凄い群が、精霊の迎い鐘を頼りに松原坂をゆっくり上つてゆく、その有様を見ているだけでも楽しいさうである。門を入ると右側に小野篁と閻魔さんを安置した堂があつた。小格子の間から覗いてみると、篁は長身でなかなかハンサム。閻魔様はいつどこで見ても同じあの恐しい顔。境内は肩張つたようなたゞずまいは全然なく、いかにも庶民的な寺であつた。この寺は孟蘭盆に突如として人が集まるといふ故か、私の行った日は住

職も、寺の監理人も居らず、定朝様の阿弥陀如来も、篁が冥府との往還に出入りしたという伝説の井戸も、残念ながら観ることは出来なかつた。京都の夏は極めて暑い。人一倍暑がり屋の私は、再び珍皇寺を訪れる事はないかも知れないが、老婆がのんびりと孫の守りをしていて、あの魂の故郷みたいな寺に、定朝様式を忠実に踏襲した作品のある事を信じて、その姿を勝手に造り上げて想像することにした。本堂脇のユニークな鐘樓の鐘を撞いて、鳥辺野の煙と化した人達の回向の真似事でも出来たのだからと、負け惜しみを暖めながら空振りに終わった珍皇寺を後にした。

京都山科にある小野随心院の境内地の四季は、おりおりの樹々や花々が美しい。先日訪れたのは、さつきがそれぞれの美しさを競っている時だった。創建は空海の弟子仁海が、一条天皇（九九一）からこの地を賜つた時であつて、祈雨の効験あらたか知られた寺である。その後堀河天皇より門跡の宣旨を賜りそれ以来随心院門跡となつたとか。小野小町の屋敷跡、化粧井戸、深草少将百夜通いの道、庭園、玄関、総門、庫裡、書院、能の間等へ大勢の観光客がひしめいている時、私達夫婦はその狂騒から逃れ、僅かな隙間にある静かな刻を見つけて本堂に座す事が出来た。七体のそれぞれの仏像は、沢山の時代を経てきた証に漆黒を見せている。随分離れた場所にロープが張つてある。それより少しでも上半身を乗り出そうものなら、びっくりするような音でベルが鳴るのであまり細部まで観る事が出来ない。小野小町が自分へのラブレターを貼つて造つたという文張地蔵の横に、私の目指す阿弥陀如来があつた。輪相光背

だけのつましい像であったが、平安後期の作品とあって矢張りこれも金色は全然見当らない。深い思索を経た人に見られるようなもの静かな面相と、その半眼にはなにか神秘性を満ているような気がしてならなかった。

三滝寺へ阿弥陀如来を拜観したい旨の電話を入れた。「十一月の法会の時だけで、平常はお断りしています」との返事。置いた受話器の上には私は思わず「ケチンボ」と、浴びせかけた。県内だからいつでも行けると思い込んでいた自分の迂闊さと、折角の楽しみに、平手打ちを食わされた腹立ちが交錯した、まるで駄々っ子のような咄嗟の自分の言葉に、ひとり苦笑した。

福島県の白水阿弥陀堂。大分県の富貴寺。真木大堂、宇佐大楽寺等々、直接中央の影響を受けたと思われるこれらの寺々は勿論のこと、京都の東福寺（万寿寺阿弥陀）、三千院、広島県の三滝寺など、まだまだ私の宿題は残っているが持ち時間の許す限り、ちぎれちぎれの旅路を重ねてゆきたいと思っている。

如来が如来であるための相は、三十二相八十種好もあるというから、有名でない寺にある仏像にも目を向け、寺の来し方のときどきの財政状況や、災害や、又修復さえも大っぴらに許されなかった時代の背景なども頭に置きながら、その作品を正しく観る観察眼を大いに養わねばならないと思っている。

政治や仏教や文化は時代と共に変化してゆくものだから、造物界に於ける様式も大きく変遷を見せるのは当然と言えば当然である。でも定期様

にぞっこん参ってしまったっている素人の私の眼には、飛鳥期の仏像は面長過ぎ、首は茶筒をひつつけた様に映る。天平期のものは形式にこだわり過ぎていように見え、延暦、弘仁期の仏像は概して胸の肉は盛り過ぎ目は大きく唇は厚過ぎる感がある。天長、承和期の眉や唇の線は稍自然ではないかしらと思ひ、足先や腕等に神経を使い過ぎてはいないかどうも気になる。貞観期の堂々たる体軀からは、かえっていかつさを覚え、なにかしら威圧されそうな気がする。その上翻波式衣紋の深さ、くどさが目立つようである。とは言っても、これ等前期の仏像にも、宗教のもつ美術的表現の意味は充分彫り込まれてあり、仏である事にいささかも変りないのだから、その前に佇った時、極く自然に頭の下がる思いはいずれも同じである。

定朝は十一世紀に活躍した仏師で、仏師としては始めて僧綱の一つである法橋という位に任ぜられている。三会（御齋会、景勝会、維摩会）の講師を無事務めた学識の高い僧に与えられる位で、法印、法眼、法橋の三段階に分かれる。定朝の父康尚も功績はあったが遂に講師止まりで終わったとか。造仏だけでなく、仏教なる学問も大いに学んで身につけたものと思う。寺の中にある造仏所から、寺を離れて徒弟制度の工房（仏所）を構える事が出来るようになったのは、仏師定朝の人間と腕が高く評価され認められたからに外ならない。当時の貴族の日記によると、定朝の指揮の下に大仏師二十名が、それぞれ五名づつの弟子を従え、造仏を始めてから五十五日めに二十七体の仏像を納めた。と書いてあったというから、恐らく分業という形で能率を上げ、技術的にも随分合理化

されていたものと思う。大集団を誇る工房内の仕事ぶりには、すさまじいばかりの気魄が満ち満ちていた事だろう。なに人をも包み込まずにはおれない、そこはかとなし優しい表情、静かに流れる衣紋、流麗なる全体の姿、それら美への追究と、浄土への憧れが、より強くより大きく、定朝の腕に響いていたのだろう。全身で打ち込む槌の音には魂の響が漲り、飛び散る汗はきつとキラキラ光っていたと思う。全霊を傾けて刻み込むのみに、研ぎすまされた神経の音が聞こえたのではないだろうか。仕事の内容によつては、しわぶきも許されぬ厳しい刻もあつたかも知れない。大仏師を含む弟子達は、造仏に全神経を傾注する真摯な師匠の姿に、吸い込まれるような鍛練の有意義な日々を過ごしていただろう。

識る由もない当時の工房内を、私は好きないように想像展開し、日本彫刻史上の名工と謳われた定朝の、その人柄まで素晴しく描き上げ、識らず識らず自分勝手な方向へ逞しく育てゝいたのである。

万寿四年（一〇二七）藤原道長が、無量寿院で定朝作の阿弥陀如来の手に結ばれた糸の端を握りながら、六十二才の命を閉じた話はあまりにも有名である。円満具足の相好と柔和な容姿は、「尊容満月の如し」と、謳われて、穏やかで洗練されたその作品は、当時の宮廷や貴族達の心を、余すところなく捉えて離さなかつたに違いない。それ以来造仏を一手に引き受けることになってゆくのである。時代と共に造仏材料も変つてゆき、金銅像から乾漆像、塑像、木像（一木造り、寄木造り）となるが、定朝はこの寄木造りの完成者とも伝えられている。その作品があまねく愛されたのは、勿論外面的のことが一番であるが、胎内を奇麗に内割り

していて、材は割合薄く造つてあるから、重量の面でも従来の仏像より随分改良され、持ち運びに便利だったことも含まれていたのではないだろうか。それに優秀な仏師を大勢育て、抱えていたらしいし、抜きん出た統率力による分業によつて、短時間で注文に応じた事も、大きい魅力であつたかも知れない。

この定朝仏の様式は、以後広く造仏界を支配する如来像の規範となつてゆくのである。そして貴族達の注文に応じた仏師達は、競つて定朝様を見習つたという。仏師院朝は、参考にするため、定朝作の寸法を一日がかりで約七十ヶ所にわたり詳しく採寸したと伝えられている。

定朝は天喜五年（一〇五七）に亡くなるが、その後八十年を経過した後も依然として仏像の基準になっていたというから、仏師達が如何に模倣しようとする努力したかが伺える。寺から離れて仏所を構えた定朝を祖として、以後その弟子達の代によつて、それぞれ独立した仏所に分かれることになり、ここでは集団による分業で大量生産的な態勢がとられていたと思う。所在地によつて七条仏所（慶派）。七条大宮仏所（院派）。

三条仏所（円派）などと呼ばれ、定朝の弟子で三条仏所を開いた長勢は、広隆寺の十二神将を残しており、円勢は法金剛院の阿弥陀如来五体と不動王一体を造っている。賢円は安楽寿院の阿弥陀如来を残し、法金剛院の一字金輪像一体と、法勝寺の阿弥陀如来九体を造っている。明円は大覚寺の五大明王像を残している。七条大宮仏所の院覚は法金剛院の大日如来一体を造り、阿弥陀如来一体を残している。

鎌倉時代に入り、定朝の直系である康慶、運慶等が現れ、新しく創り出

婆沙羅の時代

堤 勝 義

(一)

此の前身書店にいった時に、婆沙羅の題名のついた小説を目にすることがあった。そこで、何故、今、婆沙羅なのかと不審に思っていたのであるが、あーそうか、来年のNHKの大河ドラマが『太平記』だからだと思いついた。そのせいか、書店によっては『太平記』（吉川英治の私本太平記）のコーナーを設けている所もあった。

今、書店にある婆沙羅の本は、童門冬二『ばさらの群れ』（日本経済新聞社）、山田風太郎『婆沙羅』（講談社）である。

日本経済新聞（六月二十四日（日））の新聞紹介の欄で、編集委員の浦田憲治氏が、歴史小説南北朝に光一「ばさら大名」の活力を描くとして書評を書いていた。

とりあげていたものは、網野善彦『異形の王権』（平凡社）、山田風太郎『婆沙羅』（講談社）、童門冬二『ばさらの群れ』（日本経済新聞社）、童門冬二氏（ペンネーム）は元東京都庁の政策室長で、美濃部都政を支えた一人で、のち作家に転進した異色の人である。松崎洋二「足

利尊氏」（新人物往来社）である。

網野善彦の『異形の王権』では後醍醐天皇を、山田風太郎や童門冬二の小説では、ばさら大名の代表的人物、佐々木道普や高師直を中心にして述べていた。

最近送ってきた『吉川弘文館の新刊』（新刊案内）三十四号（一九九〇・七）では、佐藤和彦氏（東京学芸大学教授）が巻頭の歴史随想で、「ばさらの周辺」と題して書いている。

佐藤氏は、吉川英治が『私本太平記』を毎日新聞に連載しはじめたのは一九五八年一月十八日のことであり、その時に氏は大学三年生で、早稲田大学の図書館の新聞コーナーでこれを読み、ばさら大名の用語をはじめて知ったという。

氏は、ばさら大名の代表者、土岐頼遠、高師直、佐々木道普について簡単に書いているが、しめくりとして、「ばさらは風流をつくすことと、寄合へ参集することは反権力運動の濫觴であった。内乱期社会の本質を解明する鍵の一つは、ばさらとその周辺に隠されているのではあるまいか。」と書いている。

(二)

ばさらの原語は、サンスクリット語のヴァジャラである。新村出編の『広辞苑』（第二版）のばさら（婆沙羅・時勢粧・跋折羅）の項目では「室町時代の流行語で①遠慮なく振舞うこと。②はでにみえを張ること。③しどけないこと。みだれること。狼籍。④はば、またはゆとりあること」とも書いている。

また、最近出版された『岩波仏教辞典』（岩波書店）には伐折羅と書き、(3)の項で「新薬師寺像の焰髪が天に逆立ち、かみつくように口を大きく開いた形相などに表徴されるように、伐折羅大将の降魔の忿怒相が極めて異相であることから、△ばさら▽は奔放で、きわ立って異様なさまを意味する語となった。

△婆娑羅▽△婆沙羅▽△婆佐羅▽などを当て、鎌倉中期ごろから用いられた語のようで、次第に、世の常道にとらわれず、奇をてらい、華美を尽して異風にふるまうこと、またそうした形姿や風潮をさすようになった」とある。

前掲の佐藤氏は、土岐頼遠について「ナニ院ト云フカ、犬ト云フカ、犬ナラバ射テ落サン」と喚きつつ光厳上皇の車に矢を射かけ（『太平記』二三）。

高師直は「王ナクテ叶フマジキ道理アラバ、木ヲ以テ造ルカ、金ヲ以テ鑄ルカシテ」生きている院・国王をば配流してしまえと放言してはばからなかった（『太平記』二六）。

佐々木道善（高氏）は「バサラニ風流ヲツクシテ」小鷹狩りをおこなった帰途、紅葉をめぐる閑着から妙法院に放火し、山内の激しい怒りをかき、また「身ニハ錦纏ヲマトヒ食ニハ八珍ヲ尽セリ」「衆ヲ結デ茶ノ会ヲ始メ日々ニ寄合」（『太平記』三三）等の文を『太平記』から引用している。

幕府の法例である『建武式目』第一条には「近日婆佐羅と号けて専ら過差を好む。綾羅錦纏、精好の銀剣、風流の服飾、目を驚かさざるはなく、頗る物狂ひといふべきか」とばさらについて述べている。

南北朝の時代には、ばさら大名の高師直や佐々木道善、また悪党に代表される楠正成や花押に特色がある名和長年等の生きた時代であった。

高師直については今迄教科書で足利尊氏絵像とされていた馬に乗って、ひげづらで、長刀をかついだ人物が、足利尊氏でなく、高師直であったことがわかつている（京都国立博物館、下坂守氏）。

高師直は、足利尊氏の執事として知られているが、もっと深くその人物像については考えてみるべきであろう。

(三)

此の時代の備後地方でよく知られている人物は、ばさら大名ではないが、現在の芦品郡新市町を拠点とした桜山（宮）慈俊である。

『福山志料』や『太平記』の資料を引用してみたい。

『福山志料』巻之六、人物所載中の桜山の項目を要約してみると「長谷部昌益聞書というものの中に、桜山はもと宮氏で、地域の号によって

太平記には桜山入道と記している。実名の慈俊は陰徳記に見えるという。さらに続けて「太平記には、吉備津宮に、桜山慈俊が火をつけて、自刃したようになってるが、六郡志には、館に火をつけて自刃したのが、風が強かったために、吉備津宮に類焼したのであって、太平記の作者は遠くなので、風聞をもとにして書いたのであろうと書いてる。」

『太平記』（日本古典文学大系34・岩波書店）の桜山自害事の項を引用すると「去程に桜山四郎入道は、備後国半国ばかり打ちしたがえて、備中に進入し、安芸へも進入しようとしていた時に、笠置城が落ち、楠正成も自害をしたという風聞を聞いた時に、皆戦線を離脱して、残ったのは一族・若党二十余人ばかりになった。そこで、もはやこれまでと、当国一宮へ詣り、八才になる子と、二十七になる女房とを刺殺して、社壇に火をかけて、腹を切った。一族・若党二十三人も皆桜山の後を追った」とあり、何故桜山は社壇に火をかけたのかと続ける。

「此入道当社二首ヲ傾テ、年久カリケルガ、社頭ノ餘リニ破損シタル事ヲ歎テ、造営シ奉ラント云大願ヲ発シケルガ、事大営ナレバ、志ノミ有テカナシ。今度ノ謀叛ニ興カシケルモ、専此大願ヲ遂ンガ為ナリケリ。サレドモ神非礼ヲ享給ハザリケルニヤ、所願空シテ打死セントシケルガ、我等此社ヲ焼払タラバ、公家武家共ニ止ム事ヲ不得シテ如何様造営ノ沙汰可有。其身ハ從ヒ奈落ノ底ニ墮在ストモ、此願ヲダニ成就シナバ悲ムベキニ非ズト、勇猛ノ心ヲ発テ、社頭ニテハ焼死ニケル也。情垂迹和光ノ悲願ヲ思ヘバ、順逆ノニ縁、何レモ濟度利生ノ方便ナレバ、今生ノ逆罪ヲ翻シテ当来ノ値遇トヤ成ラント、是モタノミハ不淺ゾ覺ヘケル。」

先ほども書いたように「備陽六郡志」は「太平記」の作者は、遠くなので、風聞をもとにして書いているのであって、吉備津宮（備後一宮）が破損していて、自分ではいかんともしがたいので火をかければ、新造ができるであろうと桜山が考えて火をつけたのではないと、これを否定しているのである。「備陽六郡志」のほうが正しいと考えられる。

備南の珍石Ⅱ

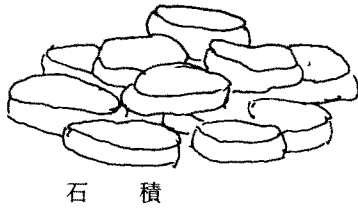
七 森 義 人

1、初めに

珍石と云う名称にしたが、此珍石とは、磐座を中心とする古代の石信仰と、中近世の石神信仰を合わせもったものと解釈していただきたい。

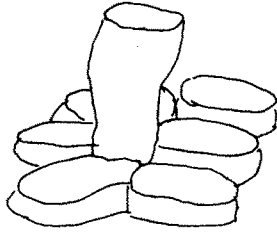
A 磐座とは 図Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ参照

古代の石信仰の一つであり、石は硬く、永久不変である事から信仰が生じた。縄文時代の石積、配石、立石等が源流とされ、それが弥生と続き、古墳時代に、人を埋葬しておらず、祭祀遺物が石に伴われているも



石 積

図Ⅰ



配 石

図Ⅱ



立 石

図Ⅲ

のを磐座と云っている。(しかし、此では、遺物を伴わないが、磐座と思われるものを取り上げている。)

B 古代の信仰

前記で磐座について述べたので、此では他の信仰から磐座へと、変わっていったものについて記してみる。

A、山の信仰 図Ⅳ、Ⅴ参照

神奈備型と浅間型の二種があり、浅間型とは富士山に代表される高山で人が近づけない事から、神の住む世界と考えてその山を信仰したもので、此付近では四国の石鎚山が著名である。

神奈備型とは、奈良県の三輪山が代表されるが、集落に接した小山や独立丘で円形の美しい形をしており、空に近く、神が降臨する場所と考えて、此を聖地化する。此付近では神辺、甘南備等、神奈備と云う名称に似た地名や、三諸、御室等、奈良県の三輪山に似た地名が神奈備山で有る事が多いので、神辺町の黄葉山や府中市の三諸山がそれと思われる。又、神奈備、浅間型の山を望む場所を神聖化し、磐座等を築く。

最初は、山そのものを信仰し、麓から遥拝していたが、日本に仏教が

入り、神社の成立が始まり、拜殿が出来て、次に神の住む場所として、本殿が出来る。それと共に山林仏教の影響で、人々が山に入っていくようになり、里にある元の聖地が、山全体の信仰から、山頂に神が降臨すると考えて、山頂に磐座を築く様になる。此に後に神社が建てられて、麓の本宮、中腹の中宮、山頂の奥宮となっていく、此は山のみでなく、海の信仰にも此は影響していく。

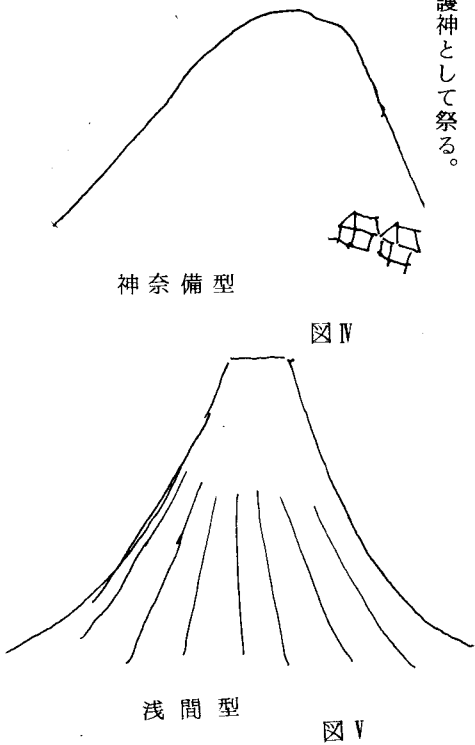
イ、巨岩

此が磐座として成立していくもので前記している。

石を加工したり、立てたり、周辺に石を配したり、小石を敷きつめたりしているものもある。

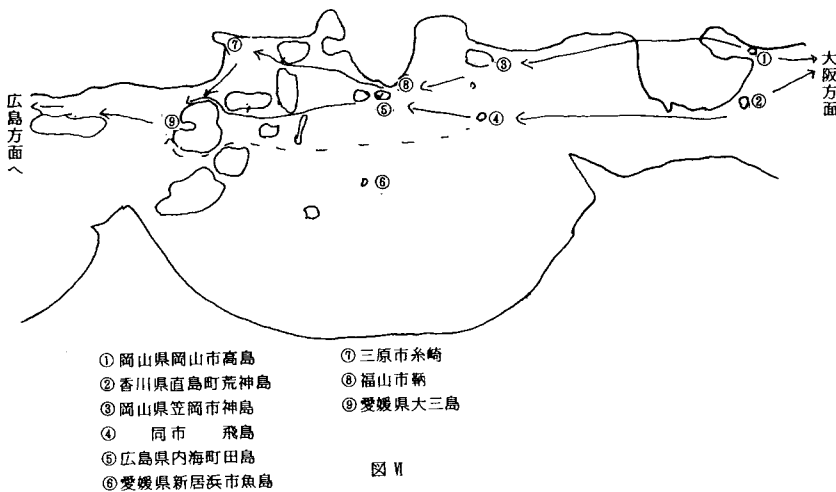
ウ、生産神

水神、豊作神等で、水が涸れない事を祈り稲作の豊作を祈り、水の湧く所、川の上流、田の付近で祭り、磐座等を築く、又、集落の外は悪霊の世界と考えていたので、集落外から悪霊が入って来ない事と、集落の守護神として祭る。



エ、交通神 図VI参照

古代での瀬戸内の航海は、満潮と干潮を利用して航海し、嵐等を恐れて、海神、島神に航海の無事を祈り海に供えたり、島に上陸して、供えたりして祭った。瀬戸内海では沖乗り方法と地乗りして祭った。



- ① 岡山県岡山市高島
- ② 香川県直島町荒神島
- ③ 岡山県笠岡市神島
- ④ 同市 飛島
- ⑤ 広島県内海町田島
- ⑥ 愛媛県新居浜市魚島
- ⑦ 三原市糸崎
- ⑧ 福山市新
- ⑨ 愛媛県大三島

図VI

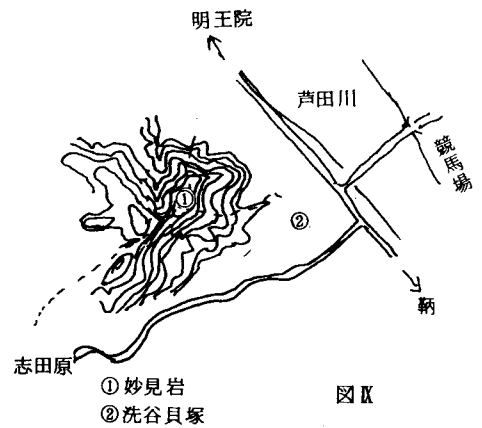
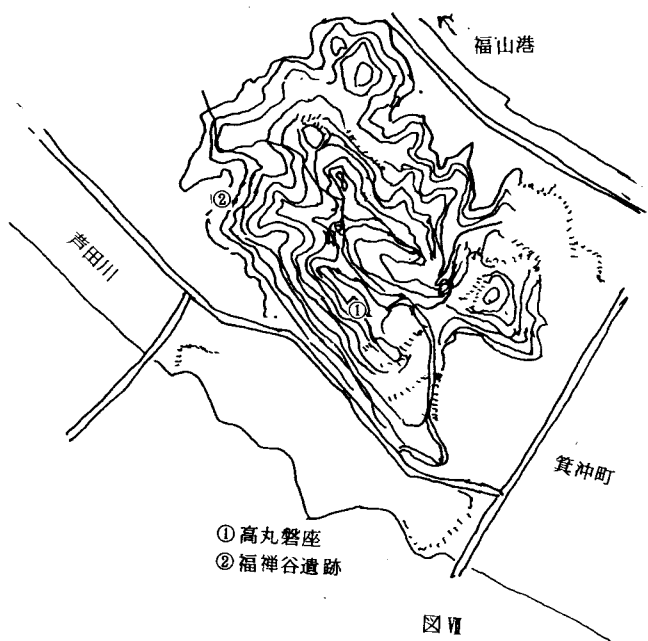
り方法があり、岡山県岡山市の港外の高島^{注3}を行き、児島半島（此ころは島であったと思われる）の間を通るか、香川県直島町の荒神島の沖を通り、笠岡市の神島沖か、飛島沖^{注6}を通り、鞆を経て、沼隈と田島の間を通り、三原市の糸崎を経て、蒲刈諸島の御手洗を経るか、因島か、岩城島を通り、大三島^{注7}を通って行ったと思う。

2、各論

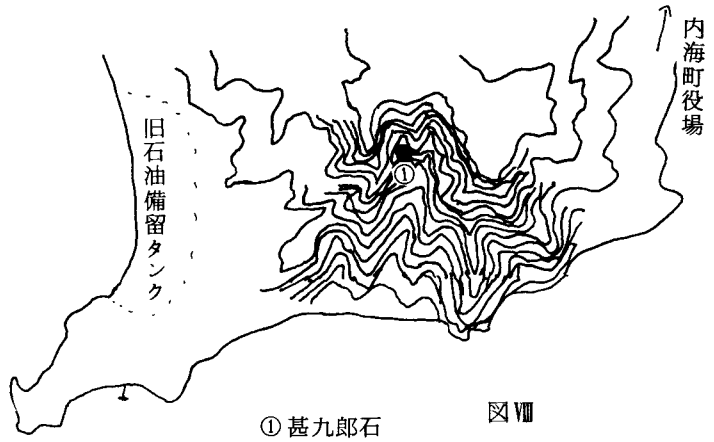
A、高丸磐座 福山市箕島町高丸 図Ⅶ、参照

各々の石の高さは1m以下で広さは約2m以下ぐらいで、下に5つぐらい、上に3つぐらいの二段重ねとなっている。石そのものは自然石を積んだと云う様な感じである。^{注8}

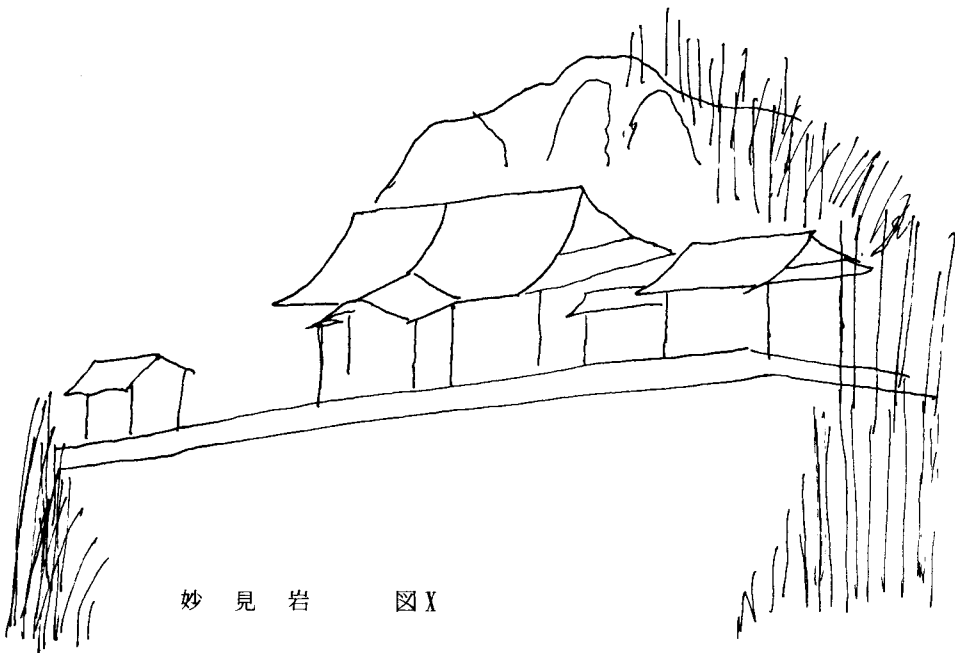
葛城神社の前に有り、本殿は無く、拜殿のみで、水呑町の葛城山^{注9}を望み得る。水呑町の葛城山を神体山^{注10}として拝み、此に磐座を築いたのであろう。祭祀をしていた人々の集落は、箕島町の片島に古墳群が有り、福禅谷に銅剣が出土しているので、此銅剣出土地付近に集落が有ったと思われる。



B、水呑町妙見岩 福山市水呑町妙見 図Ⅷ、Ⅹ参照
 妙見神社の裏山（岩）の事である。裏山頂の巨岩群、建物の横にある巨岩等で、その総称を妙見岩と呼称する。（もともと一つ一つの岩にも名称があるのであるが）岩そのものを信仰していたのではなくて、麓から見て此山全体を神体山として拝していたのではなからうか、それが後に裏岩群の巨岩信仰になり、水呑町に日蓮宗が布教されて、ずっと後に、此に妙見神社が建てられた。しかし、妙見神社の建てられている所



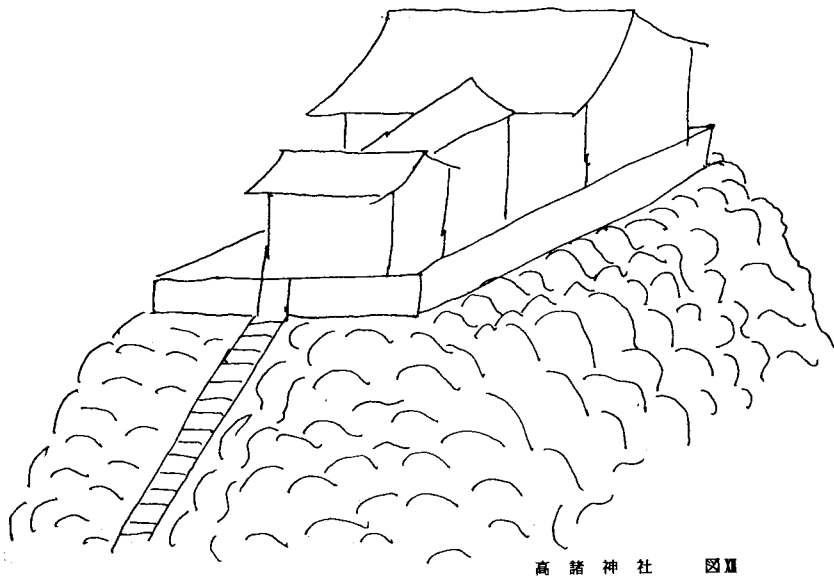
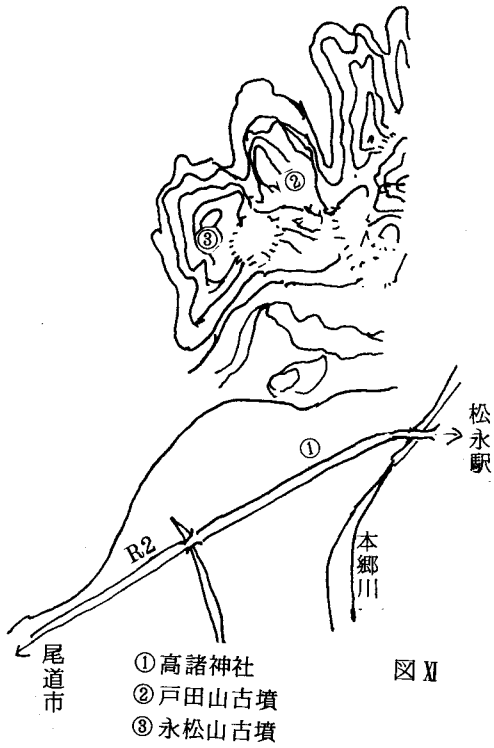
には何故か、巨岩群の有る所が多い。注11
 妙見信仰は道教の北斗信仰が、仏教に取り入れられたもので、もともと自然信仰であるから、それが巨岩と云う自然信仰と同調されたのであろうか。



C、高諸神社の磐座 福山市今津町 図Ⅹ、ⅩⅡ参照

戸田山古墳群の山と永松山古墳群の山の南に派生した丘陵の最端部に位置し、南は元々海である。尾道市の浦崎半島を眺む様な位置し、松永湾の最奥部にある。

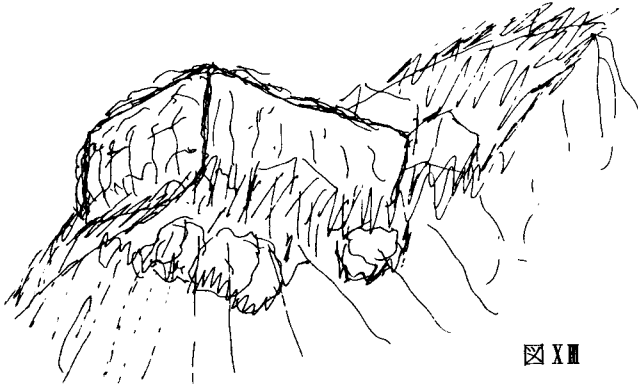
磐座そのものは現在の社の下の岩盤の事である。此神社は式内社と比定されており、北に古墳群等が多数有り、古くから栄えていた地と思う。此岩盤の上にも配石遺構が有る。つまり、岩盤を祭っていた人々が後に岩盤上に人工的に配石をして此を祭り、更に、神社を建立すると云う時代変遷を伴って人々の祭祀方法が変っている。



D、横島の甚九郎石 沼隈郡内海町横島 図Ⅶ、Ⅲ、X、XⅣ 参照

横島の沼隈町側ではなくて外海側の山の尾根に有る。石の大きさは高さ5mぐらい、広さ20畳ぐらい（石の上に登れるはずであるが、雑草等により、登れなかったが、道の上より見てこのぐらいの広さと思う。）此岩の下にも小甚九郎石と云う巨岩が有る。

此付近及び麓にも人家は無く、此島のずっと南に魚島が有り、此で祭祀遺物を出土し、航海関係の遺跡と考えられているので、航路は、田島と沼隈町の間を通っていたと思われるが、一般航路として、横島の沖を通るものもあったと思う。此横島より魚島を見れば、島の形が神奈備型をしている。

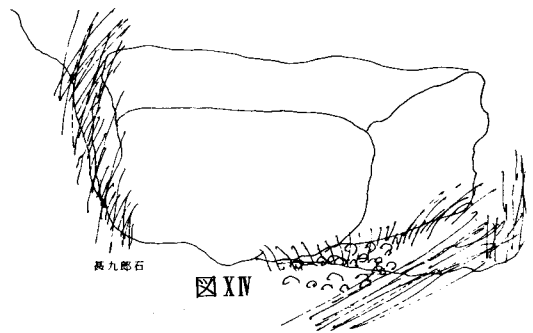


図Ⅲ

3、最後に

此で書いているものは、磐座そのものの信仰がほとんどされていないものが多い。県北では比婆山の刻彫岩や、^{注16}庄原のピラミッドが話題になり、共に一時信仰が衰えていて、麓の神社の方に祭祀の中心が移っている。此様に、麓で祈っていた祭祀が奥の神聖化を求めて、山頂へ移り、更に、人々の集落へと、麓へ祭祀の中心が移っていった。

注1 満潮や干潮を自由に動かし、島の砂洲を伸縮させたりする事のできる神様と考えて、船で航海する時に無事に航海できる様に祈った。
注2 陸では峠を自分の住んでいる神の世界から別の世界の接点と考え



図Ⅳ

て、神へお供えをする。

それと同じ様に、海では自分の住んでいる海の世界から別の神が支配する接点として島を陸での峠と同じ様に考えたり、又、海神と同じ様な事が出来る神とも考えた。

注3 5、6、7世紀頃の祭祀遺物が発見されており、磐境と呼ばれる巨岩も有る。

注4 祭祀遺物が有り、磐座と思われる巨岩も有る。

注5 遣唐使の一行が此へ寄港して詠んだとされる歌が有り、式内社も存在する。又、神島沖の高島には黒土遺跡、王泊遺跡が有り、特に王泊遺跡は東海地方の土器や九州地方東南部の土器が出土し、遠隔地域の土器の搬入が行なわれており、海上交通の重要な泊地と思われる。

注6 大飛鳥遺跡と云う8世紀から鎌倉時代までの祭祀遺物が出土し、奈良時代の重要な祭祀遺跡と思われる。

注7 大山祇神社が有り、弥生時代からの祭祀が行なわれ、海の守護神としても著名である。

注8 神社には神が住んでいる家と考える本殿とその神様を拜む場所として拝殿の主に二つは有る。

注9 奈良県と大阪府の境に誇る山で、南の全鋼山から葛城山を径て北の二上山までの総称を葛城山と呼ぶ。その山に葛城神、又は、一言主大神が降臨すると考えて、その山を崇拜した。それが後に、修験道の役ノ行者が葛城山で修行をしていた為に、修験道の聖地

となり、後に此らの神社が、修験道の影響等から各地に勧請されて葛城神社が建てられ、その御神体を葛城山と称した。

注10 神様は天界に住んでいると考えられている。それが地上に降臨した時に宿る物を御正体、又は、御神体と称した。その神の宿る物が山そのものであった時に、その山を神体山と称する。

注11 仏教は釈迦によって開られたが、すでにヒンドゥー教と云う民族多神教が広まっていた、そのヒンドゥー教の中の神を仏教に取り入れて菩薩となった様に、仏教が中国に伝来した時に中国の民族多神教である道教の中の教えを取り入れた。北斗七星を神格化して妙見菩薩と称して、その妙見菩薩を日蓮宗では重要に考えて、日蓮宗の布教と共に広まり妙見社が建立された。

注12 製塩土器を多量に出土した満越遺跡が有る。

注13 九二七年に出来た延喜式神名帳に記載されている神社の事で国が管理していた。

注14 戸田山、永松山、長波等に多数の古墳と弥生式土器も出土し、此付近に集落があったと考えられる。

注15 大木祭祀遺跡と云われ、弥生時代から古墳時代の土師器系の粗製土器や、鏡の模造製品白玉と青銅鏡が出土している。

注16 ピラミッド？と云う名称は気に入らないが、此山を神体山として北方に有る遺構群から祭祀していたと思う。

芦田川流域における

古墳の地域的理解のために（その1）

古墳研究部会

1、はじめに

備陽史探訪の会古墳研究部会では、神辺平野を中心として、芦田川流域の古墳群の調査を継続して続けている。

いうまでもなく、神辺平野を中心とするこの地域は、前期古墳から「終末期古墳」にいたるまで、数多くの古墳の築造が認められ、備後地域南部に目を広げてみても、有数の古墳集中地域である。地形的にも芦田川の流域として、まとまりのあることから、個々の古墳・古墳群の検討を通じて地域史をとらえるに際して、質的にも量的にも興味深い地域といえる。

しかしながら、分布調査はもとより、発掘調査などから、個々の具体像を知ることができる古墳・古墳群は比較的少ない。そこで、私たちが分布調査や墳丘測量などをおこなっているのも、ひとつには、そうした基礎的な資料の蓄積の一助となることを目的としている。

今回、福山市加茂町下加茂所在の合の坪古墳（正福寺裏山二号墳）の墳丘測量をおこない、その結果について報告した。資料としての個々の

古墳の内容もさることながら、こうした資料を地域史のなかでどのよう
に位置づけてゆくかについて、古墳研究部会での意見交換をもとに、地
域史把握の一視点を以下に提示してみたい。

2、小地域の設定（地域の平面的把握）

古墳の分布を地図上においてゆくと、平野を見下ろす山頂から稜線
にかけて数多くの古墳の存在が認められる。それらの古墳のなかには、
もちろん、さまざまな年代のものが含まれており、一様に理解すること
はできない。

そこで、それらの古墳のなかでも数の多い、古墳時代後期の群集墳の
分布をみると、東から順に、

- I、神辺町上御領・下御領を中心とするもの
- II、同 東中条・西中条を中心とするもの
- III、福山市加茂町栗根・芦原を中心とするもの
- IV、同 駅家町新山・法成寺を中心とするもの
- V、同 同 服部を中心とするもの

Ⅵ、新市町中戸手を中心とするものなどがあげられる。

地域の動向をとらえるのには、こうした後期群集墳を指標として小地域を設定することが第一段階といえよう。なぜならば、古墳時代後期における爆発的な古墳築造の背景には、(A)築造を可能にする生産力の発展を基礎とする、内的要素と、(B)自らも古墳を築造するにいたる人々の存在という、対外的要素とがあると思われるからである。

逆にいえば、後期古墳を有する小地域を、地域史の最小単位と考えたのである。

3、小地域の動向（地域の時間的把握）

第二段階として、竪穴式石室を代表とする前期古墳の築造と、それらに引き続いての古墳の築造が、それらの小地域とどのように結び付けられるか、という視点がある。

芦田川流域の前期古墳としては、新市町の潮崎山古墳、福山市加茂町の石槌山古墳群、同じく駅家町の掛迫六号墳（及びその周辺）などがその内容をうかがうことのできる古墳である。これらに加えて、福山市加茂町の妙言池古墳群、そして、合の坪古墳を含めた正福寺裏山古墳群が知られるにとどまる。

また、後期古墳でも、大型の墳丘・石室などをもち、独立した存在であるものをみると、神辺町の大坊古墳、福山市駅家町の二子塚古墳、宝塚古墳、山の神古墳、二塚古墳などがあげられる。

これらを、先に設定した小地域と地理的な位置関係をもとにみなおすと、(Ⅱ)の小地域に含まれる大坊古墳、(Ⅲ)の小地域に含まれる妙言池古墳群、(Ⅳ)の小地域に含まれる二子塚古墳など、が指摘できる。

ところが、前期古墳については、その数の少なさに示されるように、直接に個々の小地域と結び付けることは難しい。もちろん、そこに前期古墳の特徴が表れているのであり、巨視的な地域の把握が求められるのと同時に、副葬品をつうじて、個々の古墳の特色を見極めてゆく作業が必要となる。

4、個別資料の検討

ここまでの段階で、地域史の動向を知るための基礎的な枠組みができあがったのであり、個々の古墳の検討も、こうした小地域の動向を裏付ける、もしくは、小地域の設定を見直す方向でおこなわれるべきである。合の坪古墳を含む福山市加茂町下加茂の地域は、(Ⅲ)の小地域付近にあり、掛迫六号墳を代表として、前期古墳が集中的に築造されている。したがって、(Ⅲ)の小地域との関係とともに、芦田川水系である加茂川流域の動向としても、注目される地域である。

ところで、古墳を資料として見る場合には、次の要素に着目できる。

- 一、立地・墳形
- 二、外部施設（葺石・埴輪など）
- 三、内部施設（埋葬施設など）
- 四、副葬品

合の坪古墳については、墳丘測量であるために一と二の要素に限られる。

まず、一、については、加茂川の流域に広がる平野を見下ろす位置にある、前方後方墳である。同様の立地を示す掛迫六号墳に比べると、平野の奥部に近いところになる。また、正福寺裏山一号墳と比べると、稜線の下ったところになる。

さらに、この古墳の最大の特徴は、前方後方という墳形にある。もちろん、未測量の前方後円墳があれば、その中に前方後方墳が含まれている可能性はあるが、周辺地域に現状でも前方後円墳がほとんど確認されていないことから、芦田川流域においても特色ある古墳という評価ができればよい。

二、については、調査では、葺石や埴輪は確認できなかったが、古くには確認されたという。

地域的に考えると、背後の山塊は北には(Ⅲ)の小地域につながってゆき、南に目を転じれば掛迫古墳群を含む前期古墳の築造が認められる小地域につながる。また、加茂川をはさんでは、東に石槌山古墳群が互に見える位置にあり、時代をつうじて安定した古墳の築造を認めてよい。このことから、のちに(Ⅲ)・(Ⅳ)の小地域につながってゆく基盤となる地域であるとの見通しを得た。

墳丘測量という限られた調査ながら、私たちは、この古墳をつうじて下加茂の平野を中心とする小地域の解明が、芦田川流域の動向の解明に大きな意味のあるものであると考えた。

したがって、今後は小地域ごとの細かい分析を進めてゆかねばならない。そして、個々の特色と相互の関係の叙述を課題として、検討を進めるものである。

通勤路に沿って

猪原安子

私の住まいは西深津町にある。ここから、毎日飽きもせず、否、飽きてしまっているけれどほとんど習慣のように井原まで通勤している。

福山向けの渋滞を横目に渋滞がないのがせめてもの慰めと言ったところか。この通い慣れた道沿いにも歴史的なものが幾つもあるのだろう。

思えば古来人々が生活して来たのだから、どこをどう通ろうともいたるところ全て歴史背景のないところはない。町の姿が変わり、住む人も変わり、色々なことが忘却の彼方に押しやられようとも確かに先人たちは歴史を生きて来たのだ。改めて、日常は何げなく通っている道沿いにもんなものがあつたか眺めてみよう。

まずは、出発地点、西深津町から。西深津町と言う町名は随分新しく、その前は今の東深津町と西深津町とを併せて東深津町と言っていた。

そのころ私は東深津町と言うのはどこに對して「東」と言うのだろうかと思つたことがある。少し前のことを知っている人から見れば、こんな事は殊更に言うほどのことではないだろう。そうは言つても、深津町（ふかつまち）が城下町の名残をのこす米屋町・鍛冶屋町などと合わせ宝町と称されるようになったのは昭和四十年、それから二十五年余り

の歳月が流れている。深津町という町名をほとんど耳にする事なく育つて来た者が、大人になっているのだから先のような疑問も湧いて来ようというものだ。さてその東深津が對するところの深津町の由来はと言えば、福山城の城下町が造られるときに深津村より移つて来た人々が住んだから深津町と言う。その深津村こそは今言うところの西・東深津なのであるが、昭和八年深安郡より福山市に合併されるに当たつて、旧深津村は城下にある深津町に對して東深津町とされたのである。

そもそも深津と言う地名は古いものであるらしい。古代においては、字面から推測されるとおり、こちら辺りが港であつたが故に「深津」と呼ばれたと言うくらいだから、つまり古代からこの地名があるということだ。まさに母校深津小学校校歌の言う「遠い歴史の夢の跡、深津の丘」である。深津高地が半島のように深津湾に突き出していたのだ。普段は過ぎ去つた時の彼方に思いを馳せる間もなく、あわただしく出勤する。深津の港では奈良時代には市が立ち、市村と呼ばれて栄えたという。そのことをうかがわせる市村という名も私には耳にしたものではなく、目から入つてきた「昔の」地名なのである。

車は南蔵王町から一八二号バイパスに乗って蔵王町へ入る。福山東イ
ンターを過ぎると、よく見えないが右手に池がある。またすぐ今度は左手
に池が見える。この二番目の池が「千塚池」だ。その名のとおりこちら
辺りには、多くの古墳群があると言う。古墳は首長の墓なので、一族の
ものにとっては聖なる地であり、神として祭られ神社として残っていく
例は多い。そう思ってみれば、この池のところのバス停は「天神前」で
ある。(ただし、この天神さんが古墳に由来するかどうかは私は調べて
いない。)

千塚池からしばらく走ると神辺第一陸橋である。ここまで来る間、福
山向けはあきれほどの渋滞である。そろそろとノロノロと車の行列が
続く。一つ手前の信号を左折すれば、旧山陽道であるが、そこは対向車
の多さに圧倒されるので避けておく。一八二号バイパスを下りて三二三
号に乗って神辺の町のほうへ向かう。神辺と言えば本陣であるが三二三
号は神辺の町・神辺本陣を通らない。

神辺駅のところからバス停は神辺駅前・神辺川北・神辺高校前・古城・
神辺古市と続く。「川北」は高屋川を境に麓村を分けて川北村・川南村
とした名残なのであるが、川北荘と言えば中世に芦田川の北部地域に
造成された荘園であり、今の神辺一带を含めた地域であった。川北荘の
中心部は神辺川北であった。さらに三二三号を走ると御領であるが、こ
こもまた荘園であった。だがしかし、そうすぐには御領まで行かれない。
神辺川北のバス停のところ、信号の右手にあるのが天別豊姫(あまわけ
の)とよひめ)神社だ。この神社は平安時代、西暦九二七年に完成した

「延喜式」の神名帳に載せられているという。もともと神社はその土地
の人々が祭っていたものであって、極めてローカルなものなのに、中央
の権力はその勢力の拡大と共に地方の神社をも支配統制していく。天別
豊姫神社も延喜式に記載されているからには、中央の統制に取り込まれ
たということだ。そんな訳で神社にも位階が授けられ、天別豊姫神社は
従五位上に叙せられている。

この神社の後方、黄葉山一帯に広がるのが中世の山城、神辺城跡だ。
神辺城は建武元年(一三四四年)建武新政府より備後の守護職に補任さ
れた朝山景連が築いたと伝えられている。神辺城はまた、元和五年

(一六一九年)水野勝成が備後十萬石領主として入封したときに入城したと
ころでもある。そして、深津は水野藩の干拓事業によって新田となった。
国道二号線沿いのバス停を見ると、王子町から明神町にかけて千間土手
西・千間土手中・千間土手東というのがあがるが、このときの干拓事業に
由来する。神辺城から深津の方へ戻ってしまったが、続いて井原へ向か
おう。バス停の古城まで来てしまうと城は既に後方にある。次なるバス
停は神辺古市。文字どおりここは中世神辺城下で市の立ったところであ
り、神辺の町にかけて七日市・三日市・十日市の名を今に残している。

高屋川を渡って大きく右にカーブしながら下ったら、備後国分寺が近
い。国分寺は言うまでもなく天平三年(七二二年)聖武天皇の勅命によっ
て全国的に建てられた国分寺の一つである。六世紀半ばに朝鮮半島を経
て中国の仏教が入って来た時この外来の宗教はまず最初に支配者階層の
あいだに入って来た。このころの支配者階層の人々にとっての仏教は自

分たちを幸福にしてくれるものであり、また国をも守ってくれる鎮護國家のための仏教であった。だから奈良時代、東大寺を建立し、大仏を造り、各地に国分寺を建てたのも宗教としての仏の教えを広めるといふよりも、中央政府の権力の何たるかを仏教の威力によってあまねく知らしめんがためであった。仏教建築物は統一國家のシンボルであったのだ。まだ貴族も草葺きの家に住む時代、瓦葺きの建物の庶民に与えた印象は如何ばかりか。威力充分である。

御領の一里塚を過ぎればもうすぐ県境。井原市高屋町である。高屋には近世山陽道の宿駅がおかれていた。先に通ってきた一里塚は江戸時代に山陽道が整備されるに当たって旅人の目印と休息場にと設けられたものなので、当然一里毎にあるわけで、手前は平野、後は高屋の宿を越えて下出部（しもいずえ）と東江原の青木と続いていたのだ。けれども、三―三号を走るときには御領の一里塚だけが信号機に下げられた地名の札のおかげで、ここに一里塚があったとわかるのみだ。宿場は、神辺・高屋・七日市・矢掛と続く。福山・神辺に住むものは本陣といったら神辺本陣を思い、井原あたりで本陣といったらまず矢掛を思い浮かべるだろう。それにしても、どこを走るにしても新道とかバイパスを通るので町らしい町は目に入らない。神辺・高屋そして出部、旧道を通るのは旧道沿いに用のあるときだけだ。出部まで来れば会社までは五分もかからない。薬師の交差点を左折して、東南田、北ン田と交差点を過ぎればもう到着だ。

薬師のところはいつもNTTのところと違って、つい先日までは

薬師という文字が目にはいつていなかった。目には入っていても全く気にとめていなかったと言えば、東南田の三差路のところにある善福寺だ。お寺は少し奥まっであるのだが、三―三号沿いでかかど「善福寺」と書いてある。ここは足利三代將軍義満が祖父に当たる足利尊氏の冥福を祈って建てたと言われている。將軍義満は、南北朝合一を実現させ、また金閣を建てたり、いずれにしても私個人とは全く無縁の歴史上の人物だが、こんなに身近に縁の寺があるとなれば俄然興味がわいて来る。

仕事で井原近辺をうろろすることも多い。バス停の名や、いろんな案内板を見ると結構おもしろい。「高越城」と書いて矢印をつけた案内板もあるし、「与一扇的」と書いた大きな看板は饅頭屋のコマーシャル。「ここは宿場町、ゆっくり走ろう矢掛町」というのもある。史跡にはほとんど行ったことがないが、聞き覚えのある名称を見て、どことは分からないまでもこの辺にあるのだなと思ってしまうと見まわしてみたりもする。つい先日矢掛の南部、横谷というところへ行った。その途中「小迫大塚古墳三〇〇m↓」という小さな立て札を目にしては、ここにも古墳があるのかと驚いたりしている。そのときに洞松寺のそばも通ったが、あとで少し調べたら、天智天皇の時代に奈良興福寺の光照菩薩を請来して堂宇を建立したのが草創だということだった。矢掛の寺までその縁起は知る由もないが、さりとて自分の住む町内のことも知らないことばかり。もともとここに先祖の代から住んでいるのでないし、「昔は……」という年配の人の昔語りを耳にした覚えもあまりないから仕方ないのかもしれないが、足元をすくわれるようで心もとない。

ともかく、通勤路沿いだけでなくあちこちうろろすることがあるが、目にするものすべてそれぞれに歴史の中にある。ほんの少しでもその由来などを知ると、全く気にかけていなかったものさえ、一挙に近しいものに思われてくる。

(一九九〇・九・一五)

編 集 雑 記

原稿募集の案内を出してから丸1年、やっと発刊にこぎつけたという安堵感と、早く原稿を提出して下さった方には遅れて申し訳ないという想いでいっぱいです。

本当にお待たせしました。第9集を発刊してからすでに5年、今年こそはと思いながらも他の行事や会の運営に取粉れて遂にここまで来てしまいました。愛読者の方からは「山城志はいつ出るのですか」書店の方からも「お客さんが山城志のことで来られているのですが」という電話を何度もいただき、そのたびに周囲の熱い期待を感じていたのですが……。

改めてページをめくってみますと今昔の感は否めません。かつての常連も今は亡く、新しい会員諸氏の投稿が目立ちます。

思えば初めて「手書」の山城志を世に問うてからはや10年、歳月は流れ、顔ぶれも変わりました。しかし、その目的であった「自分達の意見を自分達の手で」歴史は「志(こころざし)」であるという固い意志はいささかも変わっていません。

この雑誌は私達会員全員のものであります。会自身が11年目に入った今日、山城志の必要性は益々増大すると考えます。今後も皆様の御協力を切に期待します。

平成三年辛未卯月十三日

帝釈庵主謹誌

備陽史探訪の会機関誌

——山城志 第10集——

1991年4月13日

編集 備陽史探訪の会
) 広島県福山市多治米町5-19-8
発行 TEL0849(53)6157

印刷 塩出印刷有限会社
) 広島県福山市引野町1-26-7
 TEL0849(41)0970
